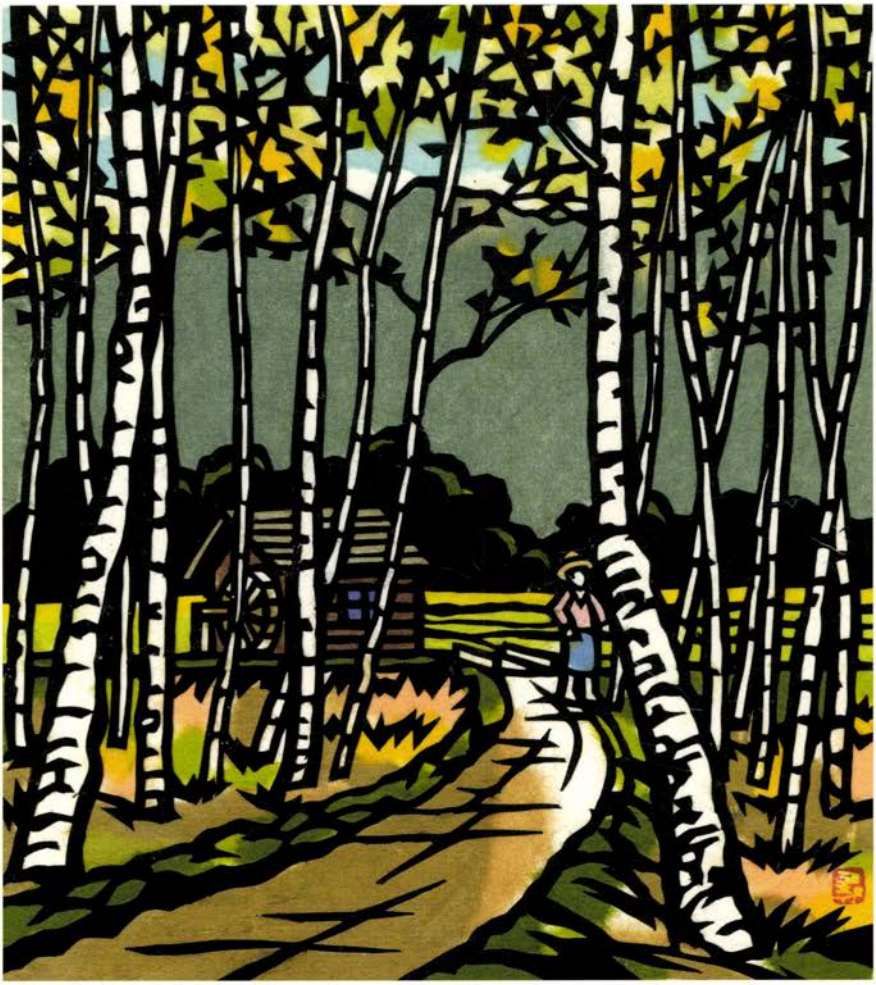
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十三年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇一三号



日川協加盟

平成二十三年度六賞発表

No. 1013

十月号

第17回 川柳塔まつり

と　き　平成23年10月10日（月・祝）
午前11時開場・午後1時開会

ところ　ホテル・アウィーナ大阪　4階　金剛の間（中・西）
大阪市天王寺区石ヶ辻町19－12　TEL 06－6772－1441
（近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車）

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし　「R・H・ブライスと川柳」
R·H·ブライス研究者・岐阜保健短期大学教授　吉村侑久代　氏

兼　題
「勢　い」　神奈川　菊地政勝　選
「平　均」　鳥　取　倉益一瑶　選
「積　む」　青　森　佐藤古拙　選
「気くばり」　兵　庫　黒田能子　選
「アップ」　大　阪　村上玄也　選

事前投句　「　道　」**（9月1日必着）**　川柳塔社　主幹　小島蘭幸　選

◎各題2句・欠席投句拝辞
出句締切　正　午（午後4時半終了予定）　※各題の「天」位に賞呈
◎会　費　2,000円（当日いただきます）　※記念品　呈
ご昼食は各自でお済ませください

《懇　親　宴》

と　き　平成23年10月10日（月・祝）　午後17時～19時
ところ　ホテルアウィーナ大阪　3F　葛城の間
☆会　費　7,000円（会席料理）　先着申込　120名様
☆宿　泊　ホテル・アウィーナ大阪　8,000円（朝食付き）

＊事前投句および懇親宴·宿泊のお申込は**チラシに刷りこみのハガキ**（御希望の方は事務所）にて9月1日（木）までに本社事務所宛、お送り下さい。
＊懇親宴・宿泊のご送金（句会費除く）は同封の振込用紙でお願い致します。

主催　川柳塔社
大阪市天王寺大道1丁目14番17号201
〒543-0052　☎·FAX 06－6779－3490
振替　00980－4－298479

共選…八木千代さんと

小島　蘭幸

橘高薫風七回忌・西尾栞十七回忌特集号に体調の勝れない中、八木千代さんは自選集に投句をされています。先日開催した、竹原川柳会創立55周年記念川柳大会にも優しい言葉を添えて事前投句をいただきました。お手紙を読みながら私は、平成11年に鳥取で開催された川柳塔南大阪・梨花合同吟行会を鮮やかに思い出していました。私に与えられた課題は「飛天」、共選の相手が八木千代さんだったのです。この年の3月に千代さんは、川柳句集「椿守」を上梓されています。序の中で橘高薫風先生は…千代さん、これからもきゃらぼくのお仲間と足並みを揃え、川柳塔へご尽力を頂きたい、私の片腕としてご支援を心からお願いする…。と結ばれています。

書きすぎぬように大事なひとへ書く　千　代

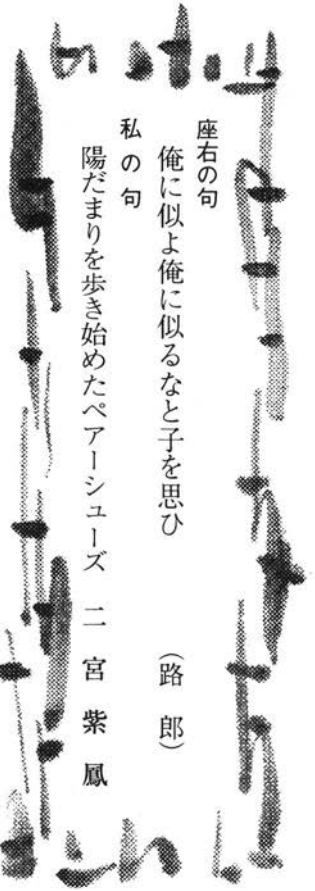
川柳塔まつりで買い求めた「椿守」に書いていただいた作品です。川柳を〝川柳さん〟と愛情を込めて呼ばれる千代さんの作品は格調が高く女性らしい美しさが溢れています。

八木千代さんは、当時52歳だった私にとって、あこがれの作家だったのです。その千代さんとの共選でしたから、選句にはとても緊張して挑んだのを覚えています。

私に続いて壇上に立った千代さんの披講は正に驚きの連続でした。実に入選句の半数以上が私の入選句と同じだったのです。共選は数多く経験している私ですが、あんなに同一句があったのは後にも先にもないことでした。よっぽど二人の選句の波長が合っていたのだと思います。

梨の花天女が降りて来そうなり　天　笑
凭れ過ぎては吉祥天に眠られる　諷　人
おろかさを愛して降りて来た飛天　森　子
燭守りながら飛天も燭となる　日枝子

共選は選者はもちろん、投句者もとても勉強になります。誌上大会、記念大会、これから共選はどんどん増えていくと思われます。大いに挑戦して個を磨いて欲しいと願います。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）

私の句

陽だまりを歩き始めたペアーシューズ　二宮紫鳳

川柳塔　十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「木曾開田高原」

■巻頭言　共選…八木千代さんと……小島蘭幸…（1）
神の道……竹治ちかし…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
自選集……（46）
温故知新……（49）
川柳塔の川柳讃歌(82)……木津川計…（50）
麻生路郎句抄……（51）
水煙抄……川上大輪選…（52）
追悼　清水利武さん　ありがとう……徳山みつこ…（73）
平成二十三年度　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞　檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞……（74）
若い作家に与える言葉……川柳雑誌（S35年・新春号より）…（83）
誹風柳多留一一篇研究 74……（84）

神の道

竹治　ちかし

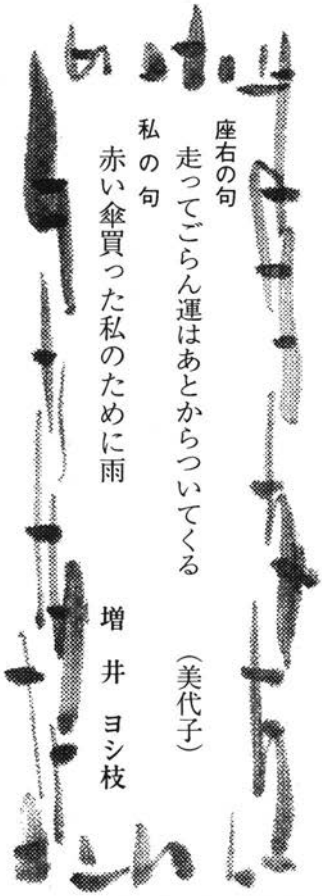
世界各地の遺跡の中には太陽信仰の表れか太陽の動きと関係があるものが数多く見られる。この神の道もその一つである。

夏至の日太陽は和歌山県の南端の岬より出て、神話の国引きの話で有名な島根半島の西先端の岬に没するという。その二つの岬は、偶然なのか字は多少違うのであるが呼び名は「ひのみさき」という地名である。この二点のひのみさきを結ぶ線、太陽が通る道がすなわち、神の道と言われるものである。

そして驚くことにはこの神の道の線上に、あの有名な荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡が存在しているのであり、荒神谷遺跡では昭和五十九年三百五十六本の銅剣と、そして翌年十六本の銅矛、六個の銅鐸が発掘されている。もう一方の加茂岩倉遺跡では、平成八年に三十九個の銅鐸が発掘されている。

現在、出雲大社の東側に建築された古代出雲歴史博物館に双方の出土品が、テーマ別展示室に「青銅器と金色の太刀」という表題で展示されており、それらは一見の価

愛染帖……新家完司選…(86)
檸檬抄「錯覚」……福士慕情・池森子共選…(90)
一路集「叫ぶ」……高島啓子選…(94)
「はしご」……升成好選…(94)
「かなり」……宮脇道子選…(95)
初歩教室「港」……鈴木公弘…(96)
秀句鑑賞「同人吟」……西出楓楽…(98)
「水煙抄」……柿花和夫…(100)
せんりゅう飛行船(10)……新家完司…(101)
『麻生路郎読本』余滴(5)……桒原道夫…(102)
九月本社句会……(106)
各地柳壇(佳句地十選/奥時雄)……(110)
十月各地句会案内……(124)
柳界展望……(126)
■編集後記……朱夏・いさお・勝弘・まつお…(128)



座右の句

走ってごらん運はあとからついてくる　(美代子)

私の句

赤い傘買った私のために雨　増井ヨシ枝

値がありまた圧巻でもあるのだ。

また、出雲地方には「雲太、和二、京三」と言われる言葉が残っている。これは平安時代の建築物の高さのランキングであり、一番が出雲大社の神殿で、二番が大和の東大寺大仏殿で、三番が平安京の大極殿だということである。

この記述が眉唾物のように語られてきたのだけれど、平成十二年に岩根御柱と呼ばれる三本の大木を束ねた直径三メートル六十の柱跡が発見され、言い伝えられていた巨大神殿の実在がより確かなものになった訳である。それで言えば、二番の東大寺大仏殿が当時十五丈なので、出雲大社が言い伝え通り十六丈(約四十八メートル)あったとしても不思議ではない。

夏至の日の太陽は「北半球で一番大きく美しい太陽」と言われている。もちろん出雲の日御碕から眺める夕陽はとても素晴らしいものであるし、また岬近くにある日御碕神社は「日沈宮」とも称され出雲大社から見て夏至の日没の方位にあり、それと反対に、冬至の日には日御碕神社から見て出雲大社の地点から太陽が昇ることになるという位置関係になっている。そう考えていくと、歴史の話は尽きることはなく、益々想像の世界へと引きずりこまれるのである。

川柳塔

倉吉市　牧野芳光

人ゴミに僕の臭いを消しに行く
雑念があれば包丁など研げぬ
憶病な魚ばかりが生き残る
息をする間も水は洩れている
水たまり選んだように歩いている
若者の言葉に通訳が欲しい

和歌山市　牛尾緑良

お座りもお手もしたのに笑われる
六法全書そんな時間もあったのか
筆ペンも思いは同じ摩訶般若
カタカナに埋もれた新聞紙を閉じる
五臓まだ三つ残っている命
讃美歌へみな友となるすこやかさ

堺市　柿花和夫

酸いも甘いもいっぱい食べた胃に感謝
匍匐前進妻のごきげん直るまで
達筆のハガキ誤字まで美しい

小島蘭幸選

闘志など微塵も見せずご返杯
エプロンの裏にお袋の自分史
鯛焼きをスイーツと呼ぶセレブたち

堺市　桒原道夫

腹筋が割れてた頃の入道雲
向日葵を罵っているさびしい人
筆箱にタンポポの絮らしきもの
放課後にさめざめ泣いているバケツ
この丘のここから見てるよその町
蝙蝠の飛ぶ夕暮を革鞄

大阪市　古今堂蕉子

腹立てて飲んだら酒も寂しかろ
下戸の妻もらいその分俺が呑む
酒場から意気投合を連れ帰る
飲む誘い断らないが仁義とか
接待の酒はまずいとグデンぐでん
家一軒呑んだと下戸の妻思う

和歌山市　柏原夕胡

お入りくださいマシュマロのこころです
さみしい人おいで一緒に泣きましょう
わたくしにごめんなさいが多すぎる
煩悩が環状線に乗っている
方向音痴なのでこの街出られない
早送りみたいに暮れてゆく月日

松江市　松本文子

寒い寒い暑い暑いと生かされる
裏の道知らずに生きた愚か者
ダンゴ虫賢い姿ではないか
何故生れ死ぬか蝉たちのあの騒ぎ
必死で生きれば死ぬことも楽だろう
のらりくらりおてんとさまも沈まない

西宮市　亀岡哲子

帰ろかな家で夫が一人待つ
お返しのいらぬ程度の供花する
眠る児の産毛が揺れるうちわ風
生きるとや大きなクイズまだ解けぬ
夢の地図拡げ果てない一人旅
熱中症と訃報にのらぬよう生きる

羽曳野市　徳山みつこ

菜園のきゅうりひと夏ありがとう
猛暑日は脳死している私です
被災地へ議事堂移転しませんか
汗かかぬ蟻も結構いるらしい
粗衣粗食して経済を止めている
放射能身をまるめたかダンゴ虫

鳥取市　森山盛桜

居残るか行くか海抜ゼロ地点
欄外に時々僕の名が見える
喋るのが億劫マスク掛けて出る
昨日まで確かに父の座が有った
喋り出すまでは貫禄有ったのに
致死量を超えて飲む筈などは無い

大阪市　鶴田遠野

商いにある融通という目盛り
決断のできぬ女を持て余す
青雲を抱いて都会の垢になる
また聞きの話焦点ぼかしとく
ゴム判を押してる軽い熨斗袋
夏休み豆台風が去って秋

大阪市　谷口義

大抵は把握している昼の月
普通預金決して損はさせません
クラス会お布施の事も聞いておく
立ち枯れの向日葵ご苦労であった
午前中は少し働いています
遺言状おさらいをした様子あり

三田市　堀　正和

始球式どこへ投げてもストライク
デパ地下に男が増える俄雨
お見舞へニコニコ顔を連れて行く
クジ引きで決めた役ですお気軽に
残高が減っても夢は萎まない
欲張りな僕には出来ぬ消去法

堺市　志田千代

皮むきの難儀労う栗ご飯
オフクロの味を越えたと言ってくれ
運命のあなた選んだピピピピピ
お悩みは一重まぶたと中二の子
息継ぎを競い合ってるナムアミダ
気まぐれな夫と猫の仲がよい

東かがわ市　川崎ひかり

うれしいな地球は今も青いのだ
二十五時静かに今日の面外す
盗聴器あったら困る舞台裏
特価日は同じ匂いの両隣
子に見せた背中だんだん干からびる
私に図書館というかくれ場所

泉佐野市　山本蛙城

男の火消すなと猛暑日が続く
ご老公消えりゃのらくろ待ち望む
人生の酸化ひっそり書架に見る
来た路は蟻だったのか蝶なのか
ドンキホーテと朝の鏡に会う卒寿
がんばろう日本ほしがりません思い出す

長岡京市　山田葉子

大人にはなれないとこもチャーミング
ケイタイは必要ないと威張ってる
ターミナルまだまだ子等がそこかしこ
あわやという断層こえてきた若さ
黄門の印籠楽しみに見てた
自転車で行けるわたしの小宇宙

岸和田市　岩佐ダン吉

直角のような男が友にいる
でかい声正論だとは限らない
川柳でくらしの一揆呼びかける
ひっそりとまた敢然と九条よ
あと何枚履歴書書けばいいだろう
獄窓でかすかな光見る彬

京都市　西村益子

極楽の風の谷間で一眠り
サプリメントまた変えたのねお姑さん
釣り三昧気のむくままに西東
二つ三つゴーヤを食べる暑気払い
叩く蚊にも親兄弟がいるだろう
暑気払いすき焼きビール友が来る

尼崎市　長浜美籠

あんのんと経典ひらく盆三日
打ち水の風夕暮れを駆け抜ける
変り身の早さでチャンス掴みとる
いいこともあるさと風呂の湯が溢れ
完璧な答を探すちぎれ雲
神経に触る半音高いセミ

神戸市　山口美穂

二番では駄目なんですよ栄誉賞
亡母の写真そっくり今の私です
水を下さい愛も下さい植木鉢
拗ねてみても世の中何も変らない
節電の夏を耐えます老犬と
亡父母と今日を語って墓掃除

奈良県　渡辺富子

魂を揺する書物と夜を明かす
波に消えた魂を呼ぶ盆の月
海色のスカーフ猛暑撃つ気分
列島を囲むじゃじゃ漏れ放射能
墨塗った教科書戦さ嫌い抜く
この頃は記憶の底が抜けてきた

河内長野市　植村喜代

独り言ストレスはいているのです
芸能人食べて歩いて芸のうち
陽君はいいなあ三歳はいいなあ
美味しい物食べてる時は皆笑顔
どう見舞おうか被災地の友へ
程々を知らぬから終りを見てしまう

米子市　吉田陽子

太陽の力で今日も起こされる
お盆にはせめて会おうよちぎれ雲
ねじ花の頑固冗談通じない
語り部になって古代の蓮開く
栗拾い頭に森の地図がある
一日が溢れる夜の脱衣籠

八尾市　髙杉千歩

妥協するチャンスだメール入れておく
煽て上手なもう一人の私と
そうかそうかと仏聞いてくれ
万感に震える八月よ昭和
充電の利かない脳で鶴を折る
ざっくばらんに話せる友と露天風呂

出雲市　伊藤玲子

黄昏れて振り返ること多くなり
幸せでやっと話せる奮戦記
何をくよくよ丈夫なだけで儲けもの
おだやかな海を怒らせないように
出雲弁のお願い神に通じたか
懸命に咲いて天寿の夏椿（榊原秀子さん逝く）

三田市　久保田　千　代

目いっぱい明日への夢を抱いて寝る
まん丸い心で明日の米を研ぐ
だんだんと固有名詞の減る会話
ひと呼吸おいた話が重くなる
息抜きが過ぎてエンジンかからない
破られた頁に深い疵のあと

和歌山市　喜　田　准　一

幅のある見方意見に芯がある
決断の出来ぬ弱さに行き詰まる
笛太鼓鳴ればまだまだ血が騒ぐ
相槌に救われました正念場
こだわっているとアイデア逃げて行く
憂いことは忘れ深山の風と水

藤井寺市　鴨　谷　瑠美子

たましいは預ける曲が終るまで
自画像は手に一杯の赤い薔薇
ほとぼりの冷めた噂と歩き出す
手を貸してもらい花壇で咲いている
かのひとの面差しがある甲子園
逃げ道に転がるケセラセラのうた

和歌山市　松　原　寿　子

おふたりの愛の絆にある未来
見詰めあい涙に濡れている誓い
笑いと感動すこし涙の物語
人情の熱さ重さに湧く拍手
美しい秘話会場を盛りあげる
ぬくもりがまだ耳にある遠花火

松山市　宮　尾　みのり

もう闊歩することは無い老いの足
感謝して他の力借るひとり旅
娘の家の秩序へ老いはお客様
勉学もおしゃれも上手都会っ子
不器用で群れに入れぬ猿もいる
万策が尽きた時には寝るとする

枚方市　丹後屋　肇

地産地消待ったをかける線量器
立秋や圧迫骨折という告知
炎天下見舞いの客が長居する
同病の失敗談義気が楽に
お通じがあって誰にでも会釈
老いらくの坂で少女と待ち合わせ

犬山市　金　子　美千代

晴れ女ですもてもてのスケジュール
衝動買いちょっとリッチになる気分
万物に感謝年寄りくさくなり
歩留まりの悪い頭をマッサージ
涼風をいただく詩集との出合い
ありのまま生きたし無くす物はない

神戸市　山口光久

馬が合う人に出会ってからの運
鍵穴から見える程度の視野である
真ん中にでんと構える無神経
触角が老いてきたので唐辛子
穴のあくほど睨んでも敵が上
罠でいい魔女の力を借りたい日

奈良市　米田恭昌

地デジ化に孤老昭和を懐しむ
地価下落でもまだ遠いマイホーム
遠い日の蚊帳に放った蛍の火
節電に早寝早起きさせられる
転び癖ついて八起き目忘れてる
ペットまで老妻になついて憎らしい

相生市　中塚礎石

肩書を付けられ背伸びする構え
家計簿は衝動買いと分かる桁
婆ちゃんは墓に避難をすると言う
厳格な父も夢では笑ってる
耳よりな話へ蟻が寄ってくる
ゆっくりと歩けば家族ついてくる

堺市　矢倉五月

百均で買ったお皿がもう五年
人生の夕立に今叩かれて
新聞を読みつつ鼻毛抜いてはる
晩酌が今日いちにちの句読点
溜め込んだ切り抜きやはり捨て切れず
まさかよりやはりの事故が罪深い

箕面市　広島巴子

子の帰省心身ともに活性化
子の帰省いつもの倍の家事こなす
バッタ取り孫よりはしゃぎ野をかける
ごめんねとエアコン温度一度下げ
掛け声も弾むねぶたのど迫力
天国へ花火で示す心意気

西宮市　山本義子

一匹は気楽ですよと空は青
一匹が二匹になると戦なり
天道虫それなり化粧する恋路
蜘蛛一匹保証人なく家を建て
ゴキブリが一匹残る世紀末
鬼一匹わたしの胸を離れない

府中市　馬場利子

燃え上る炎を抱いて風の中
追って来た千の風から愛もらう
幾山河越えた夫婦にあるリズム
身の丈の幸せに咲く茄子の花
草ばかり伸びて利息が上がらない
住みなれた過疎地に馴じむ遠花火

近道を選んだ付けが足にくる
綻びをなおす糸通しの時間
浮き草にも根がある家のフリーター
鳴かず飛ばず貧乏神も知らんぷり
カラフルな薬が増えて忙しい

和歌山市　福本英子

一歩まだ踏み出せずいる苦労性
何にでも染まる豆腐がいとおしい
夢の夢追ってほんわか生きている
染まり切るまでは路傍の石でいる
息継ぎが下手で咳込む人いきれ

和歌山市　武本碧

ははと視た夕陽切ない赤だった
揺すらないで下さい火種抱いてます
おしゃべりな赤に楔を打っておく
雨の日はモカとじっくりパズル解く
雪の峰にょきにょきポパイ立ち上がる

和歌山市　木本朱夏

いい目覚め腕が鳴りますクッキング
ご近所へ自慢の孫を連れ回す
目指すものあって五体が奮い立つ
もったいない他流試合せぬ柳友(とも)よ
食べる物みな美味しくて太れない

和歌山市　田中みね

炎天下今日も三食昼寝付き
食欲旺盛ビールゴーヤで夏終わる
復興へこころひとつに夏祭り
これからも灰汁を晒して生きてゆく
蝉しぐれ浴びて供養の花手桶

和歌山市　玉置当代

病んでから独りよがりの分を知る
友優しベッドに添うた守り神
峠越しまたわたくしに羽根生える
リハビリの一歩手応え掴んでる
仏壇へ先ず退院の御灯明

和歌山市　堀冨美子

復興増税ならば我慢を致します
節電へ昔の良さが甦る
わたし自身思いのままに動かせず
大掃除する度過去が捨てられる
昼下がり隣の電話鳴り止まぬ

和歌山市　坂部紀久子

さるすべり薄桃色に揺れて夏
節電へ命の保障ありますか
丸ごとの西瓜を買ったことがない
安全神話の答えが波に攫われる
フェルメールの絵と静寂を共にする

和歌山市　古久保和子

蟠り解けて明日へ種を蒔く
掌の幸をこぼさず包み込む
封筒の中は女の発火点
ここで泣きここで笑った秘密基地
ロボットに手を引かれてる白昼夢

和歌山市　上田紀子

原発を考え直す八月忌
白雲に今日の幸せ誕生日
心根を素直に書いている余生
お月さま私の部屋を照らし出す
真夏日もまだまだ仕事続く幸

和歌山市　松尾和香

優勝した小二欲しがる金メダル
人情の方程式が解けぬらし
目覚まし時計がまっ青になる蝉しぐれ
耐震工事の学舎の前で耐える夏
日直も大変だろうお水遣り

海南市　堂上泰女

まだ八十路自立の誇りある背中
貰うのが当り前だという老化
ナホトカの潮騒滲む抑留記
お隣の芝生が枯れていく不況
ハミングで弾みをつけるはたきがけ

田辺市　岡本昇

原爆を忘れぬ世代汚染され
雨降っても放射汚染で不安です
バランスを崩した地球保険なし
初盆は交通整理いる仏
さるすべり　放射汚染を忘れます

鳥取市　宮脇道子

働いた手だが人前には出せぬ
アリガトウ夫に言われて身構える
重箱の隅は食べないのがルール
ため息の中に微毒が混ぜてある
正直を通すと非難あびそうだ

鳥取市　福西茶子

言いにくいこと人形にしゃべらせる
金魚のエサ忘れてる日と二度やる日
青くさいレモンに味方してやろう
四番バッターばかりでチームまとまらぬ
解凍をすると愚かな僕がいる

鳥取市　両川無限

胸底に刺ったままの針がある
ＤＮＡバランス悪いまま発芽
酸化した脳に香水振ってみる
ストッキング脱ぐわたしの隙だらけ
エアコンの森がなかなか抜けられぬ

鳥取市　倉益一瑶

論評も実体験に押切られ
人生は芝居ではない二幕ない
沈黙の父の背なには愛がある
虫眼鏡心の奥は見抜けない
道草に負けない意地を教えられ

鳥取市　田村邦昭

振り向くようちょっと意地悪してあげる
羊のような容姿をしててきつい人
多く望まずそこそこ元気こそ平和
私よりしんどそうですわが主治医
エレベーター沈黙の群一体感

鳥取市　高浜勇

大奥のざわめき偲ぶ閑古鳥
住み慣れていつしか我が家城になり
プライドの固まり城と十七歳
源平の城恍惚と蘇る
甲冑のストレス解す城あかり

鳥取市　平尾菜美

大家族と戦後支えてくれた母
その日まで強さを母は失わず
月命日貴方とモカでカンパーイ
暑さとのいくさが続くまだ米寿
風雪に耐えた卒寿よ疲れたね

鳥取市　近藤佳子

立ち直りたくて良く出かける渚
灌漑用水路の西瓜うまかった
岩清水きれいなコップ置いてある
小鳥のつぶやき膝崩さずに聞く
老いたればこそ鮮やかな夏スーツ

鳥取市　吉田孔美子

二番ではだめとなでしこ勝って見せ
電話切るきっかけさがす長電話
暑さよりくらくらとする冷やし過ぎ
置き場所を忘れて困る内緒金
受信だとつい安心の長電話

鳥取市　深澤千恵子

百までと決めた命に事故多発
善悪の清算方程式が無い
ストローの先に妬みが絡みつく
逝くまでは頑固親父で通したい
善人の仮面をはずす時が無い

鳥取市　中宇地秀四

自然無情震災地にも雨たぎる
また一軒思い出の家更地なる
熱中症車で森へ避難する
地デジ化にテレビ一台やっと捨て
定年後今年も畑ものとれず

鳥取市　池原天馬

鳥取市　吉田弘子

諦めぬなでしこ達をお手本に
被災地のテント厳寒から猛暑
東北の球児応援知らぬ間に
ガン検診心配ひとつ消えました
スカートよりズボン私の流儀です

鳥取市　西川和子

きっかけの掴めぬままに時流れ
きっかけはどうあれ五十年が過ぎ
恩返しするきっかけをまた逃がす
きっかけを探すお笑い見ています
喜ばれご恩返しの真似事に

鳥取市　中村金祥

バランスのとれた夫婦になる喧嘩
AKB見ているだけでくらくらだ
行列に並べば福がありそうだ
ダラダラの会議半日棒にふる
タコ焼パーティ僕の心も丸くなる

鳥取市　竹口清信

九分九厘人間の顔して生きる
人間の振りして生きるから悩む
生きて居て悩み無いのも味気ない
奔放に生きた気がする今日までは
明日のことあすが来てから考える

鳥取市　前田孝子

妥協して育てた花の曲線美
極楽に行くと決めてる愚か者
物言わぬ犬にも悩みあるようだ
洗濯の干し方一つ流儀ある
オブラートに包んで喋る思いやり

鳥取市　春木圭一郎

目の前のことに全力それでいい
報われぬ努力もきっと糧になる
前向きで楽天的な人が好き
筋通しいさかいばかり繰り返す
考える前にまずは行動してみるか

鳥取市　鈴木一弘

懐に原発という火種もつ
国民の胃の腑揺さぶる放射線
濡れ衣が剥がれた素肌うつくしい
脳味噌のほこりを払う柳風
借金の山を残して山に行く

鳥取市　鈴木公弘

ヨイショなどできるか日本中夏だ
好みとは西瓜・南瓜の違いかな
青虫が食ったキャベツの清楚感
熟れたモモ満月の夜に酸化する
俺はオレ曲がったままの胡瓜食う

鳥取市　福永　ひかり

つまんでも箸の力に負けぬ黄身
水加減米の性格読んでいる
来客のてんやわんやも幸のうち
労いが入ってスッと飛ぶ疲れ
一人より二人力に代えていく

鳥取市　永原　昌鼓

なでしこの大輪　萎まないように
善人を演じた芝居すぐばれる
被災地へ朝は必ずやって来る
復興へ政治分裂しておれぬ
安心を売るふるさとの道の駅

鳥取市　夏目　一粋

足し算と掛け算だけで生きたいの
馬齢を重ねて知らないことばかり
天の声地の声中和して生きる
どん底で耐えても孤独耐えられず
バランスの中に仏と鬼がいる

鳥取市　土橋　はるお

西方の空にきれいなあかね雲
生ビール引っ繰り返しもう一杯
何であれ山盛りあればなごやかに
碑文が立派石を引き立てている
きっかけを教え下さる仏さま

鳥取市　有沢　せつ子

待っていた雨は葉っぱをかするだけ
猛暑日に行かねばならぬ歯の治療
着れぬ服思案の末にまた仕舞う
茄子とまと採れたて貰うありがたさ
お笑いのテレビははしゃぎ過ぎないか

鳥取市　池澤　大鯰

自信なさ雄叫びなのに悲鳴めく
風船は盾をはずしてはじけ散る
子は知らぬ親が盾にもなった過去
盾となる本命ならばまあいいか
盾つかせ一人前の男にす

鳥取市　奥谷　彩子

潮騒に一夜のドラマ生むキャンプ
あなたの愛に一喜一憂するこころ
鮮やかないのちを包む手の温み
やさしさ貰い心の森に木も茂る
七転び希望の靴もすり切れる

鳥取市　田中　一眸

裏切った友とは素手で戦わぬ
ジュンと音太陽海へ落ちちゃった
39度恨みつらみも溶けていく
迎え火も送り火もない新仏
風評に弄ばれた大の文字

鳥取市　加藤茶人

多機能を持て余す携帯電話
怒る妻四十八手を使い分け
上と下わが家の三十八度線
カラオケに唯我独尊ひとり酔い
無尽蔵夢を掘り出す泥遊び

鳥取市　岸本孝子

この道と決めたら脇見などしない
気くばりが出来てふんわりする茶の間
躓くと初心に返る趣味の道
炎天下蟻も昼寝をするそうな
私を奮い立たせた二キロ減

鳥取市　岸本宏章

非常時には使えぬだろう縄梯子
生き下手の妥協嫌いが直らない
ほどほどの自惚れ僕も持っている
発電の屋根が炎暑を謳歌する
中流も所詮錯覚だったのか

倉吉市　山本玲子

夕凪やテトラポッドに麦藁帽
かすみ草引き立て役に可憐な美
焦点を少しずらせて笑わせる
五十年過ぎてあれこれそれ夫婦
食欲の秋地産地消の盛り合わせ

倉吉市　野口節子

後れ馳せながら笑顔のリハーサル
この猛暑どこにも当る場所がない
ドクターストップどこ吹く風か酒煙草
記憶回路近頃波浪注意報
球打ちに興じています八十の坂

倉吉市　猪川由美子

アザラシベビーきぼうは復興シンボルだ
独居老人へ地デジ化済みか聞き回る
原発事故で奇しくも総理延命す
食の恐怖ジワリジワリと包囲網
被災地へゴメンねテレビきれいです

倉吉市　山中康子

血や肉になるまで待とう栄養素
はいはいと水の流れにさからわぬ
饒舌にちょっぴり毒も混じってる
のっぺらぼうでなかった感情の起伏
浅知恵にしょげた私の泣きねいり

米子市　白根ふみ

処方箋笑顔を混ぜてふっくらと
土壇場で鍵のありかがひらめきぬ
明日より今日を促す波がしら
読みきれぬ風がふところふさぎだす
両の手でころがす愛のガラス玉

米子市　竹村紀の治

そのときは解らなかった愛の鞭
寂しくは無いと強がるカップ麺
煮て焼いて二枚の鰤で昨日今日
散歩道律儀な犬がまた吠える
丑の日のあとのうなぎが好みです

米子市　成田公一

女子力を見せ栄光の頂点に
忍ぶ恋ヘッドライトが照らし出す
仲直りしてから後は酒となる
中元に困り酒でも送っとけ
広告塔丸暗記して人を待つ

鳥取県　石谷美恵子

娘と並ぶめっきり低くなっている
少しずつ前進昨日脱ぎながら
母になる娘が選んでる低い靴
キッチンも息子もみんな嫁の彩
少しずつギャップを埋めて同居する

鳥取県　北村稔

この猛暑体力もない気力なし
大風がすれすれ逃げた酒二合
あす食べるトマトカラスがねらってる
愛情は年重ねると深くなる
日本沈没小説でない本物だ

鳥取県　竹信照彦

クーラーの無い部屋に住む老い二人
節電も素食節約みんなした
僕たちはテレビ無ければ本を読む
誰がした食糧自給率低下
被災者にエコな暮らしを見習おう

鳥取県　深田俱久

エコ節電団扇でこの夏乗り切るか
三十五度じっと動かぬ病猫
全頭検査牧場の牛がそっぽむき
V目指すナインの汗は光増す
清濁をゴクゴク飲んで老い盛ん

鳥取県　西谷悦子

脇役で人のこころが解りだす
身近か過ぎ夫の長所軽視する
人生の続編に汗かいている
つっ込みを軽く微笑み切り返す
青空を仰ぎ波立つものを消す

鳥取県　山本正光

夏の窓開けて満月誘い込む
反核の旗は他人より高く振る
円高だもらっておくかパスポート
水割りに遊びこころが浮き沈み
生き延びて老いても好きな酒たばこ

鳥取県　松川行男

なるがまま箱舟に乗り岸の夢
三粒飲む一週間のおためしだ
効き目には各自それぞれ注がつき
リモコンで夏は切れない虫の声
一大事家族旅行へ死ぬ思い

鳥取県　細田裕花

正直に言えば酸っぱい昔話
向き合えば秘密を洩らしそうになる
ごろごろと腹痛続く民主党
旅上手飲んで歌ってすぐ眠る
こころざし12色にて描きあげる

鳥取県　山下節子

むつかしい十七文字の意思表示
手放した後で未練の形見分け
欲得を放した余生身が軽い
色褪せた千人針にある昭和
母になり母困らせたこと悔やむ

鳥取県　佐伯やえ

夏休みよく遊ぶ孫ほめてやる
山脈のみどり平穏無事なよすがです
普通のくらし出来る老後に手を合わす
秋の絵を描きにこいよと大山が呼ぶ
秋夜長遠い童話の月といる

鳥取県　斉尾くにこ

生きてゆくところどころの停留所
嫌なこと流れる星にあげました
耐える時いつも流れる歌がある
また歩くどんなあしたも受けとめて
さよならを一つ百個のありがとう

鳥取県　岩崎和子

朝の陽に白清々し梔子よ
まどろんで句が次々と夜明け前
美容院忘れたように髪伸びる
外出は帽子を載せて風流す
プチトマト熟れて歯の間をこぼれそう

松江市　三島淞丘

ユニークな友が流れを変えてくれ
傍観はできぬ平成三国志
ポリ袋せこい暮らしが透けて見え
一筋縄でいかぬ仲間と飲み交わす
大袈裟に笑って見せる見舞客

松江市　石橋芳山

外灯はポツリと寂しさを語る
言葉など無意味に深いため息よ
賑やかな後ろに影が差している
ゆっくりと横切る俺を笑う声
届かないメールが海に浮いている

松江市　小川注湖

交番の右三軒に住む余裕
守ると言う言葉忘れて千鳥足
か弱いと思う女のいざ力
世界地図ほんま日本は小さいなあ
暑い日だった玉音涙八一五

松江市　錦織禮子

遠い耳いつしか父の耳になる
前夜の花火跡形もない観光地
高温の地から暑中のハガキ来る
打ち水を自転車人に思い切り
丸々のスイカバリンとはじけて二つ

松江市　川本畔

大掃除賑やかだった暑かった
風鈴が鳴らぬ正午の疲労感
大股に歩き夏から来た男
軒下の玉葱順調に減る隣
美術館は日本結びの文化展

松江市　松本知恵子

空模様ゴロリ私に容赦ない
リュック重い山で心が軽くなる
血圧薬ひとつ飲み込み跳んでいる
ふる里の山のかたちを忘れない
父の血を継いで謙虚に生きるべし

松江市　津川紫晃

イケメンが今イクメンで平和です
手付かずの朝がまもなくやってくる
常識も微妙にずれて並ぶ箸
口だけは老いずよく食べよく喋る
昼は母　夜は女で紅を引く

出雲市　多久和敬子

古稀の影ゆっくりだけど従いてくる
海外旅行日本の水を懐かしむ
笛吹きのケトル呼んでる返事する
幸せの水一滴を飲んで寝る
残されたメモが真実しゃべり出す

出雲市　富田蘭水

禊する熱中症も何のその
まっ直にのびた胡瓜を誉めている
つまって来たカレンダーに心よせ
健康な人はいいなあ歩いてる
原爆忌生きて66年が

出雲市　小白金房子

一年の頭家授かり朝まいり
西方の月まん丸く朝を踏む
神前へ祀る注連縄技を編む
ふる里を偲ぶ蛍が会いにくる
風呂敷へわたしも包む出雲弁

出雲市　石倉　芙佐子

せめてあの日女の倖せ知ってたら
小さい塊となり溶けもせぬ
貴方も八十路　私も八十路どうにもならぬ歳月
咲いて散る想いは遠い夢の中
ああしろこうしろ言って下さいお月様

出雲市　岸　桂子

ここに来てもうリタイヤは出来ぬ歳
ピン札に世間知らずの角がある
旅に出るガスの元栓強くしめ
礼儀正しい人と一日居て疲れ
ひとり立ちさせたい凧の糸を切る

出雲市　竹治　ちかし

自転する地球と語り合う齢に
大夕陽心ほっこりして暮れる
人間の匂い行き交う裏の門
最後まで仮面を付けたまま眠る
旬という季節知らないまま熟す

島根県　伊藤　寿美

向日葵に妬心を抱く月見草
上澄みを掬い続けて黄昏れる
限界の橋を渡ってくる民話
「おひさま」を見て「親鸞」も読む朝餉
紙一重のいのちよ死生観変る

美作市　福原　悦子

天下り再起を狙うのは男
この勝負押しても一歩負けている
真人間やけどし易く愛される
一徹な母の姿も丸くなり
手の平の花の余りを地に還す

美作市　大石　あすなろ

ひとつ得てふたつ失いゆく喜劇
迷うたび半歩控えた土踏まず
針山もわたしの脳も錆がくる
十指まだ元気に数を読んでいる
逢うたびに夢を語っていた命

竹原市　石原　淑子

鎮魂の蜻蛉夕焼け空にとけ
乗り間違えた一駅間の長いこと
カラス五羽家族揃ってやってくる
寂聴嘶笑って諭す無心術
電話口いつもバックに孫の声

竹原市　岩本　笑子

体重計の嘘を信じて痩せている
奇跡満載アメリカに嫁ぐ娘よ
朝顔にゴーヤ立派に役を終え
生かされて夏がこんなにも暑い
目を閉じて今日の薬を飲んでいる

この猛暑誰に不満を言えばいい
夢の芽も欲も一夜にして枯れる
いつからか流れに任す葦となる
盆供養蝉は朝から鳴きどうし
被災地へエールとなるか盆おどり

府中市　藤岡　ヒデコ

蝉しぐれ喜怒哀楽の燃える夏
風鈴の音もきこえぬ蝉が鳴く
炎天下落着く場所のない背中
金魚鉢可愛く泳ぐ涼しげに
明日の運まかせて今日を生きのびる

府中市　岩本　雅代

食べ歩き番組まずいと言えますか
子や孫が巣立って元の無神論
拍手してくれればサクラでも嬉し
アフリカの子には言えないバイキング
ヘルメットが様にならない視察団

宇部市　平田　実男

百態の風が私を攻めてくる
ワンテンポずれてみんなに笑われる
退化した足これからをどうするの
ぬるま湯につかり野心はのぞかせず
浴衣にも糊が利いてた母恋し

美祢市　安平次　弘道

強かさともろさ備えている命
加齢臭少し匂ってきた命
多国籍の食でつないでいる命
生き残るために原発とも握手
今日生きる顔をうつしてみる鏡

東かがわ市　清川　玲子

気を静め言いたい事は明日にする
牛乳を一気呑みする伸び盛り
心まで癒してくれる介護の手
日に焼けた心を秋がノックする
ラブレター開けば淡いセピア色

東かがわ市　伊勢　八重子

自転する地球に合わすわが歩幅
重き語をカラッと揚げる夏の天
お裁きをされても困る風あそび
身のうちの鬼も入れ歯になっている
うさんくさい男がひとりいわし雲

松山市　高橋　宏臣

噂にものぼらん忘れられました
進化する家電へ退化するわたし
ぼけたかな秋の七草言うてみる
まかせとけ一度言いたい火の車
ふる里で聞こえる亡母の子守唄

松山市　古手川　光

大洲市　中居善信

ブランドを買いたい妻へ知らんぷり
入道雲湧いて水平線が凪ぐ
半世紀前が朧になってくる
八月忌核廃絶が熱帯びる
不意打ちをするか寝首を取ったろか

西予市　黒田茂代

軒下の蝉の亡骸風葬に
あれは魔女の鉤爪赤い唐辛子
曼珠沙華の赤は血の色血のにおい
ドリーネの底に命の水の音
わたしも孫居ないお気持よくわかる

高知市　小川てるみ

次の世はきっと男になるつもり
変らねば心の闇が深くなる
三食をペロリ粗食が口に合う
案の定牛肉汚染だけでない
運命かも知れぬ時雨からドラマ

高知県　小澤幸泉

だんだんに小柄をえらぶ妻の齢
もつれあい支えあい行く朝の白杖
手放すに惜しい昔の風景画
騙されることを知ってる小指です
老いてなお派手でよろしい飲み仲間

唐津市　樋口輝夫

八十の恋です低温やけどです
世の中をまあるく生きる嘘をつく
幸せとちょつと嘘つく避難先
懺悔するきっかけ母の一雫
病む友へまた置いてきた嘘ひとつ

唐津市　坂本蜂朗

先ず訃報欄古里に根が生える
流れ雲老いの月日が加速する
無駄足の太さ誰にも負けはせぬ
デパ地下の味を褒められ笑うのみ
制服で四角になっている個性

唐津市　山口高明

死後のこと火焚き地蔵に頼んどこ
国民を担保に赤字垂れ流し
馴れ染めを訊かれて媼笑うのみ
偽表示なんて消費者判らない
再会のあなたと過ごす火の時間

唐津市　井上勝視

マグマかな眉間に三つ縦の皺
招き猫時には欠伸したいだろ
価値観のズレ金婚を過ぎて知り
堂々と国に反論市長増え
矢玉つき只ひっそりと息してる

熊本県　高野宵草

訂正の赤ペン文字が読み取れず
空箱が思い出だけを詰めて棚
体調で時々邪魔な植木鉢
泣き涸れた脱皮で強くなりました
幸せは未だ夫婦で往く八十路

札幌市　三浦強一

婚活へガラスの靴を夢に見る
電車不通駅は他人の貌をする
激流もせせらぎもある母の川
日本の夏へ花火のコンクール
事故起きて知る原発の裏の貌

札幌市　小沢淳

子の育ち楽観悲観達観し
うぬぼれが思わぬ力だす不思議
手元不如意旅行と言って不貞寝する
軽くお茶重いお酒になりました
詩人には儲け話はやって来ぬ

砂川市　大橋政良

縦横無尽ホタル飛び交う闇の底
削られて削り屑から夢が出る
ひらかなの伸びて縮んで詩となる
豆のつる風と遊んでからみつく
美しいバラ一輪の恋でした

黒石市　佐藤古拙

不条理と呟きながら手を合わす
おにやんまあの貫禄を呉れないか
そこのけそこのけ中国が通る
帰省する浦島太郎になりきって
マスメディア世論調査に寄りかかり

黒石市　相馬一花

平成の世にはそぐわぬ躾糸
呉れるもの何でも背負うカタツムリ
教養はないが自慢の胸がある
探し物すると仕事の鬼に見え
カリスマが五万ひしめく大東京

平川市　小寺花峯

地デジ難民画面が消えた砂嵐
若者が集う田舎は都市の村
親不孝十指で足りぬ星の数
多弁になる流れ雲から自己主張
泣いて泣いて泣いて涙が涸れる秋

弘前市　今愁女

しがらみを断った自由も底が見え
おひとりさま心の渇き殖えてゆく
たそがれて趣味よりほかに道はなし
この上は老人パワー養うか
原子炉が五十四ある地震国

弘前市　福士慕情

大火扇ゆらり武者絵の眼が光る
節電の街で見得切る三国志
大太鼓またぐ乙女の心意気
風袋つくろう鬼もいるネプタ
ちちの背の広さを知ったのもネプタ

弘前市　岡本花匠

熟年の愛カラオケで確める
癒えた運八十路夫婦の旅も運
人並に喜び造るかっぽう着
新盆を迎えてなみだ酔芙蓉
白神の撫も雨乞い原爆忌

弘前市　髙瀬霜石

個性ってなんだ理科系・文化系
父さんにもはや背広は似合わない
定年後背中にキノコ生えてきた
せんべい布団身体にぴたりフィットする
十月の空は五・七・五で埋まる

弘前市　須郷井蛙

趣味の会ついに年齢白状し
幸せに感謝しっかり墓参り
万歩計きっと幸せつれてくる
三党の合意法案進まない
里帰り話の缶詰下げてくる

青森県　松山芳生

蒔いた種いつしか伸びて来た波紋
とろとろと心遊ばす花図鑑
究極はたったひとつの夢でいい
涙ぼくろわたしをしかと主張する
美しいとは絶対言わぬトリカブト

さいたま市　星野育子

句碑見れば道極めたるその証
お金より好きなものがある幸せ
草野球勝つも負けるもまた明日
評論家揚げ足取って人任せ
元気な人のためにある歩道橋

東京都　岸野あやめ

墓参りして今年の役目一区切り
来年も来られるかしら墓の前
お土産を見つけるのにもくたびれた
お金より身体大事とタクシーに
原色の渦巻の中君が居る

横浜市　菊地政勝

折鶴へ元気な風を入れてやり
お守りの中には神が居なかった
健診は自信ないから止めにする
断捨離が出来ずまだまだ生きてやる
復興と絆が目立つ書道展

横浜市　小野　句多留

腹心が減って淋しい一人言
使わなけりゃ報われません溜めた金
見て聞いてとどのつまりは置いてかれ
シングルの熟女天下という住処
妻如き思う男が浮いている

川崎市　三浦　きぬ

大学は出たのにという肌寒さ
亡き母に再会できるのもま近
夢にまで見る亡き母の遠き味
幸せだった幼き頃の物不足
ダイヤルを廻した相手皆不在

静岡県　薗田　獏沓

ジーパンの穴がおしゃれに変化する
化粧することを覚えた口答え
ユーモアが生まれて来ない真っ四角
役を辞し肩の軽さと物忘れ
八月の記憶背中を吹き抜ける

富山市　島　ひかる

小さい秋見つけて暑さやり過す
トンネルを抜ける努力を惜まない
トンネルの明かりを消したシーベルト
六道の辻であなたを待ちわびる
説教をされた女の味加減

可児市　板山　まみ子

脳ドック勧めています七十五
古希過ぎにジグザグ道はおことわり
家事作業ファイト無い時だってある
先見えぬ日本世界もままならず
突然死まさか自分はありえまい

愛知県　早川　遡行

年金で蓄えた血を蚊に吸われ
早そうなレジを一瞬見極める
散歩にも近道を行く癖があり
勤め先変わり化粧も派手になり
休テレ日などあってもいいと思う

犬山市　吉田　幸子

膝痛で洋式にして闊歩する
ちょっとだけ触れた絆に支えられ
収穫に感謝祖父母の黒びかり
血圧が上がる闘志がまだ潜み
爆笑もチンプンカンのロスの旅

犬山市　関本　かつ子

髪染めて役立つ顔になっておく
ステテコが似合う朝顔咲いた庭
明太子たっぷり乗せて暑気払い
へその緒を切った時からある別れ
節電に肩身の狭い熱帯魚

記録的極暑と豪雨でも達者
積むだけの本に埋もれた定年後
控え目の積もりも声が前に出る
万歩計敬老パスが妨げる
お化粧をすれば誇りも服を着る

京都市　藤井文代

あたふたと男するなと亡母の影
拝まれて米が御神酒になる誇り
太陽と戯れるのは　十歳まで
机上論夜がふけるほど大げさに
買えるなら元気と笑顔だけでいい

京都市　桝本宏子

街路樹を大きくする気ない役所
信号のために剪定するらしい
冷房はオンに三十七度越す
節電を指導と妙な電話くる
年長へ斟酌なにもない声だ

京都市　高島啓子

国民は常に切りつめ生きている
ビタミンA庭の三つ葉で事足りる
朝いちで一人占めするフェルメール
年老いた猫がクーラー一等席
節約の仕方教える夏休み

京都市　三宅満子

石庭の岩に時間がふと止まる
勝負する相手はなんとボクだった
鈍行で自分探しの旅を選る
今になり妻に合わせている歩幅
3D見てジョンウェインを当て嵌める

京都市　坪井孝一

一歳の孫がやる気を爺婆に
感謝レター今の私があることに
生きている証拠パッチリと目を開く
人類はもっとゆるやかに和やかに
川柳のこころで生きるこれからは

亀岡市　井上森生

不況風甘みの失せた親のスネ
接待はされぬが地獄僕を待つ
あの店に出世払いの借がある
放射能知らない蝶は蜜を吸う
聞くだけでも景気の良いと言う話

大阪市　奥村五月

父が逝き母が生れたのは秋で
盆供養今年に捨てた古本も
合掌の子どもの指は釈迦に似て
明日あたり咲く朝顔が慎ましい
一合と決めて二合を飲んでいる

大阪市　川端一歩

大阪市　佐藤忠昭

いただいた絆を守る蔵欲しい
節電に加え節酒を願う妻
時事吟に何日も顔出すタイガース
父母の墓向いのお寺に水府様
精霊の心忘れた大文字

大阪市　神夏磯典子

ゆっくりと歩く命つくろいながら
命にも番号つけるお葬式
やわらかい涙は虹になりました
残り火を集めフーフー吹いてます
もう星になってしまったお父さん

大阪市　吉村一風

老いて益ます友は大事な宝なり
すかたんもするから皆に好かれてる
よく笑う妻で今では福の神
わたしに光る星を見付けて手を合わす
打てば響く友と今でも酌み交す

大阪市　松尾柳右子

風みどり命ゆっくりふくります
スタートは今遅すぎるはずはない
陽に抱かれ風に抱かれて生きんかな
思いやりの風を待ってる風鈴と
朝顔がみな友の顔友の声

大阪市　小糸昭子

側近が段々離れ夫婦だけ
駄目よ駄目あのおばちゃんが怒らはる
熱帯夜七転八倒原発め
原発がこんなに脆いと知らなんだ
砂漠には砂漠の掟砂嵐

大阪市　原田すみ子

大阪は熱帯人はラテン系
独り居は部屋の空気も薄くなる
傾向と対策しても勝てぬ老い
老けたなと互いに思い呑む言葉
丁寧に生きる証のごみの量

大阪市　榎本日の出

女だけ門限がある七不思議
魔女たちに元気をもらいやり直し
検査入院病人らしくなっていた
なりゆきでうっかり返事してしまい
長生きは苦手たっぷり薬飲む

大阪市　榎本舞夢

選ばれたからは行きます地獄でも
愛されていつも尾行されている
朝の蝉まどろみ破る風物詩
じっくりと話すことなく逝った父
住みなれた街で小猫と暮してる

大阪市　板東倫子

暑いデスこたえますネと猫の顔
西瓜切る時は家中寄って来る
上を向け笑え歌えと言われても
三歳が今のは震度5かと問う
戦時にもやまとなでしこ頑張った

大阪市　津村志華子

ふる里に昔むかしの辻地蔵
才覚は無いが律儀に生きている
シナリオが狂うてからの偏頭痛
捻くれた背骨が横に曲り出す
言い分はあるが負けとこ時代の差

大阪市　江島谷勝弘

震災の教訓車で逃げるな
ホームレス歌人が消えてもう二年
名勝を一本松が残してる
言い過ぎて友を無くしたことがある
アホだつた真面目に生きて金がない

大阪市　井丸昌紀

兄ちゃんはいつも大きい方を取る
大騒動やはりあいつが絡んでた
この路地は雨を降らせてみたくなる
ライバルが正面にいる会議室
欲がないと決めつけられた丸い顔

大阪市　津守なぎさ

せせらぎを聞く渓谷の隠れ宿
原発に食べ物不信つのらせる
外れても神棚にある宝くじ
司馬遼の街道を行くスニーカー
河内音頭聞くために行く盆踊り

大阪市　澤田定子

校舎より吹奏楽の夏休み
気まぐれに買ったかつらで若づくり
朱の扇子参加したいな大極拳
笑みつられ赤ちゃんあやし乗りすごす
路郎読本見馴れぬ文字につまずいて

大阪市　田浦實

気まぐれな政治マニフェストから始まった
メルトダウン止まらないのは政治です
サイレントキラーにもなる風評が
青春キップ気まぐれ旅で暑気払い
河内音頭の輪でかく汗が涼を呉れ

大阪市　池上清治

じっくりと見れば心も透けて見え
棚晒しの見本に食べる気を殺がれ
一息に乾す惜敗の生ビール
素麺を天日に晒し夏を呼ぶ
孫娘じっくり話す隙がない

大阪市　小谷集一

パソコンへ挑む麻雀囲碁将棋
愛情に百点はない隙間風
妻よりは少し遅れて良い目覚め
一目盛り目線を下げて輪に馴染む
マンネリの献立でよし妻の味

大阪市　熊代菜月

囀りをまだまだ止めぬ八十路坂
誰ですか心の扉たたくのは
階毎に世界が替わる雑居ビル
私にもあった青春矢の如し
川柳が私はげます登り坂

大阪市　大川桃花

カプセルで通り抜けたい炎天下
古希の声歩幅がどっと狡くなる
しゃんと立つ見栄はまだまだ捨てられぬ
わがままな妻に忍耐きたえられ
坂の寺御利益たんとありそうな

大阪市　近藤正

さらわれた看板やっとかけ直す
汚染した青草食べる放れ牛
百日紅いま盛りです彬の碑
株下落菅辞める気になったわけ
顔のしわ暮らし磨いたその証し

大阪市　岩崎公誠

夏雲に無気力の顔笑われる
花切手貼ってあなたのバースディー
イエスノー相手の顔で使い分け
失言の口から空気洩れる音
笑えないレベルでガイド茶を濁す

大阪市　寺井弘子

泣きながら形見手放す断捨離に
ほめ言葉上手に使い余生生き
コラムから理路整然とした意見
立場とか保身ばかりの人の増え
詫び方の気に入らないとまた揉める

大阪市　升成好

野の花はみんな自分の色で咲く
愛でられて花は約束破らない
わたしには宝うとうとする時間
自転する地球に住んでよく転ぶ
街中が二拍子になる阿波おどり

大阪市　小泉ひさ乃

老いてなお誘いに乗って翔んでいる
なでしこジャパン希望を呉れてありがとう
まだ苦労足りぬと神に生かされる
男の意地プツンと切れたひとりの訃
何時の日かひとりで生きる日を覚悟

大阪市　吉内　タカ子

熱中症欠かさず記事は読みあさる
蝉しぐれ目覚め嬉しい深呼吸
ショートカット軽く明るく盆支度
介護でもホッとする間の趣味の会
茜雲さそい出掛ける万歩計

大阪市　伏見　雅明

振りむいてときどき妻を確かめる
海外旅行いつも梅干し忍ばせる
貧乏と格闘をしてよく負ける
諍いが終りやさしい目に戻る
プールサイド派手な水着に目が痛い

大阪市　笠嶋　惠美

熱中症節電したら生きられぬ
生で聴くシャンソン歌手の夢の中
孫が来る何にもせぬが良いらしい
子育ての苦楽親からうばわない
ジャンプする覚悟は良いか自問する

大阪市　坂　裕之

縄のれん損得抜きの友と飲む
少しだけ飾ってみたが馴染めない
わがままを許したつけが付きまとう
疲れてる人にトップはきつすぎる
前に出て気疲れひどくなりました

大阪市　岩﨑　玲子

不器用な生き方で来た夫婦して
素直さがあった新婚思い出す
ペアルック着てたあの頃一本気
ありがとう残せるように生きてゆく
好き嫌い多いお客は泊めません

池田市　栗田　久子

老いのリズム日々の暮らしは変わらない
言葉では言えぬ思いがあってよい
思いやり失くせばただの一老女
涼風を羽でとらえた赤トンボ
美しく今年も出合う彼岸花

和泉市　横山　捷也

食べて寝てその他が無くて熱帯夜
一つ覚え二つ忘れる熱帯夜
ライバルに闘争心を燃やす距離
口だけは達者に育ち娘は二十
窓際で人の異動を聞き流す

茨木市　島田　誠一

生ビール一息だけの小宇宙
本流を逸れて人間らしさ出る
原子炉の中は覗けぬもどかしさ
オフレコが解けて恋が退せてくる
貧乏のおかげで友が離れない

絨毯に踵が沈む緊張度
通帳の裏に隠してある野心
姦しい男の料理法談義
パソコン機指一本のあいうえお
ふる里はわさび田水の澄むところ

茨木市　藤井正雄

予報また猛暑と聞いて汗が出る
熱中症言訳にする怠け癖
遣る気ならいくらでもある家事雑事
省略を許してもらう盆用意
亡き兄とじっくり話すお線香

大阪狭山市　矢野梓

終電車言い訳ばかり考える
ハワイでの妻の水着は若かった
うるさいと一喝出来ぬ妻と居る
気付いたら空気のような妻の側
妻不在何と静かな家だろう

交野市　森本弘風

叱られっぱなしの総理まだする気
夏草をため息ついて刈ってます
炎天下サボテンだけは何のその
苦瓜のグリーンカーテンエコロジー
若い頃遊び晩学苦労する

河内長野市　黒岩靖博

節電の夜満天の星が降る
灯火消し窓開け放ち座で寝る
あっぱっぱに首タオルして過す夏
窓の開く通勤電車欲しい夏
古希過ぎて湧く恋心持て余す

河内長野市　坂上淳司

ひもじさに耐えた昭和の太い芯
とは言うが孫の十日はもて余す
自分史の伏せ字の裏にある懺悔
誇らずにただただ蟻のまっしぐら
天仰ぎ夏も一気に大ジョッキ

河内長野市　村上直樹

暗い日本救うなでしこもらう覇気
半世紀妻の心はミステリー
糸屑のほころび見せて老いの坂
スピーチになると動かぬ軽い舌
罪な美女触れなば落ちんそぶりする

河内長野市　山室光弘

この年でネジ巻かれても動かない
猛暑にも負けず円高じっとせず
聞き役へ回れば箸がよく動く
安らぎの死角に美味いコーヒー屋
ネットから学ぶ世界の罪と罰

河内長野市　井上喜酔

河内長野市　山岡冨美子

わたくしの戦後史がある砂糖黍
二ヶ月に一度息継ぎしています
自慢話聞いて金魚が酸欠に
守りたいものが弱気にしてしまう
まだ恋の仕掛けをしらぬ花の芯

岸和田市　土橋房枝

脳刺激恍惚などに縁遠い
うろうろとストレス捨てにショッピング
あの人は今ブームが去ってかくれんぼ
愛されて愛することを知らぬ女
元気よく外で遊ぶ子いない街

岸和田市　井伊東吉

冗談の一つも出ないこの暑さ
夏盛りカンナ百日紅の色冴える
盆参り少しは布施もはずまねば
早や立秋残暑見舞の届く朝
カリスマの少しは欲しい次期総理

岸和田市　森元ふみよ

八十路来て楽しいプラン目白押し
夏休み孫が押し寄せ破産する
リビングで和気あいあいで節電に
デパ地下で省エネしてる親子連れ
遺族年金助かっている亡夫様

岸和田市　雪本珠子

歳重ね人生の幅広くなる
プラマイナゼロで人生終りたい
次の世もまた次の世も君と添う
お月様旅先までも付いて来る
無駄話たまに本音がポロリ出る

岸和田市　原さよ子

嬉しさが思わず顔に出る便り
東京へおいで息子と巨人戦
ボックス席おどおど座る私です
遠縁という親切を信じきり
八十には八十のおしゃれコンパクト

岸和田市　堤楢代

ストレスをためる間がない忙しさ
カレンダーめくりたいけどまだ我慢
暑いけどやっぱり温いお茶がええ
蝉しぐれ何を語っているのかな
寝返りをうって明日を考える

堺市　大隅克博

主婦業に手当つければ高くなる
絶対に効くとは書いてないサプリ
50円切手を貼れと書いてある
仲の良い嫁姑が俺の敵
鼻唄が聞こえる今がチャンスかも

堺市　加島由一

婚活中と張り紙したい息子の背
妻の字で秋物とありじっと見る
ダメもとで新政党に入れてみる
目も耳も丈夫腹筋二百回
草野球のエース四番を尻に敷く

堺市　奥時雄

コンビニのおでんを主婦は買い辛い
医者を待つ間に腹痛治まった
長いこと歩いていない月明かり
腹筋を鍛えてくれる向かい風
愛国心右か左に寄り過ぎる

堺市　遠山唯教

断捨離の明日へ出直す策を練る
爺婆に元気をつける丸い文字
台風が過ぎて元気な鉦太鼓
犬掻きで泳ぐ暮らしが性に合う
一球に泣く少年の意地をみる

堺市　山本半銭

一輪は老いの華やぎ欠かせない
メモ帳に隠し切れないもの忘れ
雑踏の街逃げ出して無人駅
夏ばてを歳の所為だと沈んでる
支持政党変えても何も変らない

堺市　源田八千代

被災地で迎え火京都で送り火
初盆の主今ある店の創業者
礎となり孫の代に引き継ぐ
長びく残暑日本の四季が失われ
私の生活記録川柳誌

堺市　大久保のん子

一枚の葉書で響き合う絆
老化へのカンフル剤が好奇心
美しい汗風評は目もくれず
私を根こそぎ変えたいい出会い
お母様こんなに齢をとりました

堺市　荻野像山

念仏へ喜ぶように火が揺れる
捨てられた贅沢カラス狙ってる
天災は予定通りに来てくれぬ
荒れるほど飲めず飲んだら寝てしまう
ときどきは電話したいが旦那出る

堺市　村上玄也

ノータイは涼しいけれどだらしない
ネクタイを取り換えるだけ弔と祝
束の間のうたた寝生気取り戻す
昼眠いけれど寝つきの悪い夜
間違いはしないが覇気のない男

戦 平和二つの核に泣く日本
病知らず静かに消えた心電図
イケメンに大志なさそな甘い声
停電なくほっとし落ちてゆく夕日
久々に扇風機からもらう風

堺市 西村 りつえ

帰るとここしかないと貧乏神
何かしらぴったりこない高い席
逃げ足の早いのが強みですボクも
故郷に松茸狩りの記録あり
暇はあるきっと囲みは解いてやる

四條畷市 吉岡 修

人格を変えて飲んでるトラ仲間
人生の方程式がまだ解けず
十五パーセントその分だけが暑くなり
錆び付いた釘一本が徐々に効く
消しゴムの屑を丸めて鬱になる

吹田市 太田 昭

川柳に出会い楽しく熱く生き
川柳の虫が蠢く前頭葉
決断を迫る水平線の夕日
約束を破って疼く指の先
届かない想いを胸に遠花火

吹田市 須磨 活恵

絵手紙にやさしさ含む花の彩
朝顔が咲いたと元気取り戻す
暑いのに頑張り過ぎた膝の音
髪切って昨日のことは忘れます
ありがとう両手合せる盂蘭盆会

吹田市 木下 敏子

コーヒーの旨さへ歩く街はずれ
シェフの人柄やさしい料理だな
答まだ出ずに観覧車は下降
限りある命と話相手など
見て見ぬ振りできずに一歩前に出る

吹田市 山本 希久子

陰暦で暮せば適う風土です
ちぬの海校歌斉唱喜寿の会
苦労して表と裏の人生訓
松園の女性美品は二度と出ぬ
一センチけずり昔のヒール履く

吹田市 瀬戸 まさよ

神様が許してくれぬ爪の痕
なでしこに元気を貰った男達
何だろう入浴すれば一句出来
摩周湖でロマン夢見た遠い夏
十五歳夜勤の星が目に沁みた（動員学徒時代）

吹田市 野下 之男

吹田市　大谷篤子

涼しさが後押しをする一万歩
為になる本二頁で眠くなる
午前五時目覚し時計で起きる人
見舞客喋って笑い経過よし
雑草に占居されてる病あがり

高石市　浅野房子

想像もしなかった淋しい老後
考えの甘さカラスに笑われる
引きずった過去裁ち切れぬまま老いる
暑い寒いと身辺整理先のばし
気が向けばしたい用事がたんとある

高槻市　左右田泰雄

インターホンせかせか鳴らす宅配便
見えずとも在るものは在る昼の月
なでしこのブームに乗って並ぶ列
セーラー服がシルバー席で舟を漕ぐ
さざ波のムードに揺れている心

高槻市　富田美義

一滴の涙に今の位置を知る
優しいが頼りにできる人じゃない
愚痴ふまん底の本音の甘いこと
傷ついた地球を治す木を植える
ライバルと傘を斜めにすれ違う

高槻市　佐甲昭二

居心地がよくて殻から抜け出せず
和解する気配すかさず握手する
雑学のマニアさらさら辞書めくる
薄味をほんのり利かす母の膳
父の遺影ぽつりとものを言いたそう

高槻市　安田忠子

気まぐれに習った俳画のめり込む
ひやっとした運転今も夢に見る
同感句書き込んでいる日記帳
体臭よりきつい香水やな匂い
エアコンの故障節電ライフする

高槻市　片山かずお

自慢話と愚痴に耐えてるカウンター
我が家では主役になれぬ父の役
切り分けたスイカが騒ぎ引き起こす
シャボン玉それぞれ虹を抱いて飛ぶ
吹っ切れず最後のメール消せぬまま

高槻市　峯村勲弘

招かざる客よあなたは放射線
お彼岸日誰に聞いたの曼珠沙華
鮮やかに終の住処の彼岸花
ごみ出しに生き甲斐感じ受けて立つ
老いの足ぽちぽち歩く万歩計

高槻市　杉本義昭

満天の星ですなでしこが輝いた
まっすぐに水売場まで急ぐ夏
まっすぐな若さまぶしい甲子園
弱点を認め気楽に生きている
二列目で目立たぬように牙を研ぐ

高槻市　井上照子

為せば成る此の頃成らぬことばかり
記念日に平和を誓うご挨拶
熱中症気になり水を飲み過ぎた
時代かな近所のご不幸知らず過ぎ
国会も教育の場だ先ずは聞く

豊中市　藤井則彦

ポックリ死の予定が狂い出している
耳痛い話もいつかいい肥やし
遅咲きの人ほど椅子にしがみつく
空気みたいな夫婦も今は汚染され
ケータイを持たずに生きている誇り

豊中市　松村里江

イエスマン可愛がられている職場
つける薬ないむつかしい病です
立て板に水の留守電聞き辛い
女の意地遠い昔を小出しする
やさしさをじっくり煮込むボランティア

豊中市　水野黒兎

毎日が生きた長さの自己記録
歳月は待たずひたすら追いかける
器から味をいただく薄造り
陽炎にくるくる古都の人力車
ゆったりと流れる時を醸す酒

豊中市　松尾美智代

自分との闘いすぐに妥協する
暑さとの闘いはげむストレッチ
飽き性な自分に挑む一万歩
足腰が弱い分だけ口達者
やわらかい物腰で自己主張する

豊中市　江見見清

不仲でも血の濃い順に居る法事
独り見る私の若い日の写真
行くとこがないと娘がやってくる
熱中症のゴキブリふらふらと歩き
イケメンが通る涼しい風つれて

富田林市　中井アキ

まだら呆けわが身ひとつを持て余す
土砂降りに晒す私の自尊心
八十になっても亡母を恋しがる
夕焼けの綺麗な町で妻になる
恋唄の似合う熱ーい村でした

富田林市　片岡　智恵子

節電の覚悟を試す猛暑なり
ほどほどを知らぬ自然の無慈悲かな
被爆国が信じた原子力だった
悲喜こもごも心の貯金箱にある
やんわりと杭を打たれたアドバイス

寝屋川市　籠島　恵子

ひまわりの自信過剰に塩あめを
避けようと思うトラブルやってくる
明日へと沈む夕日は前のめり
ポイントを稼いだあとの水たまり
シグナルの黄から私も飛んでいた

寝屋川市　平松　かすみ

被災地で鳴いていますか蝉蛙
一仕事すむと聞える蝉の声
毎日のゴーヤ私の血になった
お電話は人形供養の件でした
手も足もグーチョキパーで達者です

寝屋川市　冨山　ルイ子

立秋は暦の上で炎天下
ご主人が逝去ごくろうさまでした
ながねんの介護に友は腰痛に
気持だけの援助復興クジを買う
株価大暴落空洞を案ず

寝屋川市　森田　麗

百年の看板被災乗り越える
ポイントがずれた政治の暑い夏
無農薬胡瓜と茄子で盆飾り
新盆におかえりなさい門火たく
精霊舟西へ西へと千の風

寝屋川市　森　茜

押し花は詩集にひっそりとあの日
早起きの読経が風にのってくる
晩学の隙間へ感動を溜める
とぎ汁をたっぷりゴーヤ実るなり
ごくろうさま一服もせず扇風機

羽曳野市　三好　専平

地球まだ生きてはるのとかぐや姫
消費税上げて原発事故の処理
安居とはゆかず仮設に月が見え
鳥には放射能などこわくない
ひっそりとひとりで死んでゆく仮設

羽曳野市　安芸田　泰子

午前六時起きろ起きろと蝉が鳴く
白米に憧れていたのは童話
猛暑日へ我身ひとつの置き所
捨て猫と馴染みになった雨三日
捨てられた子猫がつけているリボン

羽曳野市　福田悦子

熱中症流してくれた秋の雨
もったいない残してならぬ釜の飯
歩け歩け地球を踏める足元気
充電をしたのか体よく動く
一期一会楽しむ秋の旅に出る

羽曳野市　吉村久仁雄

意に沿わぬ道に花咲き鳥が鳴く
なでしこの話ばかりで会議終え
トラの尾を避けて地雷を踏みつける
君が代を聞くとコーラが欲しくなる
不発弾抱え都会の暑い夏

阪南市　森村美花

遠まわりしてやっと元気になりました
窓ぎわで光る人生だってある
始まりは仲良く飲んでいるふたり
気の利かぬ性格ですと予防線
青空が包んでくれた内緒ごと

東大阪市　北村賢子

のほほんと生きるA型脱皮する
暑い寒い愚痴を言っている平和
十歳若い友連れ去ったアスベスト
美しく痩せるCMほんまかな
笑顔こそ心とこころ繋ぐ橋

東大阪市　佐々木満作

破られた記憶を賛辞する保持者
節電の息苦しさが満つ社内
現場には届かぬ論客の意見
なでしこの誇りに満ちたい笑顔
満を持しその一瞬を撮るレンズ

東大阪市　米田水昇

大花火ベランダでただ見てるだけ
戦時中荷物運んだ父偲ぶ
帽子買うおしゃれ心はまだ残る
年経てもうっかりちゃっかり生きてます
狭庭には孫の作ったミニトマト

枚方市　小林わこ

お祭りがすんだ駅から秋の風
遠回しはやめて時間がありません
遠ざかる背中追いかけたりしない
親子でしょ字までいっしょが面白い
暑い暑いカラスの群れもどこへやら

枚方市　安達忠央

逆風が俺の度胸を試してる
不況時にもったいないを身につける
寝たふりの耳で核心聞いている
じっくりと息子と喋る昼の酒
ノーというただ一言を吐く度胸

枚方市　伊達郁夫

天井の沁みに記憶が跳ねている
幸せの真ん中辺に穴を掘る
記念日は三日前ですでも感謝
ピーマンの隙間に答え詰めておく
トンネルの出口にあった落し穴

枚方市　二宮紫鳳

夏野菜元気づくしの朝の膳
孫の声今日一日のビタミン剤
生ビール憂さも飲み干す反省会
こだわりを捨てて身軽な老いの坂
風鈴の音色涼やか子の寝顔

枚方市　二宮山久

日が落ちてせせらぎ聞いて散歩道
空蝉の命器用に抜けており
すれ違う日傘気になるネックレス
リハビリの散歩が好きなスニーカー
まだふける年ではないと背を伸ばす

枚方市　海老池洋

尖った波も丸く返している老後
結束の固さ石垣から学ぶ
原発の迂闊日本をわやにする
コンパスの芯は原点忘れない
駄菓子にも残る恋しい母の影

枚方市　寺川弘一

五臓六腑を毎晩酒で洗ってる
とろりと酔えば地球の自転加速する
淋しいとじっくり鏡見てしまう
自家発電の源氏蛍を見習おう
映画跳ねると隣の珈琲館流行る

藤井寺市　髙田美代子

牛肉も米も産地をふと思い
失った気力にそっと捩子を捲き
のんびりと暮そう今度うまれたら
野菜か花かどちら植えようかと迷い
かすみ草いっぱい抱いて満ちている

藤井寺市　増井ヨシ枝

夏祭り金魚一匹秋の風
八咫烏胸に世界の頂点へ
豪邸も切り売りされる代替り
クラス会国民学校最終生
御陵の森乗っ取り蝉が謳歌する

藤井寺市　津田シルク

炎天下蝉は元気にようなくわ
軍配は蝉に上ったわら帽子
女偏上手に使うぬれまつ毛
灼熱の陽がスッピンをあざわらう
加齢の勲章足腰の痛み

藤井寺市　俣野登志子

平均点とって文句は言わせない
夫の評価まあまあやなは誉め言葉
おだやかな午後に突然孫台風
あれよあれよ女性の威力どこまでも
夜喧嘩朝おはようが言えました

藤井寺市　若松雅枝

価値観が違う夫婦で仲が良い
曖昧に笑って敵を寄せつけぬ
悩み事明日に回して熟睡す
はらはらと夫のスピーチ気にかかる
蝉の羽化見つけた子らの叫び声

藤井寺市　太田扶美代

やさしい雨バスが着いたら止んでいた
入道雲空元気ならまだ出せる
草引きに帰るわたくしのリゾート
ネギ生姜山椒山葵で夏の陣
節電へ月の光をお借りする

藤井寺市　伊藤アヤ子

お出かけに扇子と水は欠かせない
いい汗を掻いた河内の音頭取り
大阪のおばちゃん塩あめくれる
この暑さ街行く人もうちわ持ち
復興をみつめて何か出来るはず

藤井寺市　吉田喜代子

ステテコが女も着れる柄が出来
あげた野菜ビールになって帰って来
茹で立ての枝豆味を増すビール
盆飾り亡夫と一年分話す
倦怠期かひとり暮しを羨まれ

藤井寺市　鈴木いさお

どちらかと言えば善人です　私
待ち受け画面に孫の笑顔が弾け飛ぶ
じっくりと訊けばなるほど子の理屈
からむ蔓鋭い棘も多情ゆえ
イエス様またひとつ嘘つきました

箕面市　出口セツ子

子の幸福（しあわせ）他になんにも要りません
里帰りなく読経だけ流れてる
千円が無くなり子らが遠くなる
子が居ないから物足りぬ夫婦旅
妥協か愛かケンカしたことない夫婦

守口市　井上桂作

七夕の老いの願いに恋忘れ
梅雨あがり紫陽花わびし色褪せて
雨うけて蓮の緑葉夏盛り
節電に合せるような涼しさに
原発を保安院まで後押しし

迎え火に家族がひとり増えたよう
夫は仏お供え物が届く盆
ひとり暮しだからクーラーつけている
栄養不足ソーメンに冷や奴
田舎へ異動したか近所が静か

八尾市　宮　﨑　シマ子

エアコンをつけろつけろとせみが鳴く
地デジ間に合い砂あらし見ていない
無灯火のチャリンコ背後からそろり
一定の目処たたぬままにたそがれる
傘傾げやさしい心すれ違う

八尾市　村　上　ミツ子

かたくなに生きるまくらが並んでる
かたくなに恋して火の輪くぐり抜け
かたくなに五七五の夢を追う
ほどほどのはしゃぎにしとく前夜祭
夏休み孫が帰ってからうつろ

大阪府　籾　山　隆　盛

炎天に元気を貰うカンナの朱
病名を自分で決めて病んでいる
見るに見かねて言ったひと言波立たす
ストレスに脳が誤作動偏頭痛
ばあちゃんに一目おいて華持たす

大阪府　米　澤　俶　子

浜風に奇跡を生んだホームラン
嘘漏れて右往左往の四面楚歌
部屋ごとに花の名付ける旅の宿
皮膚がんと錯覚させた漆負け
職解かれアウトドアで吸う酸素

大阪府　桑　田　ゆきの

仲間割れねらい猫なで声で寄る
大ジョッキ女三人上司斬る
テレビから節電の知恵借りている
伝え歩き一歩一歩にある期待
天下国家論じてうまい大ジョッキ

神戸市　伊勢田　毅

冷静に姓名を聞く電話口
なでしこの快挙に奮い立つ日本
持ち物は生命だけだと言う現場
子を産まず犬を愛して足りている
少子の世繁盛してるペット屋さん

神戸市　木　村　貴代子

継続が土台になって夢掴む
自慢するものはないけど幸せだ
割り勘で続く友とのいい時間
罪のない心の窓は全開だ
垣根越し話のはずむ花自慢

神戸市　早　川　孝　子

神戸市　山田　婦美子

節電で笑い止まらぬ扇風機
打ち水に猫も私も息をつく
知らぬより知って損すること数多
古希の坂越えて白寿の姑護る
喧嘩する種も薄れて一つ屋根

神戸市　山崎　武彦

償いの旅に出た夫戻らない
月満ちて明日の退院待つ少女
償いのつもりか君が優しすぎ
許さないだろう原発やはり核
本心を見抜かれそうな丸い月

明石市　糀谷　和郎

半熟の恋は酢っぱい味がする
隣からカレーの匂い無事と知る
古名刺に飾る私の跡がある
老いた身に飾る言葉は似合わない
その笑顔明日も見せてと妻へ酌む

芦屋市　黒田　能子

でんとした昔の父の居た時代
リズミカルに葱刻んでる妻の朝
雨の日は雨のリズムで過ごします
電話口声のトーンで心読む
ひっそりと電話も鳴らぬ雨の午後

芦屋市　竹山　千賀子

よく喋る犬で私もよく喋る
夕餉どき家族の幸を刻む音
安い物確かめてみる原産地
今が旬とカメラに笑顔残してる
つらい事あってか今日は日が長い

尼崎市　林　昭三

食事会孫のお迎えいそいそと
台風の進路予想がよく当る
年金の振込通知目を通す
隣町消えた花火の音もくれ
傍目にもお疲れ気味の昼の月

尼崎市　山田　耕治

飲み放題食べ放題で損をする
破れたら捨てよう古い服たまる
針金を曲げて都会のカラスの巣
口内炎治って今朝のお茶の味
順順に孫の名前を呼び違え

尼崎市　軸丸　勝巳

天よ地よこの頃やんちゃ過ぎないか
風評の被害特効薬がない
寝転べば軒の風鈴風を呼ぶ
向日葵もやがて発電狙う顔
物忘れハナハトマメは忘れない

尼崎市　藤岡りこ

愚痴こぼし黙って聞いてくれる犬
シャッターチャンス横切った人だけ写る
裏通り歩けば犬が通せんぼ
客帰り裏返ってた声戻る
拗ねた児をハグしたとたん泣き笑い

尼崎市　春城年代

お断わりすること増えていい都合
ごった煮でにごす九十歳のレシピ
残響の中に私を横たえる
唐草模様と嫁いだ頃の慎ましさ
辞書にないことばに母は生きている

尼崎市　加川靖鬼

青春のマグマを抱いている瞳
名優の頬を真珠が溢れ落つ
生きてます柳誌に名前載る限り
太鼓判押すけど朱肉ありません
あほらしいテレビ地デジで見させる

伊丹市　山崎君子

胡蝶蘭そなた元気か父の声
子は優し手みやげそっとまくら許
看護師の尊し仕事心なごむ
盆おどり手に手にうちわお揃いの
夜も更けていよいよ寝れる嬉しさよ

加西市　金川宣子

ゴミ袋隣家の事情透けて見え
気前よくカード切る人危なげな
生きる道やる気を見せるシニア塾
朝日浴び脳が静かに目を覚ます
人として誇り忘れず立ち上がる

川西市　西内朋月

命日に飾っています庭の花
バブル時の記念切手を持っている
捨てるより半値で処分する残り
幸せは御飯に掛ける生玉子
理屈では説得できぬ不登校

川西市　米原雪子

夢持とうなでしこジャパンお手本に
八十路坂中腹に来て振り返る
さくさくと砂浜駆けた頃もある
美容師さんあいそないけど腕はいい
句の心読む講評のさわやかさ

三田市　上垣キヨミ

英霊にしんみり語る母の珠玉
三猿で風を躱して生きている
しきたりを省いて嫁に任す盆
どん底に堕ちて再起の芽が根づく
再生紙どんな役目になろうとも

三田市　福田好文

肝臓のリズム狂わす休肝日
抽選会最後で帰れぬ夏祭り
紙おむつ自販機欲しい長寿国
見舞ったら競馬済むまで待てと言う
ねぎ刻む音で目覚める朝が好き

三田市　石原歳子

いつまでの命なのかと夫思う
手遅れの病も忘れ本を読む
ユニークなお子だと言われ複雑だ
ミスしないように頭の電池替え
宅配便友の手作り夏帽子

三田市　北野哲男

喜寿過ぎて好奇心抱く鼻メガネ
省エネは季節のものを食べりゃ良い
届かない手紙を親に書く日記
過去形のお方やっぱり頭が高い
惜しまれて辞めたつもりへ紙つぶて

三田市　田中章子

風鈴のリズムに合わせストレッチ
充電はおいしいもんとおしゃべりと
あいづちは打つがこころは聞いてない
買い占めた電池に期限ありました
ナデシコがマスコミ種にならぬよう

西宮市　藤本直

脇役のままで終りの幕が開き
敗れても若さと夢のある強さ
蝉しぐれ命少しの恋歌か
只今も省いて浴びる水シャワー
放射能見えたらもっと怖いだろう

西宮市　緒方美津子

レンジでチンゆっくりテレビ見たいから
反論を抱く葱切る音も途絶えがち
まったなし藁を食べぬと牛は死ぬ
掛け軸の滝の音聞くクールビズ
墓まいりカンナの燃える無人駅

西宮市　片山忠

妥協して稀な個性を消さないで
苦労する度に小心者になる
着替えして皆で出かける焼肉屋
同郷に少しガードを甘くする
近頃の君の瞳は澄んでるか

西宮市　西口いわゑ

ぽっかりの雲よわたしが見えますか
急所外され何となく気抜けする
団扇の風にこにこ映る父母の顔
千羽鶴みんな飛び立て北の空
雨のち晴れ生きてゆくってそんなこと

西宮市　秋元てる

一泊が限度それでも旅プラン
あこがれと不安振り分け旅鞄
待ち合せはホーム先端ベレー帽
デカ文字の電話暮らしの基地基盤
気位も補聴器も捨て昼寝する

西脇市　七反田順子

日本語も大阪弁がとりしきる
温暖化災害はもうごめんです
青春切符予定組むのが楽しくて
宍道湖の朝日美し蜆船
そのうちに空気予報できるかも

姫路市　古川奮水

母ちゃんに連れて近道路地ぬける
白線の上で勝負を決めた球
約束が流れ昼からふて寝する
散歩する犬も打水道が好き
胡弓の音八尾の町は風の盆

奈良市　山本柳昌

雨つづき温いことばが欲しくなる
願っても希望通りにならぬ釘
家計簿の中に潜んでいた頭痛
青春のかけらキラキラ万華鏡
ドアに手を触れると犬がぬっと立ち

奈良市　辻内げんえい

オフィスでも有難さ知る扇風機
嘘泣きにまた根負けをするジイジ
食よりも器たのしむ歳となり
やり手だが口下手だけに出世せず
浴衣ギャル車内華やか夏祭り

奈良市　岩本浩二

居眠りの美女に肩貸し乗り過ごす
はったりを言っては悔やむことばかり
虚栄心あるから人は面白い
脅かしをかけても妻は動じない
故郷が近くて遠い被災民

奈良市　加門萌子

あと少し笑い免疫高めねば
天災は酷だましてや人災は
十万年誰が責任取れますか
〇〇さんやはり二番がいいですか
サッカーもゴルフも女子力が元気

生駒市　飛永ふりこ

一拍の旅でよろけるほど疲れ
四十年軋みも情で覆います
被災地に祈りのたけを蟬時雨
たっぷりの陽と水わが家のニュートマト
松葉ぼたん汗をこらえて咲く気概

香芝市　大内朝子

むらさきの夢を繋いで生きる欲
沙羅双樹揺れて母なる千の風
役所から介護予防の誘いくる
老いるって涙じんじんすぐに湧く
ひぐらしが鳴いてふる里たぐり寄す

橿原市　居谷真理子

三歳は三歳なりの淋しい背
しっかりと息して心ふとらせる
寄り添うて果てへ曲がっていくレール
真実の一滴あれば生きられる
知ってます小さな虹の作り方

橿原市　安土理恵

泳げない男と海を見ています
空にいる限り自由になれる雲
わたくしのピーポーマンションにご到着
スタミナが無くて天まで昇れない
短命を思えば許す蝉の声

大和郡山市　坊農柳弘

沈思黙考サザンクロスに辿り着く
舞台暗転そして女は夜叉になる
残り火に女の性が燻ぶって
八起き目でやっと虚飾の殻を脱ぐ
過ぎたるは及ばざる如原子力

奈良県　阿部紀子

福山にアドレナリンを貰ってる
福山と皆総立ちでリズム取り
福山の大熱唱に時忘れ
トルファンの朱の石窟に立ちくらむ
長生きは愛より好きな仕事です

奈良県　天正千梢

回復期コーヒー多く買うている
名医とナースに心まで預け
長病い友達沢山出来てまい
とは言うもののその気にはならぬ
じめじめと戦ばかりが長くのび

〔先月分〕河内長野市　水谷正子

北上を流れる灯籠安らかに
他人の子叱る美風はもう廃れ
下じもはとっくに節電しています
夏歌舞伎粋な着物が涼を呼ぶ
大歌舞伎男性ファンちらほらり

第31回 川柳塔鹿野みか月川柳大会

日　時　12月11日（日）
場　所　鳥取市鹿野町　総合福祉センター
詳細は11月号掲載

自選集

目覚ましの五時に合わしているいのち
いつも速達きっとずぼらな人だろう
趣味ひとついつもライバル横にいた
一生懸命を見ていた拍手だと思う
洗濯物を畳むと米を研ぐいのち

小島蘭幸

ケータイを持たぬ自由を大切に
オーバーザレインボー歌って消えた友ひとり
苦しみに優る喜び添えて喜寿
気にすればまあるい月も三角に
労いの言葉を遺影から貰う

奥田みつ子

マイナスを明日に活かす知恵絞る
気は急くが動かぬ足のもどかしさ
反論を述べライバルの腹を読む
穏やかな父の諫言身に染みる
逆風に負けず堪える花の芯

河井庸佑

決めるとこ決めれば男それで良し
雑用に追われ死んでる暇がない
性別は不明確かに鬼だった
納得のいかないものに手数料
バカボンのパパが総理になればいい

川上大輪

神無月それでも村は秋祭り
片隅に花活けてあり無人駅
天高し杖を頼りの万歩計
幾山河越えた夫婦の秋日和
防潮林今日も雄々しく村守る

木村あきら

回転のおそい頭脳へ新刊書
仲良しとアダムとイブになり遊ぶ
笑えない会話へ膝を崩せない
饒舌へ閉ざした扉開けておく
遊びすぎた眼に太陽がまぶしすぎ

小西雄々

雑草の一本ずつも抱く宇宙
真実は決して曲げぬ鬼瓦
りんご挽ぐいつも感謝の姿して
銃音よいくさごっこはもうよそう
原発はもうこりごりだなあ牛よ

斉藤磊

十月からメダカの学校始めます
あかつき会十周年大会がありますよ
妻の庭果物の収穫で忙しい
彬の碑百日紅が色を添え
パソコンの将棋初めて勝ちました

塩満敏

頭ガンガンゆうべガンガン飲んだせい
被災地の天幕になれ夏の雲
雷に恫喝されて逃げ帰る
いつまでも桃色であれ恋人よ
思い出せない天国へ帰る道

新家完司

病にも慣れたか閑をもて余し
弁舌はいいが手前は聞いてない
老いの出る幕ではないと諦める
遠い日の事を老骨忘れない
老いの耳しみじみ聞いている話

恒松町紅

独りの絵画き独りの泣き笑い
リズム感ずれる八十路の盆おどり
朗らかにころころ生きる忘れん坊
ノーモアヒロシマ語りつくせぬ平和論
親友が突然逝ったサルスベリ

津守柳伸

金持ちの顔がだんだん丸くなり
線香の煙悪魔が逃げてゆく
カタカナが入るニュースがわからない
八十の指が器用なアルバイト
横綱が破れて国技館が湧く

遠山可住

もの忘れピカドンも忘れて原子力
一億に誇るものあり忍絆
8・15ああ円高の国際線
マイペースその日その日の一里塚
祈ることあまりに多し今年盆

都倉求芽

真っ先に笑った女が好きになる
茄子の花咲くあやまちがないように
義援金足して割り切らないでいる
仏から預かっているいのちなり
石仏ひとつひとつに苔が生え

土橋螢

竹製の孫も巧みな働き手
靴下も拾ってくれるベッドの手
歩行器や筋肉づくり世話になる
ヒロシマにナガサキそして原発に
メダカ孵化して忙しい室になり

中原諷人

今が旬今が盛りと生きている
句読点いっぱい打っておく絆
とぼとぼと歩く未練を引きずって
優しさが欲しく優しさ差し上げる
玉子焼きが好きで魂胆など持たぬ

西出楓楽

てはじめに御用学者の説を聞く
節電を御用提灯見て廻わり
御用聞きガツコのセンセにさせたがり
月へ行く君の御用は何ですか
定年と御用納めはちがってた

仁部四郎

あっぱれの気球の美女に手を振ろう
小太鼓の響きで友と語らんか
ビール飲む手で白旗はあげられぬ
ちちははの明るく笑う籐の椅子
変身願望卵に手足生えてきた

林瑞枝

一病を気づかう柳友に励まされ
厄介な自我を手なづけ恙無し
どこか違うと思うお方と出会う朝
回れ右すれば迷想消えていた
生かされて妻と聖書を開き合い

前たもつ

出雲路の山山神の気配あり
神サマの近くに棲んでいて直球
神からちょっと離れて喋るティタイム
神サマに名刺渡しに行っただけ
神々と同じ空気を吸ういずも

政岡未延子

時々は行方不明になる私
不器用な仮面逆さに付けている
振り向いた途端に負けている未練
尾を振らぬ犬に私を見てしまう
ゴミの日のあちらこちらに縫いぐるみ

三宅保州

生き恥もざぶざぶ洗う里の川
人生のおまけ上手に汗もまた
世界遺産待つ富士山のご来光
持ち時間たっぷりみつをといる世界
ちっぽけな勇気他人の子を叱る

宮西弥生

輪廻かも知れぬが旅は続けてる
生き下手は葦と葦とのもたれあい
明日雨となるらし夜半旅仕度
カラフルな観光ブックに誘われる
辛口の意見喝采浴びている

八十田洞庵

癌告知身辺整理でもするか
夢いくつ夢のまんまで持って逝く
雪十日僕の脳味噌まで凍り
年金改革明るい老後など夢だ
春なのに休耕田の目が覚めぬ

両川洋々

川柳の種蒔きに黄泉へ逝き給ひ
詩集一冊抱え彼岸へ旅かばん
母の膝から区間快速発車する
処方箋アンパン朝夕一個ずつ
一匹の蚊と真剣に戦えり

板尾岳人

第35回 寝屋川市民川柳大会

と　き　11月3日(祝日) 1時　開場
ところ　寝屋川市市民会館　第一会議室
〒572-0848 寝屋川市秦町41
電話 072－823－1221
課　題　各題2句
「決　　済」　高田　博泉　選
「やりがい」　広岡　栄二　選
「道　　草」　佐藤　后子　選
「パレード」　山岡冨美子　選
「留　　守」　上田　　仁　選
「儲 け る」　太田　　昭　選
締　切　午後2時
会　費　1,000円（投句無料）
賞　各題秀句に賞状と記念品
主　催　寝屋川市川柳協会
後　援　寝屋川市文化連名
川柳ねやがわ

温故知新

『菊澤小松園遺句集』より

PTA茶の間の知恵で渡り合い
南無阿弥陀仏で避ける世間の風あたり
パートタイム女に広い稼ぎ場所
かけ持ちの芸の荒れたに気がつかず
食うための裸おどりを嗤えるか
セメントで村の歴史を塗りつぶし
すべり台よい子は列を乱さない
押売りの断り方も柔と剛
愛想ないけど嘘はない販売機
雨だれへ神経質な造成地
人間の限界という金メダル
ピストルが手許にあっただけのこと
笛吹けば鹿より先に人が寄り
尺取虫メートル法の風にゆれ
生まれては死ぬぼうふらを見て飽かず
さくら貝明日はたにんに拾われる
鶏の下から閉じる眼を見詰め
籠を出てからを小鳥の考えず
蟻の列週休二日など知らず
あひるの子飛べる翼と信じきり

川柳塔の川柳讃歌 ㉜

木津川　計

クラシック流し昼寝の大工さん

岡本　かつ子

そらびっくりします。北島三郎や都はるみが流れて当り前と思っていましたらハイドン(?)でしたから、ええーっ!?大阪弁はこんな場合、「つろくせえへんがな」と言うたのです。釣合いがとれんのです。たとえば今号、大川桃花さんも「しおらしい女将東大卒らしい」と。しかし、大工さんがクラシックを聴いてはいかんのか、東大卒は女将になられへんのか、猫が吼えたらおかしいけど、木津川計が日暮に泣いて何が不思議やねん。

こんな地味着れぬと亡母の年になり

吉田　幸子

菊池寛の『父帰る』は五八歳で老残、ヨレヨレになって二〇年ぶりに「おたかはおらんかの」と言って帰ってきたのです。母のおたかは五一歳、既に婆に近いのです。明治四〇年頃の設定です。いまの五〇代はまだむちむちぷりんではありませんか。

大阪弁は地味を「こうと」と申しました。上品のニュアンスが強いのです。幸子さんのお母さんも品のいい方でしたよ。

ハモニカで吹ける唱歌が遠くなる

坪井　孝一

昔の唱歌は一小節内の全音数が少ないのでゆったり歌いました。ハモニカはジャズピアノの早さでは吹けないのです。

なぜかハモニカの音色には大正ロマンの趣があります。竹久夢二の憂愁、いまは昔のモダニズムの残影…。すると、明治がかすみ、大正は遠くになりにけりの平成、少年の頃馴染んだ唱歌は童謡とともに遠ざかっていきます。孝一さん、大正文化野郎でいきましょう。

手を組んだ腹に一物持ちながら

近藤　正

手を組んだから和解したのではない。肩を組むから信頼できるのでもない。バンザーイと挙げた手の中に反対派も交じっているのです。腹に一物なれば一寸先は闇な政界はむろん、人の世は腹に一物も二物も持った人物の、油断も隙もない、表向きの平和です。

正さんが詠まれた川柳らしい句です。これまでの多くは正楷書な句で、お説ごもっともでしたが、草書に崩されて面白くなりました。

値段みてそれが似合うと妻がきめ

寺井　弘子

「似合う」には「見合う」意味がありますから「つり合う」に通じるのです。「収入に見合った生活」がその謂です。「妻」(多分弘子さんでしょう)は賢いのです。「あなたにフィットしてる」とくすぐり、身の程の範囲に納めるのです。

僕もたまに妻の衣服を買いますが、やはり値札をみて、「あんたにぴったりや」とよいしょして、その実…。

風船が割れたら意味のない空気

森山　盛桜

『上方芸能』編集部の面々に僕は言います。個々一人々々はタダの空気みたいな人間やないか。塊まってるから力になるんや。一人の発言がなんぼのもんや。けど、『上方芸能』の見解となったら関係者は注目する。見解が力を帯びる。バラバラになったら芸能オタクの爺さんやおばさんに過ぎんのや。『上方芸能』をバックにしてるから、皆さんはつき合うてくれてるんやぞ。ええか、わかったな。

前号「ぶっちゃけた話おれが一番悪人だ」(作者不詳)は「ぶっちゃけた話俺は悪人だ」(三好専平さん)でした。ご免なさい。

(『上方芸能』誌発行人)

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

旅つれづれ

民主主義いつまで金のない同士

南北氏を悼みて

宿替も今度は番地ないところ

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子

クイックスロークイックスロー古稀を華やか

小料理屋女の匂いだけでよし

葉牡丹のつかみどこなし哲人の如く

用を持って来てお大事にお大事に

不平も云わぬ妻だ長生きするならん

余所の奥さんを鑑賞してるうちに着き

横綱がもろいたとえになりそうだ

パンとミルクの食事へ記者を待たすなり

われ老いしか千代紙を美しと見る

朝新聞を見たら友人が死んでいた

初日の出自由はここにあるものを

凡人にとっては松竹梅もよし

奥信濃にて二句

志賀高原ここが山賊平とか

山と話そ霧のすがたもさまざまに

生み落とされて七十余年をウロチョロす

貧乏だけどおちつきだけは失わず

第二の天性か女はマッチ擦る

時計が一つ鳴った役目を果たすよう

不幸にも気も狂わずに首相いる

妻よ踊れ残こんの色香ほのぽのと

選挙

血を売る男一票も売り

おじいさんもう元旦の咳をする

黙秘権の行使ではなし老夫婦

万葉抄

川上大輪選

やさしさへあっさり抜けた胸の刺
私だけ聞き流したら済む話
人脈も金脈のない畑を打つ
いい人にされて外されない仮面
十指みな主張を持って生きている
ダム底が見えて哀しい子守歌

高槻市　田中由美子

薬にも毒にもなって妻でいる
肩の力抜こう抜こうと力んでる
コラム読む目はいっぱしの評論家
老犬に付き添われてるおじいさん
体重計一枚脱いでまた乗って
呆けたかな重ねた苦労みな忘れ

奈良市　大久保真澄

口に出す言葉は一度噛み殺す
温泉へ流す苦労はないくせに
大方のことはお金ですむ暮らし

米子市　湯浅久司

ほどほどの温度差あって議論する
夕立ち満点つけた庭の草
墓に行き草取りだけをして帰る

竹原市　國實力

押しピンは効かぬ午後には出る夫
諍いも時には脳トレだと思い
八十のジャンケンポンで皿洗い
忘れてと言われる前に忘れてる
反省の色も老いては艶がない
地球儀をくるくる此処が騒いでる

大阪市　髙杉力

人生はドラマと聞いていたけれど
勝ち方に拘りがある苦労人
デパ地下の試食ビールはおまへんか
アウトドア役に立たない男です
リューマチの母が作った桃届く
老犬の歩幅に合わせ散歩する

和歌山市　森下よりこ

一人では広いと思う終の家
汗だくで帰りシャワーで生きかえる
一人ぐらしの私をコケシの目が笑う
明日は明日あしたの風に吹かれよう
青葉風みな過去形にしてくれる
そしてついに人形抱いたおばあちゃん

和歌山市　福井菜摘

凡才で笑うしかない処世術
恙ない暮し感謝で開ける窓
真四角に生きて秘密のない両手
輪の中の風に馴染んでいる平和
漂うてやっとあなたに辿り着く
雪月花二人で綴るハーモニー

神戸市　能勢利子

満点の妻になるのは諦めた
携帯を忘れ不安になる私
一人っ子おもちゃ屋さんが開けそう
米を研ぐ家族の無事を祈りつつ
肝心の話忘れて受話器置く
ご近所さん犬の名前でご挨拶

紀の川市　宇野幹子

花鋏多弁なバラの首を斬る
上澄の下で本音がベロを出す
煌めいた太い尻尾を切り落す
波眠るころには次の波がくる
生煮えの男チンでもしてみよう
骨のない舌に油断をしてしまう

米子市　山本ふみ子

自己主張したがる影を置いて出る
エンピツは打たれ弱くてすぐ折れる
夏休み二日で先を思い知る
耳打ちをしてる現場が気にかかる
旨い汁吸って口拭くお偉方
掃除機が昨日のぐちを吸い込んだ

池田市　上山堅坊

恥知らぬ人に辟易させられる
診察券山のなかから選び出す
急ぐほど意地悪になる券売機
一日の土台朝食欠かさない
平らかな道で躓く怖い歳
クライマックスは喧嘩という祭り

神戸市　玄番美恵子

少年の夢は天をも突き破る
ピリオドを打っても続く長い道
大物を釣って料理に四苦八苦
母となり産着に包む夢の数
一病の痛み刻んで日が落ちる
手鏡へ時に女は自慢顔

立つ位置を決めて真っ直ぐ前を向く
晒すほど私の色が滲みでる
のみこんだ街をかえせと蝉時雨
鍵穴を覗くと過去が回りだす
まないたを晒してパワーアップする

岩出市　藤原ほのか

淡々とえのころ草の自然体
だらだらと遊んでいたい夏は夜
使い捨てだからよけいに丁寧に
がっかりをひっくり返し起きましょう
濾過された言葉すとんと腑に落ちる

海南市　小谷小雪

ひたすらに耐える形になる猫背
炎天の風は真っ赤ないろが好き
フライングもくもくもくと雲の峰
蝉時雨忙しい今日の時間割
逆立ちをしても何にも変らない

紀の川市　辻内次根

大切な余生幽雅に華やかに
目で食べる料理ナイフを入れにくい
酒飲むも仕事のうちと自己弁護
立ち呑みの腰の角度は百五十
午前様愛犬だけが待っている

橋本市　石田隆彦

ぺらぺらの紙重たい事をいって来る
過去は過去気ままに生きる再生紙
濡れ衣が晴れてごはんがすすむ朝
お宝に女の欲が試される
耳元の誘いに揺れるイヤリング

米子市　野川宣子

物忘れ鉛筆つれて散歩する
いそいでもゆっくりしてもわが寿命
わが跡に愚痴残すまい日記焼く
暑くても文句言わない佛様
わが時計秒針少しおくれ出す

米子市　加藤正二

引っ込めた苦言が喉に引っかかる
権力を手にしてくもり出す眼鏡
仏にも鬼にも金がいるけじめ
土壇場に強い貧乏神の智恵
同居して少し増やした修飾語

宇部市　高山清子

触診の温みへ溶けてゆく痛み
DNA親子鳶でいいんです
疑問符へ心ふたつが鬩ぎ合う
欲望を捨てて無色の風の中
強がりを削ると透けてくる孤独

阿波市　三浦千津子

胃袋が僕の生命線らしい
物静かな人と回りに言われてる
教室が静か先生身構える
片方の耳で噂は聞いておく
いい酒をたっぷり飲んだ高鼾

大洲市　花岡順子

暑いなあ聞く身になればいやになる
アポなしで商談こなす度胸人
煙たいと言われる人がかぎ握る
ナフタリン漬けの背広が咽っている
逝ったあと日記読んではまた涙

江南市　脇田雅美

寝そびれて独り漁火見る岬
満天の星とおしゃべり夏の夜
月見ても恋しい人の顔になる
噂にも成らず黒子の玉の汗
甘口のカレー今夜は孫が来る

唐津市　北村松風

出荷停止命永らえられた牛
牛が物言うなら権利主張する
さり気なくギフトに込める下心
日本の夏に復活したうちわ風
人間って強いな瓦礫から熱意

シドニー　坂上のり子

家計簿の欠伸見ている神無月
雲ながめ一日過ごす日が続く
今日もまた妻の御供の試着室
ケータイのピンクのメール消去する
新米の湯気に至福を噛みしめる

塩竈市　木田比呂朗

頑張れともうこれ以上言えません
アバウトなところがボクに合っている
お互いにいい人なのにまとまらぬ
お値段に比例するのか無愛想
節電の言葉覚えた三歳児

横浜市　川島良子

昨日より明日を語る人が好き
お金のことで嫌な自分が見えてくる
正直に言えばあなたを傷つける
花より団子お中元には冷風を
図書館は穴場でござる節電の

大阪市　太田としお

お世辞より素直な言葉胸を打つ
復興を念じて入れる義援金
一言の多いお方で嫌われる
夏休み遊ぶ子供が少な過ぎ
まっ黒になった昔の夏休み

大阪市　松田聰

原発へ世界がNOを突き付ける
梅雨も明け暑さ節電がまん会
長生きで掛けた年金とり返す
節電か熱中症か暑い夏
人生は白黒付かぬ勝負ごと

大阪市　前川善之

肉食べて日本男子よ元気出せ
節電で日本の夏がよみがえる
食べ物で健康守るむずかしさ
たまってるストレス電気にならへんか
節電になやんでる間に秋の風

大阪市　安藤なつこ

食べて出し風呂に入れて不足なし
金銀銅手頃な段差だと思う
節電にがまんとルビを打っておく
二ヶ月に一度の金を小出しする
シーベルトより怒りの方が高濃度

河内長野市　梶原弘光

やさしさのかけら集めて子等集う
震災後家族の絆確かめる
妥協する度毎妻へ主導権
貸した金なのにしぶしぶ返される
立秋なのにいまだ地球が煮えている

河内長野市　針生和代

日本がんばれ永田町より甲子園
心配はなにもないのに惚けてくる
よく食べて動かぬ妻が痩せたがる
おいしいと言うが買う気のない試食
やっと秋気配を告げる法師蝉

岸和田市　増田隆昭

息抜きはいいが手抜きは許せない
間違いと気付いた時はもう遅い
まあいいかいやな話は後回し
山は呼ぶが聞く耳持たぬ足と腰
ライバルの出方じっくり見る余裕

堺市　羽田野洋介

湯船からお疲れさんがこぼれ出る
トップに立ったとたん歩幅が狂う
風評の中で膨らむ無責任
ピンチからチャンス見つける虫めがね
立派おでこ他人とは思えない

堺市　内藤憲彦

ふる里へ心の栓を開けに行く
趣味の風仲間をみんな若くする
クラス会みんな薬の供をつれ
亡夫から年金とどき感謝する
年金の歩幅で立てる旅プラン

吹田市　二宮栄子

鎮魂の花火よ届けあの空に
罪のない牛の受難が終らない
真夏日はちょっとスローに暮らします
潤滑油差して節節宥めてる
脇役を妻と言う名でこなしてる

高槻市　島田　千鶴子

戦後期を生きた親父の備忘録
富士登山褒めてやりたい老いの脚
窓口で優しくされてほっとする
甚兵衛と浴衣気に入る老い二人
爺ちゃんは軍歌歌うと若返る

高槻市　初代　正彦

今日だけは調子外した靴の音
今日もまた私を諭す青林檎
打ち水を待ってる吐息から吐息
追憶の音噛みしめて文を書く
あと一つ繋ぎ忘れた恋がある

富田林市　関　よしみ

ヘソクリをかくした本を人に貸し
かあさんに飼いならされて五十年
世間の波にもまれてできるいいお顔
妻のメモ大事にもってスーパーへ
毎日がうっかり重ねて生きている

寝屋川市　岡本　勲

自分史に消しゴム欲しい過去もあり
ご先祖の墓参も楽し孫が供
孫寝かせ孫に起こされ昼ごはん
頑固さに磨きをかけて古稀祝う
賄いが徐々に負担の子の帰省

羽曳野市　宇都宮　ちづる

山盛りのメシとメタボがにらめっこ
恐いけど居ないと困る山の神
お礼参の絵馬を探して撫でてやる
肩馬で孫の重さを思い知る
ブランドの水着についた砂払う

八尾市　田邊　浩三

前略とあって葉書がストレート
欠席の返信葉書さびしそう
冴え渡る月も汗かく熱帯夜
吹き出物地球も消化不良なり
やせ我慢大事だったと思う今

大阪市　神野　千恵子

新しい墓地独り占め蝉時雨
汗拭い拭いして経を聞く
かき氷強面男のおちょぼ口
朝市に売手上手の声飛んで
訪ねれば猫の出て来る通し土間

大阪市　高木　道子

宅急便妻たのしげに荷を詰める
子の病い祈りささげる丸い背な
あれまでは他人あれから深い仲
母親の心配性は愛だろう
まだ残る余力たよりに見栄を張る

尼崎市　田原一兆

復興の勢い鈍い永田町
甘い声電話セールス少し聴く
ライバルが日々の暮らしに喝くれる
百歳の母をモデルに老いる技
ゆっくりとページをめくる老いの日日

篠山市　藤井美智子

里の茶葉摘む手培る手の和みの輪
めぐり来る季を忘れずに彼岸花
大花火負けず劣らず恋の華
山に川さみしがりやの魔者住む
父母の夢笑っています今日は吉

三田市　尾崎一子

緑のカーテンお日様通せんぼ
節電を友に森林浴に行く
節電がライフスタイル変えていく
水を飲めのめとうるさい熱中症
生きてるのもご苦労さんとひとり言

西宮市　株元玲子

今朝もまた体重計がいけずする
薬よりきれいに痩せるところてん
わたくしに似ているらしいメダカの目
飽き性と性根のなさ父ゆずり
ゴキブリへ宣戦布告してアース

西宮市　泉水冴子

坂の上待っていたのはお母さん
本当にいいのずるい私なのに
レモンティーだけ飲ませてくれませんか
おぼろ月私と泣いてくれたんだ
残念ですお芝居は終わりました

兵庫県　上田ひとみ

いつまでも長姉は下の世話をやく
退屈がしきりとメール打ってくる
行列の先に見えてる好奇心
螺子巻いてこの世を泳ぐ水すまし
ああそうか見えぬからこそこわいのだ

奈良市　尾畑なを江

山里に栄華を偲ぶ銀山址
若者が命削った間分の跡
飼い犬が近所をガイドする散歩
大鼾ときどき止まるが生きている
図書館が避暑地に変わる猛暑の日

奈良県　谷川憲

立秋後も超猛暑日の日が続く
夏バテに夏風邪ダブルパンチです
東北スペシャルおしんの歌に涙する
生きている生かされている意味を問う

鳥取市　近藤秋星

生きている証しか愚痴も腹もたつ
何食わぬ顔して胸に鬼を飼う
願わくば花の季節に逝きたいが
我が子でも顔色見つつ暮す日々

鳥取市　山口千代子

おねだりをする犬の目に負けました
宇宙船パックの料理宙を浮く
真人間過ぎて出世がまた遅れ
遍歴を月に晒している懺悔

鳥取市　坂本とも湖

地の荒れをだんだんしずめ丸い月
叫んでも語りついでも八月忌
迎え火で新居はここと知らせる夜
はしご酒二十四時まで千鳥足

鳥取市　大前安子

飽くまで誉める解説の甲子園
重い腰上げて歯医者へいざ出向く
留守番をご先祖様がするお盆
楚楚と咲く野の花生けて供養する

鳥取市　松原ひとみ

ナストマトピーマンまでが熱中症
三十八度体温はるか越す暑さ
玄関にごった返しの子等の靴
大奥の豪華絢爛美と渇き

鳥取市　津村律子

エンピツが似合う机に座ってる
晴天の広場は汗の捨て所
来てうれし帰ればうれし孫の守り
遠回り一歩おくれて行く浄土

倉吉市　前田喜美子

若き日のロマンが今の夫婦です
過ちが無いよういつも心して
要るものが沢山あって捨てられぬ
年寄りは何でも昔良かったと

倉吉市　倉繁泰輔

普通の事出来る嬉しさ感謝する
いろはから勉強したい八十路坂
貧乏で我慢がまんの子であった
老化防止笑え笑えと医者が言う

倉吉市　田中紀美恵

花火見た満足感の人の波
目立つ白身に付け唄う晴れ舞台
ヤジネムリだれが選んだ議員サマ
免許証返し証明出来ぬ俺

境港市　中井虎尾

あらすごい身辺ニュース地獄耳
遠耳で聞こえぬことは皆通過
黙ってて重石のような存在感
紙一重あの一言で救われた

米子市　田村周子

節電と冷房我慢目が光る
永田町揉めて復興進まない
定番の帽子とリュックバス旅行
夫は夜づり私はディナーいい夏日

米子市　見山温子

引き過ぎたラップ元には戻せない
震災後しなくなったよ拗ねること
習慣に時計なくても目が覚める
朝が来て二人一緒に起きる幸

米子市　中原章子

ダンス場の鏡に脂汗たらり
復興の響き合わない槌の音
震災地に神も仏もない豪雨
安心の駆け込み寺は母の胸

米子市　後藤美恵子

丸い背足は真っ直ぐ自慢です
元気でねやさしい言葉置いて去る
節電に午前はテレビつけません
それなりの皺を刻んだ同窓会

米子市　小塩智加恵

本降りを覚悟で座る甲子園
不祥事に嘘を重ねて致命傷
ジャムなしのコッペを食べてこの巨体
心配が朝のトイレで眼を覚ます

米子市　生田寒之

おだてられ役についたがすぐ干され
大山が父で日野川母とする
もらい物すぐあけるクセなおらない
割引のものしか買わぬクセがつき

米子市　後藤宏之

人生に時々おきるぼや騒ぎ
気に入った服は値段が気にいらん
欲を捨て余生楽しむ趣味の会
家計簿の赤字を埋める貯金箱

鳥取県　大塚美代子

サルスベリ盛夏に耐えて美しい
節電であちこちの窓開け放つ
達筆で押され誤字とは気付かない
定年後ゆとりどころか職探し

鳥取県　田口清帆

原発で放し飼いする牛思う
開け放し部屋いっぱいに春の風
花は咲く季節を思うすばらしさ
五十年波風立てず前向きに

鳥取県　飯野菖子

鳥取県　下田茂登子

無職になって見えて来たのは貯金ゼロ
頑固とは自分一人で何も彼も
他人様に見せているのは外の壁
言い訳はしない無口になってやる

鳥取県　橋谷静江

幸せを感じる朝へ味噌の香を
老化した足腰気合入れてみる
頼まれた事が出来たら良しとする
夜行性朝は寝惚けて起きられぬ

鳥取県　加賀田志延

常用の薬が無くてありがたい
水やりはラジオ体操より早い
駆除しない青虫礼に蝶の舞
強がりを言って立秋ホッとする

鳥取県　岡村孝明

白蟻に好かれた土台家傾斜
野菜作り止めて老人市場行き
この暑さ凌ぎ秋には笑い種
主導権つかむ女性のなみだ壺

松江市　山根邦代

気がつけば忘れ上手になっている
食卓を囲み会話も味になり
我慢にも限界がある熱帯夜
会い度いと心が動く友の文

松江市　松浦登志子

つれあいもガタガタがきて医者通い
遠慮がち医療レシートそっと出す
悪い気もせぬが現実知っている
ふたできず口から出た語歩きだす

松江市　相見柳歩

塾講師よその空気は気にしない
募金箱千円札が入っている
気まぐれなひとほど魅力ある夜更け
輝きは宇宙の池のような星

松江市　柏井日出子

上品な魔女が忘れぬほめことば
おひさまと呼ばれた記憶もどる夏
今なおも球児に元気もらう悦
流れ出る汗美しきなでしこよ

安来市　原煩悩児

退院に以後は附録の生きる欲
退院へ不安が募るまた独居
なるようになるさ附録の人生さ
煎り豆を孫と噛んでる明日の夢

出雲市　黒目英男

のびのびと昼寝のできる夏休み
光景が行く先々でバラ色に
ラジオ体操跳んだところで足縺れ
セミしぐれ暑い暑いと鳴いている

何時か会う友へ話題を溜めておく
大声で笑えぬ被災者を思う
何はともあれ衣食住足りている
介護度へわたしの価値はどのあたり

雲南市　武島　ちよえ

それなりの夢もあります小銭入れ
立ち話きょとんと鴉立ち止まり
出直して行く気にさせる空模様
更年期そうかそうかと食器棚

雲南市　菅田　かつ子

吉凶が続き残高底をつく
忘れてはならない過去もあるんです
繕いはきかぬ破れた知恵袋
み仏のブドウ狙っている曾孫

美作市　小林　妻子

口喧嘩妻にKOされそうだ
何も彼も話すわたしの正味です
奇跡など無いから今日を慌てない
貧乏神に貼られたシールまだ剥げぬ

四国中央市　篠原　久

聞く耳を持たぬお人がよく喋る
土の上の乗っているから生きられる
可能性あれば自然が味方する
今が今ほんとの幸と言い聞かせ

今治市　渡邊　伊津志

叶わない夢に梯子を掛けてみる
包丁がかなり馴染んだこの右手
左手も添えた握手に絆される
犯罪の手口を明かすワイドショー

広島市　岸本　清

阿蘇縦走大大大の深呼呼
監視員ビキニ美人に弱そうだ
お昼寝を隣の電話に起こされる
不登校君も苦しいんだねきっと

竹原市　若年　幸子

本当の事言ったから嫌われる
照れながら出して来ました赤いシャツ
いま書いた自分のメモをまたさがす
新聞の切り抜き溜めて処分する

竹原市　六田　半徳

影絵の中に見つけた秋の無人駅
黒いレールミステリアスに延びている
一色足りぬ恍惚の虹である
虹痩せて想い出坂をのぼれない

山口市　中前　幸子

電力に八つ当たりするノルマ表
残り香を拾う愛情去った部屋
好きな人父とダブって見えてくる
高齢者なんて言わないレオタード

愛媛県　神野　きっこ

香南市　桑名孝雄

スターずれせぬなでしこの好感度
ロスタイム俺もひとけり蹴ってやろ
終戦の阿修羅を君は知ってるか
ないないづくしそれでも生きて来た昭和

北九州市　小松紀子

胸に棘末期の夫に頑張れと
プラス思考今日を大事に生きるだけ
年だもの頭の錆は嘆くまい
ゴキブリを追っかける妻一騎打ち

唐津市　岩崎實

差し出そう今あったかい手の平を
ボランティア支援の風は西東
おとろえは立つも掘るも一二の三
変わりゆく老いてはかなしこの世相

唐津市　吉冨節子

古里の歴史学んで誇り知る
涙つぼ涸れぬ亡夫の三年忌
なでしこに力もらって国和む
老犬と同じ歩みの散歩道

福岡県　豊田愛

元気出そう命ふるわす蝉しぐれ
切り口を何時もまあるく研いでいる
守り度いものがあるから生きてゆく
被災地に思い馳せれば耐えられる

福岡県　本田さくら

絵手紙の花がにっこり友の顔
腹の子も今日は挙式で大はしゃぎ
墓参り山道行けば義母の声
早朝に水打つ人と笑みかわす

山鹿市　米加田恭代

政治とは子供に希望持たすこと
これからの日本支える若い衆
逃げてこい田舎で一緒に暮らそうよ
探し物ばかりしている大きな目

山鹿市　三谷たん吉

バカふたつ連立すれば大馬鹿に
実力の無い駄馬だけで三連単
首相職降りたら二度と顔出すな
政治屋に負けぬおろかな評論屋

メルボルン　藤原ポン吉

踏ん張りが効かずトイレで思案中
閃きを求め個室で過ごす午後
争えぬ子も真似だした長逗留
トイレにて献立たてるせわし午後

札幌市　佐藤登美子

ジリジリと暑さを煽る蝉しぐれ
脳回路夏バテぎみの物忘れ
両の手へ抱えきれない恩があり
再会を誓う握手が最後とは

水切りを競った川が遊ばれぬ
大空へ綿毛飛ばして夏となる
熱風と今宵もデート身も細る
泥舟と知らずに乗った過去もある

弘前市　稲見則彦

必死です辛いリハビリ復帰する
並以上人に言えるは酒だけか
本能が酒やめるなと吠えている
親戚を皆んな騙して駕籠の中

弘前市　高森一呑

見ず知らず人の笑顔につい会釈
病院で血管だけは褒められる
エコに慣れ妙に落ち着く十ワット
思い出は歳を取るほどお宝に

弘前市　高橋洋子

郷棄てて哀しいあひる前へ出る
防護服ことば少なにバス降りる
すっきりはしないが表土削ってる
スイトンや心の溶ける懐かしさ

福島県　七ツ森客山

暑いなあ異口同音のバテた顔
好きだ等と今さら言えぬフルムーン
カラオケに堅い部長の粋な唄
マッサージ仏心鬼手に音をあげる

東京都　井上つよし

バラエティあまり見たくはないんです
花火見て夏を少しは感じてる
電気代旦那一番無駄使い
猛暑でももうすぐ秋はやって来る

小金井市　高岡弥生

直情が昇進のみち棒にふり
少数が多勢に挑む面白さ
人の良さにじみ出ている軽い尻
朝露に楽しくのびるゴーヤづる

日野市　大竹一良

婚約の指輪もたまによそ見する
鼻をかむふりしてそっと涙ふく
夕飯はチンをしてねと置手紙
モナリザに呼ばれいそいそ旅仕度

昭島市　野口忠

国民の皆様誰の事だろう
三十五度超えて人間生きている
味噌つけただけの胡瓜がなつかしい
政治家の言う国民は俺じゃない

佐渡市　高野不二

バランスをほめられどちらにも行けず
私の長所人目につきにくい
バーコード信じるほかはないけれど
あって金無くても金の有難み

富山市　有澤嘉晃

節電の部屋で優しい扇風機
ケータイは要らぬ毎日逢いに行く
遠雷や昔の愚痴をくり返す
磨いても行先のない紳士靴

岐阜市　平野　あずま

遠い過去ひきずり今を生きている
思い出が湧き出てつきぬ終戦日
道端にウチワが並んだすずみ台
すずみ台大人も子供も笑い声

静岡市　渡辺　芳子

よくこけるけれどはきたいヒール靴
エアコンで夏風邪ひいて医者通い
固いかぼちゃ爺切り婆煮生きていく
オクラとり一日あくともうでかい

犬山市　奥村　百合江

スメタナがこころの澱を流し去る
スピーチに合の手入れている斡
道遥の古都で癒しの風に会う
脇役の薬味が主役より目立ち

豊橋市　藤田　千休

がんばろうが枕詞のごあいさつ
死亡記事を真っ先にみる癖がつき
知りたいでも知りたくもない老いる先
夫婦円満あえて悪役引き受ける

京都市　清水　英旺

ひと押しが心の傷をかるくする
感情線行きつ戻りつうずき出し
なめあって痛み肴に酌み交わす
今が旬夢の続きを仕上げねば

八幡市　今井　万紗子

恋に落ち私も秋の絵の中へ
母の庭秋の音色に包まれる
美しい紅葉に揺れている妬心
十六夜あなたを想い想われて

大阪市　栃尾　奏子

ようそんな裏と表を分けられる
ちらちらと裾みせるからエロチック
本音でねしゃべるテレビはおもしろい
コラム欄毎朝みては頭痛する

大阪市　浅井　公平

握手するあわてて名前度忘れし
平泉遺産輝く旅の道
宮参り家系の命抱いている
中秋の団子芒も淋しげに

大阪市　吉川　弘泰

安全ならなんで福島やったんや
ペットの死可哀相なら飼わんとき
蝉合唱小澤征爾は何処に居る
生演奏野外で星も聞いて居り

大阪市　平井　露芳

正確な時を知りたくテレビつけ
手つかずに並んだまんまの待針
日が暮れてローソクの道風情あり
待ち合せ携帯持って坐ってる

大阪市　田中都

街の中嗜み知らぬギャルが増え
投薬を勝手に止めて叱られる
マスコミに横文字多く住みにくい
譲られてた席に遠慮はほどほどに

大阪市　吉田知之

ホームセンター迷路のごとき売場問う
美人より気立てが良いと言われたい
朝顔におはよう言うて散歩道
お互いの我慢重ねて金婚譜

泉大津市　助川和美

シーベルトに恐る恐るの茶飲み友
なでしこに卑弥呼ゆずりの女性力
二度顔を洗いPK見た夜明け
中和して程良い仲の老い二人

泉佐野市　稲葉洋

ドアチェーンの距離で仲良くお付き合い
引き出しに休んでいます万歩計
追い付かれ追い越されても亀が好き
恵まれた命いっぱい生きてやる

貝塚市　石田ひろ子

ウインクのひとつで動く巨大岩
アナログのままで化石になりそうだ
曖昧語えらぶ敵にはなれぬから
夢だけを吹き込んでいるシャボン玉

柏原市　森吉留里恵

皺のない孫の手を見るやるせなさ
もやしのひげとりなぜか私の仕事なり
流行らない医者に二時間待たされる
申し訳ないが病院はしごする

交野市　田岡久幸

立ち位置を変えれば視野が広くなる
晒されて白さが増してくる木綿
やっと今野のなでしこに陽が当たる
出来なくてただいらいらを振り回す

河内長野市　木見谷孝代

節電の夜空を照らす花火群
手も足も口も使って介護する
爺ちゃんが拗ねるとボトル空になる
思春期の心の角にある黙思

河内長野市　谷久美子

放射能知らぬ振りして傍にいる
手に余る趣味が元気を連れて来る
孫からのメールが会話弾ませる
妻からの内申書まだ届かない

河内長野市　辻村ヒロ

河内長野市　木太久　正一

愛犬の散歩同志のお早うさん
ごみ出す日違えて少しボケたかな
まんねりであるが献立きめている
通院も息はずませて控え室

河内長野市　山本　エミ

淋しさを癒されている長電話
今日の策熱中症の脳笑う
節電に蛍楽しむ蚊帳探す
節電と我慢比べの熱帯夜

河内長野市　松岡　篤

先ずほめて明日ガーンと怒ったる
その自慢つい先日も聞きました
休肝の次の日の酒二日分
お一人に一個限りが売りのコツ

河内長野市　八木　加修子

すき焼きの砂糖でもめる新世帯
喉元で出せず停める嫁の愚痴
母の背に意外な意地が見え隠れ
虫籠へ出しては入れる夏の夢

岸和田市　中岡　香代

すべり込みセーフが好きな反抗期
高い水買ってお腹が下りだす
うちの子はタレだけが好き鰻丼
責任はないベクトルとシーベルト

秘湯まで覗き見に来るお月様
嬉しくて口を閉じても目が喋る
黒は黒不正にノーという勇気
脳細胞めぶく新緑さんぽ道

堺市　澤井　敏治

死亡欄先ず年齢に眼がいって
政治までクールビズにせんといて
渡り鳥原発列島敬遠し
加齢とは妻の小言もハイハイと

堺市　増田　和幸

この街に来ると昭和が話しかけ
さきさきと気を回されて落ち着けぬ
初めての立っち世界が広がった
ありのまま言われ腹立つ自尊心

堺市　近藤　治子

それぞれに父の好物供える子
孫のハガキ幼い文字が嬉しくて
記念にと絵ハガキ自分宛に出す
月に祈る震災などのないように

吹田市　藏田　光子

蝉しぐれ切手の中の平泉
足裏が土の匂いを忘れてる
病臥してゴーヤの強さ憧れる
青葉風裏の空地の変りよう

豊中市　源田　啓生

豊中市　石橋優明

にじますの歌を歌って今日は晴れ
折る鶴に折り返されて目がさめる
炎天下話し声みな溶けてゆく
スプラッシュイルカのレーゾンデートルか

豊中市　荒巻夢

暑い暑い言葉重ねて今日終わる
全没の初体験におめでとう
老いたけどきれいな心残ってる
ひと色になる不気味さに首かしげ

富田林市　山野寿之

今日もまた調子外れの七つの子
価値観も趣味も違って仲がよい
封印をされてるらしい腹の虫
噂には耳を貸さないパンの耳

寝屋川市　小谷滋彦

太りたいと願う細身を誉められて
不埒千万老体襲うこの暑さ
封印の恋もほころぶ古日記
なんでやのしゃないねんのくりかえし

羽曳野市　磯本洋一

節電の奉行は母が取り仕切る
節電で茶の間の絆強くなり
定年後名刺は妻の顔となる
脇役がそのまま続く古希の道

羽曳野市　安本美喜

束の間の線香花火をいとおしみ
踊の輪音頭替れば逆回り
泥つきの長ネギみやげ里帰り
身をかがめ手伝い頼む太鼓腹

東大阪市　西田いくひろ

びびったらあかんチャンスに立ち向かう
痛いとこ突かれあっさり白状する
精一杯生きた私が今の僕
楽しかった昭和のロマン胸に染む

枚方市　河田洋子

何事も気まぐれ出来ぬ老いにムチ
気まぐれに買って後から悔まれる
気まぐれに言った言葉に泣かされる
そのうちと身辺整理手につかず

枚方市　小川良吉

欲望は押さえて余生身を軽く
原発が気になる余生不安抱く
わが余生晴耕雨読夢の夢
傘寿越え妻の指揮下の余生です

枚方市　坂本ミヨノ

別れても口惜し涙がこぼれ出る
捨犬飼う命の重さ教えられ
腹で飼うぜいたく虫も夏ばてし
蝉しぐれうるさい今日も同じ木で

多忙でもその間を縫って趣味をする　松原市　市川雄太

球場のビジョン表示に誤表記が
暑い日に寝ぼけて首をひっかいた
仕事中何本ジュース空けたやら　箕面市　寺井柳童

不便でも安全安心高台に
スイーツは別腹娘よく食べる
父と娘はいつも絵になる二人連れ
海峡を燃やし真赤に夕日落つ　八尾市　前田紀雄

逆縁の葬儀言葉を見失う
戦後最悪の天災と人災
復興は良いが増税困ります
図書館で熱中症を避けている　八尾市　山根妙子

高温とデンキ予報が仲間入り
効能の小さな文字に目がつかれ
デジタルな時代の今もそろばん子
ＣＭのように効いたら皆元気　大阪府　中井記久乃

今頃はどこかと地図をなぞる指
今は亡き恩師に出合う盆の月
水しぶき子供の声のプールぎわ
ゆさぶられ目覚めて見れば元の位置　大阪府　坂口公子

満月へハテなハテなと言う生命
梅雨は嫌カンカン照りももうひとつ
連れ出して呉れる楽しみがある日曜日
腰痛へしめるベルトのしめ加減　大阪府　小栢こずえ

もろもろの命いただき生かされる
ショートヘアーエコにつながる事ばかり
買いもせずデパート梯子してるエコ
良いなあと思う品物丸の数　大阪府　若月祐作

意気込みの後は横向き腰の愚痴
碁敵に今日の勝利はハプニング
月一に逢瀬の握手掌が赤い
どっこいしょ調子合せて靴を脱ぐ　大阪府　畑中節子

老いて今川柳と言う心杖
夏空へ雲の絵筆が奔放に
シナリオのない毎日に慣らされる
お互いに我慢した気で愛が枯れ　神戸市　木村忠義

やかましいなと思うからやかましい
困ってる人を無視して通れない
まだできる親切心がけている
妻の居ることをよろしいなと言われ

人災が想定外と言わせてる
胸たたき引き受けとたん不整脈
虹の橋はるかに仰ぎ妻といる
この国の行方を決める放射能

神戸市　輿水　弘

嘘がばれ罪滅ぼしに酒を注ぐ
口車迂闊にのって罪一つ
真夜中の電話楽しい夢破る
都合よい記憶が残る錆びた脳

神戸市　山根弘子

ラストダンスまだ諦めた訳じゃない
ハートにキュン大事な人となる予感
その釦押せばあふれる母のこと
お日さまに愛されました笑いじわ

神戸市　白川淑子

節電の街で気付いた月明かり
飾り気のないひとことが身に沁みる
駐禁の切符貼られて待つ愛車
好物を腹の虫にも食べさせる

神戸市　新保登美子

不揃いのもぎたてトマト道の駅
うとかった東北の地図みなおぼえ
サプリメント一つふやして夏元気
健康と節電早寝はやおきで

尼崎市　小池幸子

取り敢えずまず乾杯に大ジョッキ
ちょっと針でつついてみたいビール腹
二度三度自慢話を聞く辛さ
鮎解禁鮎にとっては仏滅日

尼崎市　市坪武臣

コーヒとカラオケ若さもらう午後
雨もらい土も畑も心地よい
日陰にとゴーヤいきいきつるのびる
甘く冷えた西瓜頂く友がいる

加東市　黒崎美紗子

キッチンへ男子が入る老婆邪魔
送迎車に神が在すか皆拝む
若い女子付け睫には慣れたもの
点滴三度暑さに勝てず冬を恋う

加東市　岩本美緒子

儂だけが蚋に攻められ蚊にくわれ
老人の顔ばかり見るモーニング
ご先祖にすみませんねと有馬の湯
黒い土赤い人参育ててる

加東市　安達厚

青空に誓い新たな敗戦日
PKで笑いスッキリ世界一
プレッシャー笑いの外へ蹴り出され
思いきり笑ってみたい甲子園

川西市　日野岡和之

家族寄る年に一度の佛間の灯
生きて来た証し今年も萩にあう
節電へ団扇片手にところてん
ゴキブリに追いつけなんだ老いの足

篠山市　谷田多美子

居心地の良い距離になり山アラシ
宝クジ売ってる場所は知っている
ホオズキを抱くと童女の瞳に戻る
ガレキガレキガレキの山の民主党

篠山市　沢山啓子

酒はいろいろ恋もいろいろ夜の巷
メール来るとっても甘い誘い水
勢いにのった車輪が軋みだす
ポイ捨てをする人ゴミを拾う人

篠山市　酒井真由

勢いよく伸びてる草と対決だ
時間です目線で合図そっとぬけ
懐かしい声に話がながくなる
お祓いを受けて安心する新車

篠山市　石田久子

原発をしのぐ電池の進化待つ
充電用いのち重ねる乾電池
講演を医者百歳が立ってする
脈がある有りすぎるので一歩ひく

篠山市　酒井健二

ぶり返す暑さ我が身が悲鳴出す
夏祭り浴衣も乱し時忘れ
バラ一輪今日一日の元気くれ
介護中するとされるが空回り

三田市　辻開子

ウッカリを無くすメモを探してる
同期会昔の顔と見比べる
暑いねと言うだけ言うと少しまし
見合い席小さな嘘も混ぜていた

三田市　雑賀一泉

飲みぐすり並べ比べるにがい顔
退院後自己満足の歩行して
梅雨明けを待ってましたとせみしぐれ
猛暑にも負けず頑張る甲子園

三木市　山口久子

まごころがかなり外れて誤解され
年齢が破れかぶれを抑えてる
この顔を晒して無事に古稀が過ぎ
息継ぎに入る真夏の喫茶店

兵庫県　山口不動

店先の野菜は四季を語らない
この歳に何で今更フィットネス
通販で買ってバザーの種になる
定期券買物メモと同居して

宝塚市　丸山孔一

立秋過ぎ炎暑溽暑はないでしょう
面従腹背狡い大人になりました
結石が忘れた頃に暴れ出す
青梗菜どんな味にも染まります

奈良市　矢野良一

暖房具未だ出てるのに熱帯夜
往復のいびき競いは先寝勝ち
満腹と言いつ別腹待っている
縁日の温もり残る肩ぐるま

奈良市　前田弘惠

コーヒーを急いで冷やす夏の朝
顔叩き蚊の一匹に教えられ
靴下を脱いだ形の酷暑です
耳鳴りと思い違いの蝉の声

和歌山市　坂部かずみ

やるだけはやったが介護悔いもある
恨まれることも承知で御節介
縮みゆく身の丈夢を小さく画く
まさかの坂登る訓練しておこう

和歌山市　土屋起世子

華やかな表舞台と裏の汗
スーパーのちらし日課のお買物
節電のお陰減量できました
減量の目安バンドの穴一つ

和歌山市　磯部義雄

繕いをする母かと思う妻の背な
切れた電球節電ですと笑顔して
四こまマンガ川柳感が磨かれる
見事にもゴーヤ実をつけいい日除け

岩出市　村中悦男

愛の鞭父に背いた日の不覚
未だ息がある三途の川を渡れない
アングルを変えれば虹が立っていた
被災地へ善意の箱を組み立てる

紀の川市　北山絹子

風の鳴く街で神経過敏症
はぐれ雲少し笑うて蕎麦の花
節電強化我慢がまんの私語を捨て
理想空転いろいろな風ためて

田辺市　大峠可動

第62回 西宮市民文化祭
川　柳　大　会

日時　10月16日（日）開場12時
（出句締切　13時30分）
場所　西宮市民会館
（市役所南隣）4階
会費　1500円（呈 作品集・参加賞）
兼題　（各題2句・欠席投句拝辞
席題なし）（50音順・敬称略）
「夢」　赤松ますみ　選
「走る」　石井　冬魚　選
「バック」　奥田みつ子　選
「薬」　土田　欣之　選
「焼く」　西　美和子　選
「何」　松本初太郎　選
「運」　村上　氷筆　選
懇親会　4500円　当日受付
共催　西宮北口川柳会　西宮川柳会
瓦木川柳勉強会　甲子園川柳会
連絡先　〒662-0021 兵庫県西宮市
神原6-17　外村　良子
TEL 0798-71-1131

追悼

清水利武さん ありがとう

はびきの市民川柳会　徳山　みつこ

今年5月16日、川柳塔社同人で、当会員の清水利武様が肺炎の為ご逝去。享年91歳。「2月16日入院から3ヵ月。眠るような最後だった」「病室でも変わらず明るかったので助けられたと姉妹で話していた」とご息女の齋藤さくらさん。（川柳塔同人。）

利武さん（本名徳次郎）は当会に昭和63年4月に初参加。三ヵ月遅れで入会した私にはちょっぴり近寄り難い感じでした。でも次第に朗らかなお方と判ってきました。

気さくな話好きで「大阪の八連隊は負けてばっかり。弱いんやで」「わしは輜重兵やった」「わしの料理は美味いで」などほんわかとした話。

でも躾はこまやかに神経が行き届いていたという。鯛の焼き方、魚の捌き方まで三人の娘さんに仕込まれたと、つい最近聞きました。

吟行には積極的に参加され、またカラオケの上手さはこの上なしでした。

当会の他には川柳塔社本社句会はもとより川柳藤井寺や方々お出掛けでした。

平成14年4月句会までたびたび選者も引き受けて頂きました。しかし奥様の体調やご自身の健康に大事をとり、それ以後はお休みになっていました。でも力溢れる賀状も下さっていたので、その内にお顔を見せてもらえるのではないかと思っていました。年月の差はあれ、利武さんを存じあげている会員は15～16名おります。残念で淋しく思っています。

持ち前の明るさと勢いで当会を応援して下さったことに感謝するとともに、あの世でも奥様や戦友や柳友と楽しくお過ごし下さることを願ってお別れといたします。

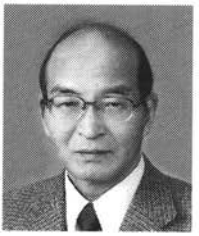
法名　利山鮮光信士　　合掌

遺句抄

（はびきの合同句集・同句報より）

開店へ妻のアイデア活かされる
明石鯛ノタリノタリと春泳ぐ
年の暮やっぱり猫の手がほしい
お年玉貰う予算を子ははじく
初孫へちやほやしてるお祖母ちゃん
正座して孫のパレード見る祖父母
片言で曾孫うれしい事を言う
金屏風背にして笑う誕生日
悩むこと何もないのも又悩み
しんみりと話聞いてるくいだおれ
ヅカガール足がせまって来る舞台
男気のマダム喧嘩へ割って出る
優しさの裏にかくしてあるイケズ
時々は部下に誘われ鴨になる
芸をする猿が豪邸建てました
へそ出して踊っていますかくし芸
タイガース連勝々々酒旨し
胃を切っているのに酒に惚れてます
名水の湧き出る村に住んでいる
あの人の心射止める矢が欲しい
青春が三三九度でけじめつけ
炭坑がなくなり月も淋しかろ
原爆は地獄の鬼も逃げてゆく
アドレスを月に書きたい新世紀
エネルギーないから杖をついてます
あの世へはボチボチいこら白寿翁
精霊流し離しともない手をはなし
無人駅切符やさしく置いてゆく
望遠の視野の向こうに鶴の舞
サスペンス日本の行方気に掛かる

平成二十三年度　路郎賞



倉吉市

牧野芳光

お辞儀する釘の頭は叩けない
頭の中の軽いところを見てもらう
掴むまで美しかったシャボン玉
刃物研ぐ少し野心も湧いてくる
人生の色に仕上がる卵焼き

平成九年五月に川柳塔打吹に入会すると同時に川柳を始めました。路郎賞への応募は幾度かさせていただきましたが、今回突然に路郎賞という名誉ある賞をいただけるというお知らせを受け、寝耳に水という心境です。

こういう名誉と権威のある賞をいただけることになりましたのも、入選させていただいた選者の方をはじめ、諸先輩と会員諸氏のお陰と、深く感謝致しております。

これからは賞に恥じることなく川柳に精進してゆきたいと思っております。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

柳歴

平成9年5月　川柳塔打吹入会
平成10年5月　川柳塔　誌友
平成12年7月　川柳塔　同人
川柳塔打吹　会長
鳥取県川柳作家協会　評議員

路郎賞準優秀作第一席

鳥取市　岸本孝子

欲張ってみたってたかが両の手だ
湯船には無欲にさせる神がいる
どなたにも心の窓は開けておく
大変なときには肩を組めばいい
消しゴムを持つから油断してしまう

路郎賞準優秀作第二席

枚方市　伊達郁夫

太陽をいくつも飛ばすシャボン玉
手付かずの明日に私の虹を描く
褒められてピエロの椅子にまた座る
やさしさを足して空気を動かそう
手ぶらだが笑顔を下げてやって来る

平成二十三年度　川柳塔賞

奈良市

大久保　真澄

紅一点誰も気にせぬ歳となり

無欲にはなれそうもなく二兎を追う

けったいな人とゴチャゴチャして暮らす

姑の顔立てて不出来な嫁でいる

おばちゃんになりきる長い立ち話

この度思いがけず受賞の報を頂き、正直、舞い上がっています。昨年三月定年退職し、六月、川柳教室に入会して一年、こんな私が賞を頂くことになり、大変恐縮しております。

応募することを勧めてくださった先生、諸先輩、そして選者の先生方に、心から御礼申し上げます。有難うございました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

柳歴

平成22年6月　奈良登美ヶ丘産経学園川柳教室入会

平成22年10月　川柳塔社誌友

平成23年1月　翠洋会入会

川柳塔賞準優秀作第一席

篠山市　**酒井真由**

いつか来たこの道丸木橋渡る

月光をひらりと浴びて二十五時

剥落の仏に恋をしてしまう

仲直りするたび太くなる絆

伝言板が駅から消えて以来冬

川柳塔賞準優秀作第二席

富田林市　**山野寿之**

五欲みな抱いたまんまで秋の坂

ゆっくりでいい丁寧にあすを生き

胸襟を開けば春のドレミファソ

言い過ぎた心にひとつ穴があく

姫りんごいつでも父の手を探す

路郎賞得点表　（応募総数148名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
小島　蘭幸	1			2	5						4									3
西出　楓楽	5	3				4			2						1					
髙瀬　霜石		5	4		2											3			1	
早川　遡行	5	3		4					1	2										
居谷真理子		2		1		5						4				3				
江見　見清			5			1			4				3		2					
籠島　恵子		3				4						1				2		5		
宮崎シマ子			1				3					2							5	4
吉岡　　修		2	1						4						3	5				
米澤　俶子			3		4	2									1	5				
山本　蛙城									1	2						5		3	4	
奥田みつ子	4	2							5	1										3
長浜　美籠			3							1					4	5			2	
古川　奮水					1				4			3			5		2			
田中　みね								5		4				2		3			1	
玉置　当代		3	4							1					5	2				
白根　ふみ	4														2		3		1	5
野口　節子		1	3			5			2							4				
春木圭一郎	5								3	4				1					2	
福西　茶子	2						1	4						5		3				
伊藤　玲子					1				2							5	3			4
三島　淞丘		4	3										1			5	2			
原　　章峰		2			5										3	4				1
岩本　笑子	1					5			2						3				4	
福原　悦子			5				2							3			1		4	
黒田　茂代			5					3		2			4				1			
仁部　四郎			5	1					4	2						3				
計	27	30	42	8	18	26	6	12	34	19	4	10	8	11	29	57	12	8	24	20
	両川　無限	安土　理恵	岸本　孝子	鈴木いさお	牛尾　緑良	斉尾くにこ	奥　時雄	片山　忠	伊達　郁夫	岸本　宏章	桒原　道夫	吉村久仁雄	鴨谷瑠美子	川崎ひかり	大内　朝子	牧野　芳光	柿花　和夫	堀　正和	喜田　准一	髙杉　千歩

川柳塔賞得点表　（応募総数 73名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
小島　蘭幸			5						2		3			1	4					
西出　楓楽			2	5		1	3					4								
髙瀬　霜石													1	4			3	5		2
早川　遡行	4	5	2						1						3					
居谷真理子			3								1			4			5			2
江見　見清			2				3		5	4			1							
籠島　恵子										4					3		5	2		1
宮崎シマ子					3					1	2				5				4	
吉岡　　修					3		1					5		2	4					
米澤　俶子				2			4	3			1							5		
山本　蛙城								2			3			1		5		4		
奥田みつ子	3		5				2		4											1
長浜　美籠										5	1		4						2	3
古川　奮水			2		1				3	4									5	
田中　みね	4											3			2	1			5	
玉置　当代					4		3		1						2				5	
白根　ふみ				2				3	1						5					4
野口　節子	4								2	5			1						3	
春木圭一郎			3		5		4							2						1
福西　茶子												1		3	5				4	2
伊藤　玲子	4						5			3					2	1				
三島　淞丘	1		3				5		2	4										
原　　章峰			5							1		4			3					2
岩本　笑子									1	2				4	3					5
福原　悦子			5				4	1			2		3							
黒田　茂代					5						3				4		1			2
仁部　四郎	1			2								5		3						4
計	21	5	37	11	21	1	34	9	22	33	16	22	10	24	45	7	14	16	28	29
	小谷　滋彦	山根　妙子	酒井　真由	成田　公一	加賀田志延	石橋　優明	山野　寿之	助川　和美	若年　幸子	島田千鶴子	中原　章子	関　よしみ	吉井菜々子	國實　力	大久保真澄	中岡　香代	辻内　次根	竹村紀の治	有澤　嘉晃	花岡　順子

平成二十三年度　愛染帖賞

受賞作品

高槻市　片山　かずお

自惚れの耳にお世辞が心地よい
譲られて背中を丸くして座る
どこへでも薬袋が付いてくる
夫婦げんかでもしなければ間が持たぬ
限りある日日を楽しむのが務め

評　片山かずお：特別な事件もない日常生活の中の、何気ない心の揺れをしっかり作品にまとめている。作品のレベルにムラがなく、毎月安定しているのも評価する。

籠島恵子：「友達の不運…」のような、自分の身勝手さを詠う勇気。平凡から抜けようとする努力を買う。

安土理恵：「歳の順なら…」に見る思い切った表現は健在。ただ、調整できるであろう破調が気になるところ。

伊達郁夫：他人事ではなく、自分自身の心情を率直に述べている作品群には、大いに共感できる。

（新家　完司）

準賞作品

寝屋川市　籠島恵子

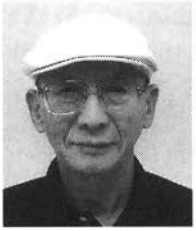
さくらからさくらで歳をとっている
友達の不運で学ぶ事がある
一日が二十時間になってきた

橿原市　安土理恵

本当はわたくし善女なのですが
歳の順なら次はダンナだナムアミダ
包丁を持ち出す程のことでない

枚方市　伊達郁夫

飲み足らぬ顔を無視して飯が出る
募金箱素通りをした今日の鬱
看護婦のお尻気になる回復期



片山かずお

思いもかけぬ受賞のお報せに「この私に？」と、驚いてしまいました。

そして、これは「見守ってあげるから、もっと頑張りなさい」との、川柳の神様からの励ましであろうと、嬉しく受け止めさせていただきました。

これからも愚直に川柳を続けてまいりますので、よろしくお願いいたします。このたびは本当に有難うございました。

柳歴

平成19年　川柳塔社誌友
平成22年　川柳塔社同人
平成22年度檸檬賞受賞

平成二十三年度　檸　檬　賞

受賞作品

河内長野市　山岡冨美子

背伸びした日々が外反母趾にある

評　受賞作品は、背伸びした生き様の紆余曲折を、「外反母趾」に凝縮させたまさに「生命ある句」である。準賞の螢さんは人類への警告に、千代さんは穏やかな説得力に惹かれた。候補作品三句とともに、年間約九千句にも及ぶご投句の中から選ばれた傑出の作品である。（三宅　保州）

評　共選により選者の視点の違いが表れた一年でした。受賞句、厳しく生きた証はあちこちに刻まれていますが、外反母趾によりインパクトの強い句となりました。準賞の螢さんは、人間に対し哲学的な問いかけをし、千代さんや候補作品は人生の真実を素直に表現されました。

（山本希久子）

準賞作品

にんげんを極めて猿にもどれるか　土橋　螢

健康が最後にものをいうのです　志田　千代

候補作品

穏やかな朝日が花にわたくしに　小林　わこ

かたつむり歩いた跡がしかとある　宇野　幹子

アメとムチセットになっているこの世　夏目　一粋

山岡冨美子

受賞の報に接して、駆け抜けた三十数年間の、切なくも熱い現役の日々が鮮やかに脳裏に去来致しました。

選んで下さいました先生方と、絶え間ない刺激を与えて下さいました投句のお仲間に、心からのお礼を申し上げます。

有難うございました。

柳　歴

平成10年　川柳を始める（長柳会入会）
平成14年　川柳塔社同人
平成17年　朝日新聞「なにわ柳壇」入選
　　百句集「賛歌」上梓
同　年　路郎賞準優秀作第二席受賞
平成20年10月より常任理事

平成二十三年度　一路賞

受賞作品

紀の川市　宇野幹子

前向きな花は大きな実を結ぶ

評　物の考え方が進歩的、積極的であれば、その結果が大きく良い方向へ前進することを、擬人法で上手に捕えました。着想、表現ともに言い得て妙。

準賞作品朝子さんの句、酒を飲んで大言壮語する人もいますが、失敗も多く同情的なところもあり巧みです。ちかしさんの句、東日本大震災後、地震・津波・原発事故に対する批評をして論ずる人が続出した。言うことは誰でもできる。側面から見た皮肉味が心地よく響きます。（小西　雄々）

評　なでしこジャパンは大きな実を結び国民に勇気と希望そして感動を与えてくれました。受賞作品は迫力や変化がなくても、句はその人の心であり幹子さんの素直な姿勢と言葉が息づいています。

準賞作品、朝子さんの句、少しお酒の力を借りて発散する感情にユーモラスな女性らしさが溢れています。ちかしさんの作品は、各ジャンルの評論家の一部の方々でしょうが、自らも反省して覚めた目を養い、責任のある発言を期待したいものです。（松原　寿子）

宇野　幹子

この度、突然一路賞受賞の一報をいただき驚きと喜びの感動で、震える思いです。未熟な私の拙句を推して下さった川柳塔の諸先生方に深くお礼と感謝を申し上げます。本当に有難うございました。

これを機に一歩一歩前向きに励んでゆきたく思います。今後共、宜しくお願い致します。

柳歴

平成16年11月　和歌山三幸川柳会入会
平成17年4月　川柳愛好会くろえ入会
平成18年8月　川柳塔社誌友
平成19年10月　川柳塔賞準優秀作
第一席受賞

準賞作品

ほろ酔いの強気はあとで恥ずかしい　大内　朝子

ぞろぞろと出てくるにわか評論家　竹治ちかし

候補作品

太陽に優る指揮者はないだろう　山下　節子

岩石を砕き一粒だけの玉　福士　慕情

欲少し削ると川が流れ出す　武本　碧

アイライン今日も戦に出る女　藤井　正雄

受賞作品

松江市　藤井寿代

日向ぼこ誰のものでもない自由

評　受賞句は、日向ぼこに何にも拘らない自由奔放さを見つけ出したその表現が素晴らしく、句の大きさに魅かれました。

準賞の二句は、人生と自然を大きく捉えており、また候補句の四句にも川柳ならではの面白みがあり、それぞれ素晴らしい作品と感じられ、選考に当たりました。政岡未延子さんとも同じ目線で決めさせて頂きました。（**太田　昭**）

評　ほっこりとした語り口と、「誰のものでもない」という強い意志との対比が素晴らしい。太田昭さんとの選考の結果この句が残りました。（**政岡未延子**）

準賞作品

一度だけの人生だからよく笑う　大内　朝子

太陽が土の野心をふくらます　牧野　芳光

候補作品

故郷という筆順は忘れない　森山　盛桜

正念場ゆずれば僕が消されそう　喜田　准一

形状記憶シャツは賢くなりました　徳山みつこ

情熱が枯れたら一度会いたいネ　太田扶美代

藤井　寿代

些細な出逢いから川柳の虜になり、このような大賞を戴きとても感謝しています。私的には「人工衛星に乗って、無事月に着陸」。それぐらいの奇跡が起きた感じです。思い通りにならない世の中ですが、日向ぼこは心までも、暖かくしてくれます。そして誰のものでもありません。そんな心境を詠みました。全国区での受賞、本当に有難うございました。

柳歴

平成17年　えんや川柳会入会

平成23年1月　川柳塔社誌友

受賞者の皆さまおめでとう

小島　蘭幸

昨年の千号記念大会で、河内天笑主幹から情熱のバトンを受け継いだ私。この一年は正に激動、充実の日々でした。私が川柳塔社の主幹になって初めての六賞を受賞される皆さまに心からお祝いを申し上げます。

今年の一次選考は、河内月子、新家完司、木本朱夏、川上大輪、村上玄也、西出風楽諸氏が二賞それぞれ候補をチェックして選出、私が二十名にしぼり第二次選者にお願いしました。

路郎賞の牧野芳光さんは、最近特に活躍が顕著で作品に風格があります。準賞一席の岸本孝子さんは、ご夫婦で日々、切磋琢磨されています。準賞二席の伊達邦夫さんの作品には、ほっとする優しさがあります。川柳塔賞の大久保真澄さんは、日常生活を軽く深く微笑ましく詠んでおられます。準賞一席の酒井真由さんの作品は切れ味鋭く爽快です。準賞二席の山野寿之さんは男の哀愁を切々と詠んでおられます。愛染帖賞の片山かずおさんは、昨年の檸檬賞に続いての受賞です。檸檬賞受賞の感想をかずおさんは…これは「もっと精進せよ」との、あたたかい激励であろうと受け止めさせていただきます…。と書いておられます。檸檬賞、一路賞、各地柳壇賞受賞の皆様の日頃の精進を思うと胸が熱くなります。受賞者の皆様、本当におめでとうございます。

二賞選考経緯

木本朱夏

連日記録的な暑さの続く八月十二日、第一次選考委員（蘭幸主幹・楓楽理事長・大輪副主幹・完司副主幹・玄也副理事長・月子副理事長・朱夏編集長）が事務所に集合。

路郎賞には昨年よりも十九名多い百四十八名、川柳塔賞には二名プラスの七十三名の応募があった。

一次選考に残った作品の中から、最終の二十編を蘭幸主幹が決定。コピーの上、全国の二次選者に郵送。二十二日、返送された選考結果を楓楽理事長立会いのもと、木本朱夏、山岡富美子が集計した。

今年度の二賞は、蘭幸主幹が初めて最終の二十編を選ばれたことに大きな特色がある。

川柳塔賞の一次をパスされた多くの方、及び受賞された大久保真澄さん、酒井真由さん、山野寿之さんは、誌友になって間もないと思われる。これらの方々がいずれ同人となり、次代の川柳塔を牽引して下さるであろうことを期待してやまない。

路郎賞に決定した牧野芳光さん、準優秀作第一席の岸本孝子さんは、共に鳥取県のベテラン。川柳王国・鳥取の面目躍如たるものがある。ますますのご精進を期待したい。

惜しくも受賞を逃した方々は、次年度に向けて新たな夢に挑戦したい。

二賞候補者在住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	鳥取市	橿原市	鳥取市	藤井寺市	和歌山市	鳥取県	堺市	西宮市	枚方市	鳥取市	堺市	羽曳野市	藤井寺市	東かがわ市	香芝市	倉吉市	堺市	三田市	和歌山市	八尾市
川柳塔賞	寝屋川市	八尾市	篠山市	米子市	鳥取県	豊中市	富田林市	泉大津市	竹原市	高槻市	米子市	富田林市	西宮市	竹原市	奈良市	岸和田市	紀の川市	米子市	富山市	大洲市

若い作家に与える言葉

（順不同）

川柳雑誌　No 392　（S 35年 新春号より）

○

川上三太郎

〝一日一度川柳をおもい
一日必ず一句を書け
わが句はわが子ぞ
愛して誇るな〟

○

創意を抱け

岸本水府

青年が新興川柳作家という錯覚がありそうだが、年令差よりセンスの問題である。青年の作品は新しいとは限らない。

「営業用笑い」
「地球を掻く」
「さかくらげ」

など、臭気ふんぷんを流用するのは主として青年作家にあるようだ。

「青年よ大志を抱け」より先に
「青年よ創意を抱け」である。

○

若い作家に対し

浜夢助

一番はいり易くして一番むずかしい川柳。と私は思っています。

〝作家よ初心にかえれ〟と常に叫びつづけている私、

「満足は退歩のはじまり」とか、深遠な川柳の道をかくして歩まれんことを。

○

若い作家

椙元紋太

若い作家――それがどんな方か知らずに申上げるのですが、―― 私は今になって勉強が足りなかったことが思われます。言うても還りませんから後悔とまで強くないのですが、実質は後悔です。勉強と言っても果てしのないこと、文学一般ですが取敢えず川柳関係（和歌、俳諧、前句付、発句、雑俳）の文献を、人に筋道立てて話せるほど読んで置けばよかった、それをしなかった私は自分ながら底の浅い薄っぺらな人間を感じます。何か人に役立つことをと思う時、今更のようにそれを感じます。勉強は今からでも出来ますが、――

日暮れて途遠し。

○

山路閑古

自身若い作家の積りでいる。今更先輩面をして、何をか言わんやであるが、川柳は理屈よりも実作だ。下らぬ詩論など振り廻さないで、一句でもよい句を作り、成る程川柳とはこういうものか。いや全く恐れ入ったと、シンソコ人が共鳴同調するような、そういう川柳家に私はなりたい。

○

初心者へ

堀口塊人

きどるよりも素直に
飾るよりも素朴に
衒らうよりも正直に
ほんものの自分の
ほんもののことばを
大切にして下さい

誹風柳多留一一篇研究 74

山田昭夫・増田忠彦
山口由昭・小栗清吾
伊吹和男
清　博美

577　**ふだん帯〆ながら出てたんとくや**

山田　「くや」がはっきりしないが、『川柳風俗志』の「食や」、つまり「沢山お上りよと御新造のお世辞」を頂く。外出先から帰って来て、不断着の帯を締めながら、言っている図。なおこの句、同書では信濃者へ言っている場面とされており、決め手がないので、それも頂戴する。

もふ弐膳つけてみやれと御新造　二二28

山口　外出からの戻りだとすれば、この信濃者はお内儀の供をしたのである。外で喰いはぐった。

清　信濃とばかり決めつけられないような気もする。

578　**十兵衛日向タへたつた三日出る**

山田　明智日向守十兵衛光秀。天正十年六月二日、本能寺に織田信長を襲いこれを討ち、天下を取る。しかし十三日には京都山崎で豊臣秀吉軍と対戦して大敗、居城の坂本城へ敗走の途中、小栗栖の竹藪での中で、土民に襲われて一生を終える。

このように、実際は信長を討ってから死去まで十二日間あったのだが、どういうわけか「三日天下」とされている。三日は現実の長さではなく、「⑤わずかの間」（「日国」）の形容なのであろう。日向（ひなた）は、日向守からの利かせ。

なお、この時死んだのは光秀の影武者で、本人は美濃の山中に名を変えて生き延び、関ヶ原の合戦に参戦の途中死んだという言い伝えもあるそうな。

洛中にき、やうの花が三日咲　一二36
時あかり三日日向をてらす也　三四30

山口　賛。洒落のみ。

清　賛。

579　**百八の内五六十娵のこと**

山田　人間の煩悩は百八つあるというが、姑の煩悩はその「内五六十嫁のこと」、つまり半分は嫁についての悩みというのだ。しかし嫁にすれば、「百八の内百八が姑（ばば）のこと」であろう。

万八をくり〳〵　娵をにらめつけ　傍四30

増田　賛。百万遍の数珠を繰りながらの愚痴とする先人の解も捨てがたい。

山口　念仏講の数珠の数が百八つだとすれば増田説はドンピシャリだが。

小栗　「辞彙」は「百八」（ひゃくはち）を「数珠の異称」とし、主題句を引用して「念仏より嫁いびり」と脚注。礎解例句のようなことではないか。

清　小栗説賛。数珠の玉は百八つである。

580 下女が兄ぐらつくやうにかしこまり

山田 下女の奉公先で、何があったか知れないが、兄が畏まって正座している。しかし馴れないものだから、ぐらぐらとして落ち着かない。

むせつほい進物を出す下女がせな　安元信3

山口 賛。気後れしているのである。

小栗 賛。単に挨拶しているのみ。

清 賛。

581 **今夜のもからつ騒ぎと遣り手いひ**

増田 「今夜の一座の客も数ばかり、金にはならないカラ騒ぎの連中だ」と、団体客をむかえた遣手の繰り言。

大一座かさばつかりと遣り手いひ　四41

山口 賛。「この顔ぶれでは」といったところ。

清 賛。大一座。

582 **ごくるいを二日くわぬとたいこのみ**

増田 これも吉原の座敷であろう。「これでまる二日穀類を口にしていない」と、太鼓もちが、商売繁昌に笑みをもらしながら盃をいただいている。「穀」を「ごく」とにごるのは、粋人の洒落でしょうか。

山口 賛。しかし笑みともとれるが、つらい職業上の愚痴とも。

小栗 状況はそういうことと思うが、「穀類を（二日）食わぬ」の意味するところがよくわからない。『角川古語大辞典』は、「穀類」で主題句を引いて「幇間が酒を飲む口実」と注記するが、この「口実」の意味もはっきりしない。また、「日国」の「穀類」の項では、洒落本『売花新駅』の「盃を手にとるがさいご、その坐でごくるいを口へ入れた事のねへ男だ」という文章を引いている。これを見ると、酒席での呑助の決り文句のようにも見える。このニュアンスがわからぬと解釈したことにならないと思うが、力及ばず。

伊吹 賛。単純に宴席で酒ばかり飲んでいる、と思っています。

山田 右宴席続きでとして賛。

清 小栗説、気になるところ。決り文句であったのかも知れない。とすると、単に酒ばかり呑んでいる状態には違いないが、もう少し江戸っ子の洒落た感覚に触れなければならないのかも知れぬ。

583 **あつい茶をのんでゝ御用しかられる**

増田 酒屋の御用きき、外の用から戻っての一服の景だろうか。「茶はぬるいのにしろ、なまいきに熱いのをいつまでも啜っているんじゃない、シャキシャキ働きな」と、どやされている。

樽ひろい毛ぬきをあてゝしかられる　八13

山口 賛。お得意さんで御馳走になっている所を店の者に見られたケースもある。

小栗 賛。熱い茶では飲むのに時間がかかる。

清 賛。時間が問題。御用の分際でのんびりしては居られない。

584 **腹悪しく紅閨を出る浅黄うら**

増田 吉原ではもてない客の代表、勤番侍の諷詠。夜更けて待てども相方は現れず、といった仕打ちにあったのであろう。「身ども、罷り帰る」と、斜めならぬ腹立ちで寝間を出る。

寝もやらず紅閨を出ルもてぬやつ　安元義4

伊吹 賛。武士らしく、堅苦しい語で表現したのでしょうか？

山田 賛。そういう事でしょう。

清 賛。武士の使う言葉で表現。

愛染帖

新家　完司　選

真人間になれと刑務所建っている　鳥取市　永原　昌鼓

（評）塀の中の人には矯正教育を行い、塀の外の人たちには無言の警告を発している。できるだけ、お世話にならぬように努力したい。

スーパーのチラシが妻の愛読書　和歌山市　磯部　義雄

（評）熱心に見てると思ったら…。毎日、一円でも安くと遣り繰りしてくれているおかげで、家計も破綻せずやって行けるのだ。

線香花火一本くれた近所の児　寝屋川市　平松かすみ

（評）「わーキレイねー」と声をかけたら、「おばちゃんも！」とくれた線香花火。たった一本ではあるが、うれしいうれしい一本だ。

十年もスカート穿いたことがない　八尾市　髙杉　千歩

（評）パンツスタイルのほうが動きやすいのは確か。しかし、お洒落するのが面倒になってきた、という理由からではないように…。

ひとり住む気ままな旅の日のごとく　大阪市　笠嶋　惠美

（評）行きたい所へ行き、食べたいときに食べたいものを食べる。まるで気ままな一人旅のような毎日。誰もが憧れる理想的境遇。

遠出する時は家族の許可がいる　美作市　小林　妻子

（評）隣町程度なら良いが、神戸や大阪への遠征になると、あれこれうるさい。いつの間にか、そのような歳になってしまった。

主婦の座に退屈はない糸と針　藤井寺市　太田扶美代

（評）巾着袋を作る。タオルを雑巾にする。普段着の綻びを繕う。いつもコツコツ働いている、その地道さが家庭を支えているのだ。

散り際は見事でなくていいんです　兵庫県　上田ひとみ

（評）そう、「桜のように見事に散る」など有り得ない。みんなジタバタして、もがき苦しみながら散る。それが当然。それで良し！

方向音痴地図を書いてもやはり下手　奈良市　辻内げんえい

（評）例外もあるが、男が方向認知能力に長けているのは、太古から野山で狩猟をしていたDNA。地図を描くのも男の方が上手い。

たらればでちょっぴり過去と戯れる　堺　市　矢倉　五月

（評）これまでにたくさんあった分かれ道。別の方へ進んでいたら？　などと、ひととき空想を楽しんでも、結局は現実に戻るだけ。

宗教に関係のない朝のパン　大阪市　谷口　義

ゆっくりと回れよ古稀の観覧車　豊中市　水野　黒兎

車間距離律儀に守り割り込まれ　大阪市　大川　桃花

欠片でも心に浸みる思いやり

美容師に逆らうなかれカット前　浜松市　岡田　史郎

墓そうじ無精を蜂に叱られる

汗だくに立秋というカレンダー　三田市　田中　章子

ゴキブリに挑むわたしの顔いかに

失敗談山盛りあって座がなごむ　吹田市　太田　昭

動体視力ヤブ蚊一匹追いかける

夏風邪をひいて節電しています　鳥取市　岸本　宏章

僕が寝る頃は園児も昼寝する

信号機一基で足りる我が団地　橿原市　居谷真理子

よごれてはおりますけれど私です

母さんと呼ばれるもったいない立場　三田市　北野　哲男

充電も放電もさす孫が来る

親子してメダカ探した里帰り

和歌山市　牛尾　緑良
雨になる匂い　待合室あふれ

柏原市　森吉留里恵
穴を掘る君の心に届くまで

唐津市　山口　高明
紛争の種が大陸棚にあり

鳥取県　細田　裕花
私の影がどっしりと濃い真夏

松江市　三島　淞丘
長生きの友はおおかた三枚目

橿原市　安土　理恵
生前葬ずっと迷っているのです

堺　市　大隅　克博
ちょっとだけ詰めてもらえば座れそう

和歌山市　柏原　夕胡
一目を置き尊敬はしていない

和歌山市　木本　朱夏
回転ドアくるくるハムスターに似る

堺　市　奥　時雄
太陽の殺意地球が焦げている

堺　市　志田　千代
虫好かぬ相手もそれは知っている

高槻市　片山かずお
左手をさすってくれるのは右手

紀の川市　辻内　次根
間違った筆順で書く田中の田

海南市　堂上　泰女
爪切りの置き場所が覚えられない

神戸市　山口　光久
雨上がり傘が邪険にされている

奈良県　渡辺　富子
暑い暑いと言って暑さをまぎらわす

大阪市　江島谷勝弘
窓開けて飲むとおいしい缶ビール

大阪市　柴本ばっは
尻餅で丈夫と知った骨密度

河内長野市　村上　直樹
お茶を濁すことも大事な処世術

西宮市　緒方美津子
記憶しまう箱がときどき底抜ける

松江市　石橋　芳山
半世紀金魚すくいをしていない

海南市　小谷　小雪
よく笑うよく泣く夫婦金がない

弘前市　髙瀬　霜石
かくし事なくなり味気ない夫婦

河内長野市　谷　久美子
暴動もなく地デジ化が成る平和

鳥取県　佐伯　やえ
飲み過ぎは毒だと孫にまで言わす

和泉市　横山　捷也
後悔のない無駄遣いしてみたい

京都市　坪井　孝一
高鳴りをすんなり出せぬ古稀の恋

芦屋市　黒田　能子
安っぽく聴こえる遠くからの声

大阪市　田浦　實
話題にも上がらず群れている鰯

倉吉市　野口　節子
四季ごとに扱いにくいのはわたし

大和郡山市　坊農　柳弘
のんびりもさせてはくれぬ油蟬

八尾市　村上ミツ子
美人薄命それは昔のことでしょう

弘前市　福士　慕情
どのへんでいつ妥協する消費税

香芝市　大内　朝子
玄関に靴が蔓延る夏休み

枚方市　伊達　郁夫
「百まで生きよう」言ってた友の初の盆

鳥取県　斉尾くにこ
前置きの長い野菜を貰う朝

河内長野市　松岡　篤
済みませんご無沙汰でした広辞苑

恐竜のより人の骸骨恐ろしい

おばさんになってしまった娘たち

無い無いない確かに有った筈の知恵

よく吠える犬の鎖は弛んでる

まとめ買いしても割引ないハガキ

水溜りトンボも雲も遊ばせる

湯上りのビールは女かて唸る

大笑いすればお酒もうれしがる

定年へ自分でつくる紙吹雪

立ち飲みと勝手が違うお茶の会

福島県　七ツ森客山
ふくしまにきれいな空気くださいな

東大阪市　北村　賢子
被災地で折れぬ笑顔へ栄誉賞

富田林市　中井　アキ
そろそろと歩いてるのに蹴躓く

大阪市　岩崎　公誠
おおかたは不意にあの世へ呼ばれてる

大和高田市　鍛原　千里
渋うちわ母の自慢のごもく寿し

枚方市　寺川　弘一
四季咲きのバラなんとなく無節操

米子市　後藤美恵子
今年もまだ蚊に愛されているらしい

唐津市　井上　勝視
建てた家と共に僕まで傷んでる

倉吉市　岡崎美知江
お誘いを三度ことわりまずくなる

箕面市　広島　巴子
御先祖も子もそうめんでおもてなし

枚方市　丹後屋　肇
看護師と手に手を取って手術台

神戸市　白川　淑子
卑下もせず自惚れもせず野辺の花

岸和田市　井伊　東吉
成長の証か孫は顔見せず

鳥取市　吉田　弘子
地デジ化へまたも昭和が遠くなる

泉佐野市　稲葉　洋
メルトダウンしそう酷暑の思考力

鳥取県　加賀田志延
エコ団扇秋にはゴミにしないよう

堺　市　澤井　敏治
節電対策実行昼寝中

藤井寺市　鴨谷瑠美子
動物園近づく秋を待っている

堺　市　村上　玄也
敵地でも多数派である虎ファン

鳥取県　山下　節子
借りた人貸した人とにあるギャップ

三田市　雑賀　一泉
酔い痴れてふらふらとなりパラダイス

豊中市　松尾美智代
ケーキひとつ食べて散歩を一時間

河内長野市　梶原　弘光
ルームランナーみんなマウスの顔になる

堺　市　山本　半銭
連弾の息が合わなくなってきた

大阪市　伏見　雅明
税務署と妻の指導に逆らえず

篠山市　沢山　啓子
祭り膳なつかしきかなタニシ煮る

豊中市　藤井　則彦
裸婦像をじっくり見たら見返され

三田市　上垣キヨミ
風のみち猫を退かせて昼寝する

高知市　小川てるみ
満天の星から貰うテレパシー

鳥取市　高浜　勇
仕送りの足りてさっぱりこぬ電話

三田市　石原　歳子
雨も止みバスも直ぐ来たついている

大阪市　松尾柳右子
雀二羽何を食べるか露地の奥

大阪市　津村志華子
お仏飯米の銘柄ひとめぼれ

鳥取市　田村　邦昭
傷心を慰めるよう細い雨

和歌山県　森下よりこ
なりゆきでまだ働いています古希

奈良市　矢野　良一
遠花火故郷の母さん元気かな

大阪府　野田　栄呼
席取りに置いたハンカチ消えている

東大阪市　西田いくひろ
円高で好きなバナナが安くなる

鳥取県　石谷美恵子
死にたくはないが後から押してくる

富田林市　山野　寿之
過去帳の父がときどき意見する

和歌山市　玉置　当代
柳歴は長いが脳が委縮する

高槻市　富田　美義
喉よりも心うるおす茶を所望

寝屋川市　冨山ルイ子
茜雲亡き人そこにおわします

鳥取市　土橋　螢
去るひとを見送っている鰯雲

大阪市　板東　倫子
マンションの小窓から見る遠花火

堺　市　加島　由一
大花火菊と牡丹に吟醸酒

岸和田市　増田　隆昭
百薬の長は酒より一万歩

倉吉市　山中　康子
ふくらはぎ擦って伸びてきた背すじ

東かがわ市　川崎ひかり
鍋焦がす程度で済んだ消し忘れ

黒石市　相馬　一花
ブランドを値切らず買って後悔す

愛媛県　神野きっこ
角隠し十年経てば角が出る

寝屋川市　岡本　勲
かあさんが怒ると家中みな沈む

藤井寺市　若松　雅枝
履き馴れた靴が優しい散歩道

鳥取県　竹信　昭彦
エコランチやっぱりカップメンにする

和歌山市　古久保和子
何がどうなったパソコンストライキ

八尾市　田邊　浩三
四世代揃ってカルタ母白寿

羽曳野市　徳山みつこ
私を洗う高野を渡る風

寝屋川市　小谷　滋彦
剃った髭夕餉に伸びてサマータイム

長岡京市　山田　葉子
宴会の気分で孤食ゴージャスに

羽曳野市　磯本　洋一
下ろしたて杖の御供で旅に出る

箕面市　出口セツ子
結果には出ないが汗をかいている

今治市　渡邊伊津志
地力とは人を援ける力持ち

鳥取市　倉益　一瑶
メダカから鯨になってゆくうわさ

富山市　有澤　嘉晃
心配のネタを補聴器また拾う

岸和田市　雪本　珠子
雑音を掻き消し脳を休ませる

大阪市　太田としお
平和です勝った負けたと甲子園

大阪府　畑中　節子
老いという言葉を捨てる畑が待つ

鳥取市　土橋はるお
僕んちの西瓜カラスが試食する

紀の川市　北山　絹子
シーズンを先取りしてる試着室

堺　市　近藤　治子
役に立つ喜び知って子が育つ

河内長野市　辻村　ヒロ
口手足動かし老いを遅らせる

大阪市　栃尾　奏子
私に今出来ること考える

神戸市　奥水　弘
妻ハワイ俺は草取りこれでいい

日高市　根岸　方子
故郷の市史思い出の玉手箱

大阪府　籾山　隆盛
ふるさとの西瓜ほとけに供えます

鳥取県　西谷　悦子
蜂の巣へ尊敬をする造形美

宇部市　平田　実男
妻が袖引くから止めた自己主張

京都市　三宅　満子
器量良しの野菜炊いたらみな同じ

安来市　原　煩悩児
賜わりし余生大切に大切に

加西市　金川　宣子
チャンネル権孫が握って放さない

塩竈市　木田比呂朗
スーパーで年中買える旬の味

堺　市　西村りつえ
お昼からポンコツの脳寝てばかり

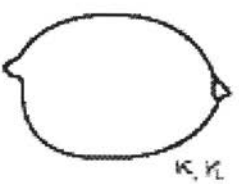
日野市　大竹　一良
コマーシャルすぐに頷く悪い癖

大阪府　桑田ゆきの
手花火に立つ子座る子闇に浮く

共選欄　檸檬坊

（薫風書、カットとも）

（投句　712句）



「錯覚」　福士慕情選

錯覚に終わった原発の神話　シドニー　坂上のり子
安全は錯覚だったフクシマ忌　弘前市　今　愁女
シーベルト　シートベルトと勘違い　塩竈市　木田比呂朗
錯覚の極みにあったマニフェスト　札幌市　小沢　淳
錯覚にかき回されている政治　八尾市　村上ミツ子
録音で聞けば錯覚思い知る　堺　市　奥　時雄
増えてきたアクセルブレーキ踏み違い　岸和田市　井伊　東吉
昼寝して朝と間違えうろたえる　米子市　加藤　正二
なんでやねん本日休診連休だ　八尾市　髙杉　千歩
ヒーローになり切る孫のコスチューム　札幌市　三浦　強一
譲ったら結構ですと睨まれた　河内長野市　村上　直樹
怖いから腕を掴んだだけなのに　芦屋市　竹山千賀子
錯覚の恋に溺れていた不覚　香芝市　大内　朝子
錯覚が愛の卵を産む予感　黒石市　相馬　一花
哺乳びんパパのオッパイ呑んでいる　堺　市　志田　千代

「錯覚」　池森子選

気がつけばトリックだったマニフェスト　松江市　三島　淞丘
原発と原爆錯覚はしない　鳥取県　竹信　照彦
自由平等平和壮大なる錯覚　枚方市　丹後屋　肇
錯覚とうぬぼれないとできぬ恋　箕面市　出口セツ子
錯覚し人の話の腰を折り　神戸市　山根　弘子
隣のベンツさぞ金持ちと思ってた　泉大津市　助川　和美
安い筈目の錯覚か零の数　川西市　米原　雪子
妻美人酔いの錯覚だけでなし　八尾市　宮崎シマ子
オアシスに見えていたのは蜃気楼　西予市　黒田　茂代
電照菊また錯覚を繰り返す　島根県　伊藤　寿美
いつも錯覚夾竹桃が咲いてから　松江市　川本　畔
錯覚をさせる鏡を買ってある　高知市　小川てるみ
錯覚の鏡を今日も拭いている　鳥取県　石谷美恵子
錯覚を楽しみました青春期　堺　市　西村りつえ
錯覚も誤解も肥し金婚日　三田市　北野　哲男

この酒が君を美人にしてしまう　弘前市　稲見　則彦
ほんのりとノンアルコール酔わされる　米子市　竹村紀の治
胃薬が不思議に効いた偏頭痛　愛媛県　神野きっこ
きれいだね手の花束のことだった　大阪市　古今堂蕉子
夜店のダイヤとひと夏の錆覚　和歌山市　古久保和子
錆覚が引き金になる痴話げんか　大阪市　松尾柳右子
軽い句を選者が重く受け止める　唐津市　坂本　蜂朗
お名前で女性の方と思い込み　鳥取市　有沢せつ子
合性はぴったりですのガラス靴　東大阪市　北村　賢子
阿波おどりみんな美人に見えてくる　鳥取市　岸本　宏章
マネキンになったつもりの試着室　茨木市　島田　誠一
オアシスに見えていたのは蜃気楼　西予市　黒田　茂代
地平線掴めるほどの月が出る　大阪市　岩崎　公誠
修飾語の招待状にすぐおぼれ　大阪市　柴本ばっは
錆覚という便利な主語を盾にする　吹田市　太田　昭
錆覚ではないか眼鏡をかけ直す　和泉市　横山　捷也
拾おうとした黒豆が動き出す　藤井寺市　鈴木いさお
錆覚もよきかな添うて五十年　黒石市　佐藤　古拙
神さまが味方してるとテロは言う　四条畷市　吉岡　修
錆覚という神様の思い遣り　河内長野市　山岡冨美子
花だって狂い咲きする温暖化　唐津市　山口　高明
錆覚の花にたっぷり水をやる　芦屋市　黒田　能子
善意だと錆覚させている詐欺師　川西市　西内　朋月

幸せな今は錆覚でもいいさ　神戸市　山口　光久
錆覚と二人三脚して暮らし　大阪狭山市　矢野　梓
透明になれぬ錆覚したまんま　富田林市　山野　寿之
錆覚もよきかな添うて五十年　黒石市　佐藤　古拙
定年後もオレが家長と思ってた　八尾市　田邊　浩三
カレンダーに錆覚の日は二重丸　西宮市　山本　義子
錆覚が甘くてチャンスまた逃げる　美作市　福原　悦子
錆覚のままで別れたアイシャドー　愛知県　早川　遡行
冷静になると恋人ただの人　可児市　板山まみ子
過ぎてみれば錆覚だった握手ぜめ　富田林市　片岡智恵子
錆覚の罠をにっこりコマーシャル　富田林市　中崎　深雪
錆覚もまたよし君と添えました　奈良市　大久保真澄
錆覚の闇で天狗の鼻のびる　高槻市　富田　美義
近付くと家が遠のく何だろう　西宮市　泉水　冴子
錆覚をしてると錆覚させておく　堺　市　矢倉　五月
辛かろう錆覚のまま生きるのも　松江市　松本　文子
錆覚のままがよろしい蜃気楼　藤井寺市　太田扶美代
親友と錆覚してた泥の舟　犬山市　金子美千代
錆覚もいいさ人生大花火　堺　市　加島　由一
錆覚と言い張り通す母の嘘　河内長野市　八木加修子
人間は森羅万象我がものと　河内長野市　松岡　篤
億万の長者になった白昼夢　寝屋川市　冨山ルイ子
赤ばかり減る錆覚の絵具皿　大阪市　津守　柳伸

錯覚で開けた扉が閉まらない　唐津市　樋口　輝夫
錯覚で振った尻尾が仕舞えない　出雲市　伊藤　玲子
我家では亭主関白だと思う　八尾市　竹治ちかし
定年後もオレが家長と思ってた　岐阜市　田邊　浩三
七光りわが実力と思い込み　大阪市　平野あずま
大物と錯覚してる節がある　八尾市　原田すみ子
錯覚を零さぬようにして人生　鳥取市　宮西　弥生
大いなる錯覚恋の始発駅　堺　市　春木圭一郎
騙し絵の謎が解けずに肩の凝り　和歌山市　澤井　敏治
錯覚のままで天狗が見得を切る　松山市　武本　碧
錯覚のひと欠片から夢を掘る　大阪府　高橋　宏臣
錯覚の風の町からつかむ恋　鳥取市　籾山　隆盛
賢明という錯覚の水をのむ　大阪市　土橋　螢
いい雨ね言われ錯覚してしまう　寝屋川市　川端　一歩
情熱と錯覚してた背の火照り　尼崎市　森　茜
煽てられ狂う我が身のおきどころ　米子市　長浜　美籠
錯覚の向こう側にも雨が降る　弘前市　政岡未延子
ローソクの炎が揺れるあのひとだ　藤井寺市　高瀬　霜石
錯覚にしては哀しい揺れだった　太田扶美代

秀　句

自惚れを三面鏡は知っている　大阪市　鶴田　遠野
錯覚であってと願うカルテ抱く　和歌山市　福井　菜摘
錯覚も誤解も嘘もヒトの知恵　唐津市　仁部　四郎

錯覚で開けた扉が閉まらない　唐津市　樋口　輝夫
錯覚の分厚い壁を打ち破り　吹田市　木下　敏子
肩越しに見る人形の嫉妬の目　堺　市　奥　時雄
来世でも僕を選ぶと思ってる　大阪市　川端　一歩
赤い糸信じ歩いてきましたが　長岡京市　山田　葉子
まちがえてました弱さを優しさと　橿原市　居谷真理子
錯覚なもんか事実だ真実だ　鳥取市　近藤　秋星
錯覚しなかったらしない結婚　さいたま市　星野　育子
あなたの錯覚をどうぞそのままで　鳥取市　吉田孔美子
地平線掴めるほどの月が出る　大阪市　岩崎　公誠
錯覚が幸せ者の出入口　鳥取市　鈴木　一弘
錯覚でやっと生れたヒット作　和歌山市　磯部　義雄
錯覚を商品券で買ってくる　大阪市　谷口　義
会うと逢うの錯覚空気かみ合わず　鳥取県　西谷　悦子
錯覚と言う便利な主語を盾にする　吹田市　太田　昭
賢明という錯覚の水をのむ　鳥取市　土橋　螢
人間に錯覚というルビを振る　富山市　有澤　嘉晃
錯覚の向こう側にも雨が降る　米子市　政岡未延子
ニンゲンも地球を借りているのです　鳥取市　福西　茶子

秀　句

四世代同居に錯覚が続く　美作市　小林　妻子
錯覚で逃げきる頃が花だった　鳥取県　深田　倶久
美しい錯覚でしたありがとう　大阪市　栃尾　奏子

平成23年度（第23回）川柳塔碑合祀祭実施要項

本年度川柳塔合祀祭を下記の通り行いますので、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

合祀祭日　11月12日（土）　雨天でも行います。
集合場所　南海電車　難波駅　３階中央改札前
集合時間　午前９時30分（川柳塔の茶色の旗をあげておきます）
乗車時刻　特急「高野５号」午前10時発に乗車します。
事前申込者には割引周遊券付特急券(サービック)を購入しておきます。
会　　費　4,500円（往復乗車券及び往きの特急券、昼食費）
帰路の特急券（760円）は各自でご購入願います。
合祀祭会場　〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山17
高野山霊園内　川柳塔碑前（奥の院下車すぐ）
大霊園事務所　電話０７３６－５６－２９６６
到着後すぐに法要を営みます（午後12時10分より約30分予定）
そ の 他　※自家用車、別途の電車等で参拝される方は参加の申し込みを川柳塔社へご連絡の上、高野山大霊園合祀会場へ、12時までに直接おこし下さい。
※遠方の方で前日からの宿泊等の希望がございましたら、お知らせ下さい。宿泊の手配をさせて頂きます。
合祀予定者（敬称略）平成22年６月～23年７月までに逝去された方
澤田　和重・相馬　銀波・中村れんげ・宮口　笛生・山本　益子
櫻庭　順風・堀端　三男・岡本　久峰・清水　利武・榊原　秀子

『川柳さんだ』
吟行句会のご案内

行き先　神戸フルーツ・フラワーパーク
日　時　10月18日（火）
10時30分～16時30分
集合場所　ＪＲ三田駅南ロータリー
予　定　10時40分三田駅を送迎バスにて出発
12時　会食
13時句会　13時20分出句締切
会　費　4,500円　（当日頂きます）
宿　題　「ワイン」「のんびり」
「遊ぶ」「米」「自由吟」
各題２句・席題なし
投句のみ可（80円切手５枚）
３日前まで必着
連絡先　堀　正和　TEL　079-559-1255
田中章子　TEL　079-559-6344

第66回　京都塔の会
秋の吟行句会

日　11月28日（月）
集　合　９時40分　ＪＲ石山駅北側
10時５分送迎バス乗車
行き先　寿長生の郷（すないのさと）
叶　匠寿庵
句　会　２時から　選句次第披講
題　「当日雑感」「冴える」
「あさはか」「船・舟」
各題３句
会　費　5,000円（当日頂きます）
申込締切　11月20日
都　倉　求　芽
〒600-8248
京都市下京区諏訪町通
松原下る弁財天町328-202
TEL　075-351-4109

叫ぶ

高島　啓子選

エコ節電叫べど過去に帰れない　(高)道子
国難を叫べどコダマ返り来ず　黒兎
あと一点悲痛な叫び甲子園　満子
叫んでも願い届かぬ北の国　久美子
ヤッホーと叫べば少し気が晴れる　扶美代
節電の叫びも負ける猛暑です　悦男
泣き叫ぶ事も赤子の自己主張　千鶴子
若者の雄叫び響く甲子園　東吉
断末魔の叫びを呑んで波しずか　富子
叫んではいるが虚しい空元気　玄也
母さんが大声になる夏休み　俶子
ヤッホーと思わず叫ぶ槍ヶ岳　勝弘
阿鼻叫喚校舎が知っている惨事　恭昌
人間の傲りに天が吼えている　茶子
大声も取り得があったコンテスト　不二
遺族なら叫び足らない瓦礫跡　宏子
母さんと叫んで逝った兵思う　孝子
バンザイとテレビに叫ぶ金メダル　泰子
叫んでも届かぬ思い手を合わす　加修子
猫の恋誰はばからず叫びづめ　ばっは
初盆に二万余霊の叫び声　婦美子
広島に終らぬ叫びあるドーム　(上)紀子

黒人の心の叫びジャズを生み　深雪
スクープをとって吠えてる週刊誌　幹子
原発がいいと叫んだ人は誰　正和
検査結果ああ叫びたい良い数値　典子
愛してると一回くらい叫んでよ　弘一
求職の叫び円高おしつぶす　方子
助けてといつも叫んでいる介護　昌鼓
沈黙は絶叫だった置き手紙　哲男
子におくるエールが叫び声になる　(石)美恵子
その島は日本の国と叫びたい　(奥)五月
ボイスレコーダー最後の叫び記録する　正雄
どっこいしょそりゃあ叫んだ方がいい　霜石
暴走はわが子の叫びだったのか　淞丘
原発を持たぬと何で叫ばない　のり子
民衆の叫び署名を束にして　(吉)弘子

佳

思い切り叫んで変える風の向き　菜摘
無党派になると叫びが届かない　緑良
痴漢だと叫ばれぬよう手に注意　堅坊
外野席は喉頭癌になりやすい　時雄
叫んでる間はきっと大丈夫　(志)千代

人

大声で空気びっくりさせてきた　冴子

地

思いきり叫ぶと体軽くなる　せつ子

天

叫んだら山が多少は動きだす　**白根　ふみ**

軸

歳月が祈りに変えていく叫び

はしご

升成　好選

その時のはしご支えたのは家族　(宮)弥生
父母からの無償で届く縄ばしご　菜摘
病院のはしごで足を鍛えてる　朝子
電柱に今日もはしごをかけている　時雄
はしごするあたりがとろいい気分　弘一
市役所でたらいまわしの課をはしご　四郎
お中元着物を替えて梯子させ　高明
剪定の梯子みじかく苦労する　唯教
決断へ肚たしかめる段ばしご　一兆
本尊は秘伝ではしご段の奥　黒兎
はしごが軋むダイエットしなければ　ミツ子
横倒しすると梯子の長いこと　古拙
梯子持ち屋根裏にある秘密基地　公誠
虐待へ掛けてやりたい縄梯子　きっこ
母介護出世の梯子から降りる　みつこ
眠れない夜は電波をはしごする　和郎
はしご段課長止りと書いてある　直
外された梯子いくつもある履歴　淞丘
後戻り出来ずはしごを登りつめ　(志)千代
悟るまで降ろしてくれぬ縄梯子　扶美代
子の夢にそっとはしごを掛けておく　伊津志
はしご車の届く範囲の階に住む　敏治

では次と腕を掴まれ五六軒　(稲)則彦
居心地がよくてはしごを降りられぬ　宏章
はしごして噂話を確かめる　雅明
新薬へかかるはしごを待っている　緑良
はしごあるつもりで登るトップの座　碧
あこがれの虹がはしごの先にある
周章てない懐にある縄梯子　せつ子
夫婦の絆のよう引き合う縄梯子　蜂朗
気をつけて後一段に声掛ける　俶子
あみだくじはしご一本天と地だ　留里恵
もう一段あれば届いていたはしご　振作
ここからは勲章があるはしご段　(稲)洋
満月に梯子をかけて登らんか　可住
天国へ続くはしごなら登る　照彦
天国の母にかけたい縄梯子　圭一郎
　　佳　　婦美子
登ったら引き上げておく縄梯子　玄也
上だけを向いて梯子を上りきる　慕情
億劫になった二階の上がり下り　遡行
煤払い仏に託びてはしご掛け　正雄
挑戦は自分で登る縄はしご　次根
　　人
にが瓜の日除けはしごの要る実り　哲男
　　地
父さんの背中はしごに蝉を捕る　(矢)五月
　　天
神奥だと気づくはしごのてっぺんで　高瀬霜石
　　軸
段梯子幸運つかむまで登る

かなり

宮脇　道子選

年金でかなり減らした趣味の道　山久
立派な人かなり遊びも慣れたはる　一風
かなりの皺お見それしますその笑い　(奥)五月振作
娘の料理かなり旨いと言っておく　堅坊
お色気へかなりの嘘が許される　好文
老妻がかなりきわどい水着買う　小雪
人の名もかなりしてから思い出す　惠美
人間も自然もかなり危険です　秀四
原発事故かなり世界を騒がせる　照彦
隠されたかなりの量の放射能　登美子
復興へかなりな補償日本丸　久美子
想定外かなり粘っている総理　(宮)弥生
辻褄を合わすかなりの危険距離　(吉)幸子
大風呂敷かなり広げて跳ね返り　孔美子
症状はかなり進んでただ笑う　智加恵
笑い顔かなり懐あたたかい　(矢)五月
この夏はかなりの家に見るゴーヤ　深雪
マスコミはかなり権力もっている　邦昭
かなりいいほめられたって負けは負け　光久
かなり努力つんだらしいない笑顔　哲男
嘘まこと割り引いて読む週刊誌　強一
悪いとこかなり似てきた蛙の子
でこぼこがかなりあっても好きな道　よしみ
ほめ言葉かなりお世辞につりこまれ　(山)弘子
揉み手してかなり無理している笑顔　慕情
家計簿にかなり無理した跡がある　千鶴子
ひと言にかなりの重み老いる母　ふみ
医師の目でかなり重いと覚悟する　唯教
平均寿命かなり越すまで生きてやる　弘一
法要のお布施がかなり高くなり　螢
ライバルと足の長さでかなりの差　滋彦
飲みっぷり鮮やかかなりいける口　一兆
情緒不安定かなり大きな水溜まり　芳山
自分史にかなり自慢を喋るペン　キヨミ
聞かぬ振りかなり効いてる妻の愚痴　准一
米寿すぎかなり痛んだ耳目口　一弘
性格がかなり違って引かれあい　美千代
　　佳
天国にゆくにはかなりある鬼門　一粋
俎もかなり乾いて妻の留守　獏沓
理想とはかなり隔たりある老後　美智代
老々介護かなり重たい細腕に　昌鼓
失敗も想定に入れ子に譲る　裕之
　　人
認知症かなり昔の回路行く　(高)道子
　　地
くず箱にかなりの愚痴が捨ててある　碧
　　天
大風呂敷かなり広げた後始末　山田婦美子
　　軸
生き字引かなりの人に教えられ

初歩教室

題 ― 港

鈴木公弘

なじみの深い課題の場合、空想の句が多くなる傾向があります。このたびの「港」も机上論を感じた作品が多々ありました。現実感ある作句を心がけてみられてはいかがでしょうか。

原 港町十三番地昭和うた　妙子
添 港町十三番地昭和歌
すべて漢字表記という作りも芸の一つです。
原 港入り漁船の人で活気帯び　とも湖
添 入船に港は活気帯びている
下五を「…いる」と添削する意味は、「いる」の裏面に「私はそうではない」と感じてもらうことによって余韻を残そうとするためです。
原 港での烏賊の丸焼き舌鼓　紀美恵
情景描写としては満点ですが、感情移入を試みましょう。舌鼓だけでは浅いと思います。
原 ブルースのトーン高まる港町　一泉
「高まる」という表記を情景と読むか、作者の感覚と読むかによって、港の勢いが変わってきます。作者の寂しい感情が高まってゆくと解釈して、添削しませんでした。
原 出船入り船港にあふれ賑やかだ　秀男
添 出船入り船港に眠る時がない
原 出港する父親送る母子達　(山)久子
添 出港を案じて送る母も子も
出港するのは仕事のためですので、家族総出のお見送り、という気持ちは理解できます。ただ、それを作品にする場合、父と言えば子ーというように、読者に考えさせる省略法を使うのも芸です。
原 出港に見送るカモメ宙返り　エミ
添 出港を送るカモメと宙返り
川柳は原則として「自分のこと」を描いてほしいです。添削では、宙返りするカモメのような気持ちになって、つまり感情を昂ぶらせて、見送っていることにしました。
原 気仙沼港の朝を取り戻す　一兆
どのようなドラマか、を描いてください。
原 港町人も魚も夢を追い　玲子
港で魚が追う夢とは…なんでしょうか。
原 鬼太郎と花火と港ベンチャーズ　宏之
境港を宣伝されたのですね。

【若干の補正句】

原 豊漁の競声高き港町　(畑)節子
添 豊漁の競り声高き港町
原 寄港地のバーの止り木多国籍　きっこ
添 寄港地のバーの止まり木多国籍
原 出船を待機してます不況風　松風
添 出向を期待してます不況風
原 寄航する港夜景に船も揺れ　正彦
添 寄港する夜景に船もゆれている
寄航とは飛行機が立ち寄る場合に使います。
原 演歌には北の港が巾利かす　ひろ子
添 演歌には北の港が幅利かす
着眼・リズムとも、とてもいいです。

【特別に問題点のない句】

原発は政官財の宝物　和幸
テレビから得た情報の句という気がしました。気仙沼港への応援を句にしてみられたらどうでしょうか。
原 餌ねだる港風景むれかもめ　美紗子
添 餌ねだるカモメ港は良いところ
原 敗戦の遠い記憶知る港　一子
添 敗戦の記憶を知っている港
原 舞鶴で泣いて迎えたドラマ知る　武臣
添 舞鶴で泣いて迎えたドラマあり
原句「…知る」では他人事になってしまいます。手元に引きつけて描いてください。
原 難破船時々帰港せずごめん　弘光
飲兵衛の懺悔ですね。「難破船ときどき寄航せずごめん」ー少し軟らかくなります。

原 湊町昔は港だったのか　雄太

やや言葉遊びになってしまいます。

原 三陸の港大漁旗が待つ　紀雄

添 三陸の港大漁旗を待つ

大概は寄港する船が大漁旗を揚げます。

原 笛鳴らし出て行く港ドラマあり　こずえ

無事出港も社会の波が気にかかる　宏造

入り舟出舟私の港五十年　律子

母さんはでっかい港持っている　孝代

北前船泊めた港で昼寝する　寒之

港には哀歓はこぶ風が吹く　(後)美恵子

台風が港に船を泊めている　温子

妖怪とマグロが港活気付け　(中)章子

犠牲者の声なき声の港町　(高)道子

震災が港の仕事呑み込んだ　開子

過疎の町耐えて港は待っている　洋一

復興に汗水たらす港町　ちづる

八月忌港へ帰れ鳩のむれ　安子

港町神戸の夏はサンバから　淑子

ばらばらになっても港ここにある　眞砂子

懐かしい灯台が見え妻恋し　孝明

【入選句】

カジュアルになった軍港だった町　真澄

遊覧に鴎の友と港まで　勝治

繋がれたヨット寄り合う海の友　弘泰

夜釣り灯が波とゆれ浮き港まで　ミヨノ

地に錨投げ出している盆港　(宮)俊子

がんばろうカツオ帰った気仙沼　憲彦

港出て行くあても無く百貨店　智加恵

帰り着く港は母の膝に似て　久美子

コンテナが不気味に置いてある埠頭　堅坊

三毛猫の雄は港の守り神　義雄

海原に隠したゴミが着く港　ひとみ

空港へ送ってばかり留守居役　加修子

花粉症港近くは何故か楽　(高)弥生

私の理解力不足だったのでしょうか、「ポーズ」の句について趣旨をご説明くださいました。できれば読者に考えてもらえる言葉を選定して書いていただくべきかと思います。この句の場合でも、「何故か」と作者が言ってしまわないで、その気持ちを句の中に忍ばせることが大切です。

気が向いた時の寄港も許します　ふみ子

「寄港を」のほうが深みを感じます。

復興の兆し港にかもめ舞う　(野)宣子

夕暮れの港はこころ和ませる　敏治

クルージング母に抱かれた夢を見る　(稲)則彦

夫の胸に錨を下ろし翔んでいる　真由

【佳句】

青春の心いくつも港持ち　滋彦

故郷の港へ帰る骨休め　(佐)登美子

霧晴れてロマンを熱くする港　菜摘

空港は栄転左遷知っている　篤

港まで来て陽炎を見失う　幹子

戦士みな帰る港を抱いている　留里恵

関空の地盤沈下が止まらない　憲

豪華船見学だけを申し込む　治子

海光る港に活気もどる日よ　のり子

飛び立った港の明かり忘れない　志延

【今月の推せん句】

夢抱いて飛び立つ白い滑走路　関よしみ

希望に胸ふくらませた門出の場面を「白い滑走路」と表現されて、とても美しい句になりました。こうした純粋さをいつも心がけたいと思います。

漂流の心を寄せる港欲し　丸山孔一

説得力のある句になりました。とりわけ、「港」という課題から「漂流の心」を導き出した着眼が素晴らしいです。

指切りをしたのに港夕陽だけ　土屋起世子

男の私が利口そうなことは言えませんが、女性の気持ちがビンビン伝わってきて、申し訳ない気になりました。こういうのを「哀愁港」というのでしょうか。

【私の句】

スクリューの高鳴る朝を待つ漁港

港まだやる気テトラに退けと言う

（登載漏れ方は役員が添削して返却します）

秀句鑑賞

同人吟　西出楓楽

―9月号から

昭和57年「昭和生まれの柳人寄っといで」ということで「昭和川柳クラブ」が久保田寿界さんらを中心に結成され、私も仲間に入れていただいた。今から思えば若くて元気だったし、始めて三年で川柳が面白くなった頃であった。毎月開かれる句会や研究会は新鮮でとても楽しく、かつ勉強になった。

残念ながらこの会は昭和60年に雲散霧消の形になってしまったが、機関誌「あぶその」は今も大切に保管している。

その創刊号に現番傘副幹事長の住田英比古さんが、「21世紀と川柳」というタイトルで、川柳の今日を予言しておられるので、内容の要点を紹介したい。

①川柳人工は大幅に増えている
②川柳界はますます高齢化する
③川柳界は女性上位となっている
④川柳の内容は大して変わっていない

このように実に的確に予言しておられる。①③はともかく②④について30年間で何ら解決していないのに暗澹とする。

体調がいいので午前中は医者

加島由一

巷間つとに有名な話なのだが、ひと頃医者の待合室が老人の社交場となっていたことがある。「○○さんこの頃来ないね」「病気しているのじゃない」。近頃は整骨院が町のあちらこちらに林立、癒しの空間、人気スポットになっているとか。今度はこちらでこの言葉が飛び交っているのだろうか。

私の性に合わない無洗米

小川てるみ

無洗米は家事を楽にする。節水になる。下水を汚染しない、などの利点がありエコとなる。しかし、米のとぎ汁には次のような利用法もある。フローリングの床の艶出し・豊富にビタミンやミネラルが含まれているので、植木や家庭菜園の水やり・油分が取れやすいので食器洗い・灰汁の出やすい野菜を茹でる、などである。さて、従来の精白米と無洗米どちらもエコとすれば、使い分けは性格に任せる事にしよう。

クールビズ派手なステテコ罷り出る

今愁女

大震災による原発事故から節電が言われ、はからずもステテコが日の目を見るようになった。幅広で肌に密着しないため汗を吸収し、滑りがよいので夏をさわやかに過ごせ、クールビズになるからである。かつては白のクレープ地で出来ていておやじ定番アイテムであったのが、カラフルでポップなファッション性の高いものが出回っている。部屋着としても最適で、男性用ばかりでなく「女子テコ」も販売されたそうである。このステテコで暑かった夏を少しでも快適に過ごされただろうか。

目覚しに世話にならない歳となる

岸本孝子

若い頃はいくらでも眠れた。休日、目覚しをセットしておかないと、気が付けばお昼ということもしばしばであった。ところがこの数年はすっかり違ってしまった。寝不足解消のためにももっと寝ていようと思っても、早朝に目が覚めてそれから寝られない。無理に横になっていると腰が痛んだりしてイライラが募ってくる。けれどご同輩、そんな時はあっさり起きだして、早朝の清涼な空気を一人占めするのもオツなものですよ。

転んだ人見て見ぬ振りも愛のうち

山本　玲子

人が困った時、手を差し伸べるのは当然のこととされがちだが、果たして本当にそうなのだろうか。「親切という名の／おせっかい／そっとしておく／おもいやり」。相田みつをの言葉である。逆境が人を成長させ強くすることは往々にしてあることだから、転んだ人を見た時助けるべきか否か、よく見極めねばならないと思う。人生の達人だからこそ読めた句。

弁当の最後に食べる卵焼

川本　畔

卵焼は万人の好物と言っても過言ではないだろう。家伝来の味付けがあり、出汁のほかに塩（醤油）派・砂糖派などで、それぞれに一家言があるようだ。作者は楽しみを最後に取っておく堅実なお人柄とお見受けした。

忙しい訳でもないにすぐに夜

藤岡　ヒデコ

一日がゆっくり過ぎて一年がゆっくり過ぎるのは子供。一日がゆっくり過ぎて一年を早く感じるのは老いた証。さて、作者は一日が早く過ぎるとおっしゃっておられる。それは充実した日を過ごしておられて、まだお若いということなのである。

断捨離もできず娘に叱られる

島　ひかる

断＝入って来るものを断つ、捨＝家にずっとある要らない物を捨てる、離＝物への執着から離れる。このようにやましたひでこさんの提唱する断捨離とは、単なる片づけとは異なり身軽で快適な人生を手に入れようとする生活術である。要は身近に最小限の物だけを置き、ひたすら物を捨てることになるのだろう。けれど、たとえ娘さんにとやかく言われようと、思い出がいっぱいある品々に囲まれて暮らすのも、心豊かでおられるのではないだろうか。

永久歯一本抜いて淋しい日

谷口　義

80歳で20本の歯を残そうという八十二十運動が盛んに言われている。これだけの歯でよく噛めば健康状態も良好に保て、認知症の予防効果もあるとの事である。小学校入学当時から慣れ親しんだ、戦友ともいえる歯を抜くことは、老いに一歩近づく寂しさだろう。

三十五度冷えたビールに逆らえず

原田　すみ子

22度でビール、25度でアイスクリーム、27度で西瓜、30度でかき氷が売れると言われている。35度でビールが我慢できるはずがない。

犬死んでほっとしているおじいさん

大川　桃花

アニマルセラピーという言葉があるように、人は動物との触れ合いで身体的・精神的な健康を保持することが出来る。ペットは老いの孤独を癒してくれる家族以上の存在になることが多い。ところがペットの寿命は人間よりはるかに短い。年取ってから飼うとペットを置いて自分が先に逝くことにならないか心配になる。〝ほっとした〟のは、おじいさんのペットへの愛だろう。

トヨさんに肖りたくて読み返す

植村　喜代

詩人柴田トヨさんはこの6月で満100歳。90歳を過ぎてから息子さんの勧めで詩作を始め、09年に出版された詩集『くじけないで』は100万部を超えベストセラーのランク入りをした。8月現在も周りの手助けを得て一人暮らしを続けているという。秋には第2詩集も発刊予定とのこと、こんな100歳ならぜひ肖りたい。

検査値が僕の素行を暴きだす

遠山　唯教

「この頃はお酒も控え、運動もしています」と医者に言っても検査値は正直である。医者は黙って血液検査結果を〝どや顔〟で示す。ひと言の反論も出来ぬままショボン。

—水煙抄

秀句鑑賞

—9月号から

柿花和夫

入口の辺りに初心積んだまま

森吉留重恵

入学、就職、結婚。人生の節目に期するところがあったとしても、その通り実現できないのが世の常。積んだままとは言い得て妙。まだ初心を忘れていない証拠。時々は荷崩れしないよう支えてやりましょう。

宅配で不定愁訴も届く秋

木田比呂朗

注文もしないのにピンポンの音と共に届く宅配便。このこと事態、不愉快の極み。もの想う秋ともなればベルも押さずにやってくる不定愁訴。不意打ちに負けてたまるか。

誰よりも気になる憎い人といる

田中由美子

吉凶も愛憎も糾える縄の如し、と申しますが、五七五で見事にご夫婦の絆を詠まれました。それもお惚気まじりで。ゴチソウサマ。

歳だからビタミンだけと処方箋

稲葉洋

無事に医師から解放された快報の句とお見受けしました。ここはセカンドオピニオンなど求めずに、名医に巡り合った幸運に感謝。

過去形を引き摺る癖が治らない

山野寿之

洗っても透明にならない、蹴飛ばしても付いてくる過去。タラレバの世界で不届きな空想をめぐらすのも一興では。

念のためオウム返しで確かめる

高橋洋子

once moreよりもオウム返しの方が、確かです。但し機械的なオウム返しは、拒絶のサインにもなりますのでご用心。

凄るものあって眼鏡を掛け替える

針生和代

眼鏡を外すのは簡単ですが、掛け替えるのは些か面倒。作者の血を滾らせ眼鏡まで替えさせるのは、イケメンかバーゲンの広告か。下種の勘ぐりで済みません。

露地栽培形悪いが味は良い

木見谷孝代

その通り。野菜も人間も温室育ちは見栄えは良いが、味に深みがない。二世三世がリードする永田町産の不味さときたら。

新しい名刺我が子の顔を知る

中原章子

我が子の名刺に肩書がついた。この子も頑張ってきたんだ。無理はするなと言いつつも祝いの品を考えたりして。親戚に見せるためもう一枚もらっとこ。

自信句が一度も抜けたことがない

下田茂登子

楽屋落ちもここまでくればご立派。よくぞ誰もが思っていることをズバリと。共感者を代表して秀句とさせて頂きます。

生きているだけと欠席メッセージ

桑名孝雄

生きるとはまず棲息することなんだ。これが易いようで難しい憂き世。

一流の民は政治を我慢する

井上つよし

国民は一流、官僚は二流、政治家は三柳。忍耐も限界に。一流の民は政治を変えるか？

みの虫も俺と一緒のワンルーム

中岡香代

みの虫はやがて蛾になって部屋を出てゆく。俺もきっとそのうちに。

10 ええかっこしい！

私の子供の頃はゲーム機などありませんでしたから、放課後や休日は腕白どもと走り回っていました。この悪童たちは粗野で無神経なようですが、敏感なところもあって、先生にへつらったりすると「ええかっこしいの、ええこと言い！」と囃したてます。どこの地方にも同じような言い回しがあるのかもしれませんが、私が育った尼崎ではこのような言い方をしていました。本気で怒っているのではなく、からかっているだけでしたが、関西弁のアクセントによる面白い言い方が印象的で、しっかり覚えています。

そして今でも、自慢たらしい句や優等生が言っているような句を作ったりしますと、頭の隅からこの言葉が甦ってきて「あっ、これはアカンな」と反省させられます。

今回は、私が日頃から接している作品の中で、「これはちょっと、ええかっこ過ぎるのではないか？」と思われるものを取り上げて、なぜダメなのかを考えてみます。「ええかっこしい」の句も、「ええこと言い」の句も区別できないほど似ていますが、敢えて分けてみました。

〔ええかっこしいの句〕（良い格好をしている句）

日々新た常に初心に立ち返る
底辺に生きて笑顔を絶やさない
平穏なときでも備え怠らぬ
良識や気配りあっていい会話

少しぐらい自慢くさいところがあっても、作者独自の考え方やユニークな見解であれば、「ほほう、そういう考え方もあるのか」と心を動かされます。しかし、掲出の四句すべて、良識のある社会人なら誰もが心の中で思っていることであり、心がけていることです。それを改めて五七五にまとめても、単純に自慢をしているだけとしか感じられません。他人の自慢話など聞きたくないのと同じで、自慢川柳はできるだけ勘弁願いたいものです。

〔ええこと言いの句〕（良いことを言っている句）

坂ひとつ越えて人間丸くなる
信じ合う心が温い風を呼ぶ
まっすぐの道に迷いのない余生
日々感謝すれば余生は花の園
くじけない努力がいつか実を結ぶ

右それぞれ、お寺や教会の掲示板に書かれている言葉、あるいは、暦の横に書いてある言葉そのままです。作者としては、自身が心がけていることを述べているのでしょう。が、悟りきった人が偉そうに説教を垂れているようにも思えて「ほほう、偉いんですね」と白けてしまったり、「そんなことぐらい分かっている！」と言いたくなります。

このような「ええこと言いの句」は格言と同じです。格言の多くは七五調の韻律ですので川柳の仲間だと勘違いしがちですが、川柳と格言はまったく別のものです。格言は「教訓になることを短く述べた言葉」であり、最後まで言い切っていますので、鑑賞の余地も余韻もありません。川柳は教訓となることを述べるのではありません。「人間の弱さや迷い、愚かさや面白さ」を述べるのが基本姿勢です。

『麻生路郎読本』余滴

(5) 雑誌記者時代の葭乃

桒原道夫

麻生葭乃が雑誌「婦女世界」の婦人記者をしていたことが、「麻生路郎物語」(11)—三日路亭・遅日荘繁盛記—(『麻生路郎読本』249～250頁)に、次のように記されている。

—一合の土ももたぬに子がうまれ　路郎
—子のために買ふだけ錢をもつてゐず　同
—くもる日に米の騒ぎの夜をしのび　同

米の騒ぎ＝大正七年八月米騒動のこと(「人後」10句より、大8・9「楊柳」No.4)

子沢山のしがない古本屋渡世の中に、路郎はしかし「雪」を出し「土団子」を出した。

この間、葭乃も三人の子供を二人の子守にまかせ、知人のすすめる侭に「婦女世界」(大阪市西区土佐堀裏町)の婦人記者になった。

「私の娘時代のフリーな生活を知っていた路郎は、私に年中子守とお台所の仕事ばかりさせたのでは寂しかろうとの思いやりからだろうと思います。婦女世界の記者というのもパートタイムの仕事なのです。生花の家元や社交界の花形の訪問というのを記事にする仕事でした。世間のことは何一つ教えて貰えず、几帳の蔭で暮してきたような私には不向きの仕事でした。古本屋のおかみとしての仕事が別口にあるし、手のかかる子供もいた事ですから大変でした。この仕事も結局は、二、三ヵ月も続いたでしょうか」(葭乃書簡)

「土團子」No.2(大正7・8・1発行)の「日本川柳家人名」に葭乃が紹介されている。職業は〈雑誌記者〉。趣味は〈運動をのぞく外何でも趣味あり。特に演劇。舞踊〉。そして〈好きなものは路郎氏と小豆納豆。嫌なものは子供〉とある。7月には、葭乃が「婦女世界」の婦人記者をしていたことがわかる。

当時の路郎・葭乃夫妻は、長女純子(大4・4生)・次女御世子(大5・4生)・三女御幸(大6・12生)の三人の子供を抱え、古書店「葵書店」(大阪市西區江戸堀北通二丁目二十番地。現・西区土佐堀一丁目5番23号付近)を経営していた。

そのような中、次女の御世子が亡くなった。「土團子」No.3(大7・9・1発行)の「MEMO」で、路郎が次のように記している。

▼八月一日午後二時半、八月號の再校をやつてゐる處へ堀保子氏から子供の病氣見舞がとゞく、半ば讀み了らぬ處へ病院から電話がかゝつて御世子(二女)が死んだことを知らせて來た、大正五年四月七日に生れたので此世の光りを浴びることがあまりに短かゝつた。

▼八月二日は青明が亡くなつて四年目の命日である。いろんな事が頭に浮んで來る。青明忌を營みたいと思つてゐたが八月は總ての計畫が無駄になつた。

▼八月四日に川上日車氏の令息極君(二男)が他界せられた。川上氏と相對して座した時両方から同じ言葉が交換された。子供を亡くして始めて親らしい氣になつた。産むだゞけでは親の心持ちは分りませんなあと川上氏は暗い聲で語つた。

写真の裏に、〈大正時代／婦女世界の／婦人記者時代／結城寫眞舘／撮影〉のメモがある。西村哲夫氏提供。

さて、「婦女世界」とは、どのような雑誌だったのだろうか。

明治の末頃から、婦人雑誌が続々誕生した。例えば、

「婦人画報」　明治38年
「婦人世界」　明治39年
「婦人之友」　明治41年
「婦　女　界」　明治43年
「婦人公論」　大正5年
「主婦の友」　大正6年

大正7年2月創刊の「婦女世界」は、東京で出されていた「婦人世界」「婦女界」の名前を合わせたもののようだが、当時の有力誌であった「婦女界」を特に意識して発刊されたものだと思われる。「婦女界」は日本近代文学館や国会図書館にあるが、「婦女世界」は所蔵されていない。インターネットで検索すると関西大学に数冊あることが分かり、調べに行ったところ、葭乃の文章が載っている大正7年11月号が見つかったのである。

葭乃の文章を紹介する前に、「婦女世界」大正7年11月号を記録しておく。

大きさは、185㎜×262㎜。B5判よりもやや大きい。表紙絵は、森田久。表紙左下には、花聟花嫁選擇號、とあり、右肩には、大正七年一月十一日第三種郵便物認可／大正七年十一月一日発行（毎月一回一日発行）／大正七年十月二十五日印刷納本、の文字が見える。

表紙に、花聟花嫁選擇號、とあるように、この号は、理想の夫・妻の選び方を特集したものである。「愛を離れて結婚はない」「頑丈な嫁、鬼の如な婿を選べ」「趣味の上から見た配偶者の選擇」「容貌より見た嫁の選擇」「娘の婿を選ぶべき要件二十五ケ條」「第一に血統第二に趣味の一致」「地位は低くとも人格高き青年を選べ」等々のタイトルを見ると、その内容が想像できるだろう。特集記事以外に、小説「知らぬ母の仇」（山脇不秋草）、講談「勇婦『更科』實傳」（鷲見桃逸）、小説「たつた一人」（食満南北）があり、文章の頁数は七十頁。文章の頁の前に、△秋艸

「婦女世界」大正7年11月号の表紙。関西大学所蔵。

岩井氏令嬢英子、佐藤夫人みつ子、同令息國吉君△婦人のつとめ　清香會の割烹と邦文タイプライター印字競技會△學の園　市岡高女の刺繍講習會及運動會△流行の髷　川本フク、佐川カメ、山室ウメノ、岡テイ、山口よし子の結振等々、13項目の写真の頁が数十頁ある。

定價は、一冊貳拾五錢、郵税壹錢五厘で、計二拾六錢五厘である。

奥付を記しておく。

第一巻第十號　大正七年十一月一日發行
編輯發行兼印刷人　安藤茂
印刷所　大阪市東區南農人橋二丁目三三　關西印刷所
發行所　大阪府豊能郡池田町内中町　婦女世界社
事務所　大阪市西土佐堀裏町一六　婦女世界社
電話土佐堀三二〇八番
振替口座大阪四〇一〇二番
東京支社　東京市芝區元數寄屋町三丁目七
電話新橋二二九一番

葭乃は、素女の号で、「折にふれて（感想一篇）」を寄稿している。葭乃は、素女・柳みちよ等の別号も用いていた（『初篇昭和川柳

百人一句』、宮尾しげを編、昭和9年1月10日発行、小嶺頒布會）。全文載せておく。

折にふれて　　素女

地震、雷鳴、火事、親父とは世の中の恐ろしい物の代表物でありますが、私は一向に火事も親父も恐しいとは思ひません。それは電光の閃き程にも、夜蜘蛛がポツリ〳〵と匍ふ程にも私の神經をなやましたことはありません。それと云ふのも私は六才の時に母に死別れて、それ以來は父一つの手で育ちましたから、母らしい親しみと愛が父の心に宿つて居たからでありませう。或時は嚴父であり、又或時は慈父であつた父は、私のためには惠美壽さんの打出の小槌でありました。何でも彼でも生活に無くてならぬものは無盡藏のやうに湧いて出るのでした。思想の拘束もいたしませんでした。信教も自由でしたから、私はクリスチヤンで、父は大の稲荷さん凝りであります。此後とても、私の信仰がどのやうに變つて、佛教信者にならうと、或はマホメット教徒にならうと、決して意見がましい事は申しません。私は小さい時から、何か父に相談を持ちかけますと『どうなとお前の好きなやうにせよ』と云ふのが父の口癖でありましたから、私は其度に自由を與へられて居ることが嬉しくてなりませんでしたが、自からすべての事を判斷して選擇せなければならない事を思ひまして非常な責任を感じました。かう云ふ風に私は今日まで野飼の兎同様の暮しはして居ましたが、幸に父から與へられた此有難い特權を惡用いたしませんでしたから、精神上にも物質上にも惠まれた子供でありました。『お前は幸福だな』とよく私の夫は申します。夫はおぎやと勇しい生聲をあげて此世の明るみへ出ました時には、もうおつ母さんはあの世の人でありました。それから十一歳の年まで、瀬戸内海のとある淋しい小島へ里子にやられて居ましたから、父の温かさも知らず、勿論兄弟姉妹のなつかしさも知らずに、夕燒けの沖を眺めては物足らぬ思ひを抱いて暮して居ました。そして今は妻といふ軛があり、子供といふ重荷があつて、進退の自由を奪れて居ります。それを思ひますれば、私は依然として父と夫の愛情にあたゝめられて幸福なからだでございますから、いかなあまのぢやくでも、夫の言葉に異義をさしはさむことが出來ません。それで私は只の一度も親父を煙たい者として嫌厭主義をとつたことがありません。刑事巡査の靴音におびやかされる者は犯罪者で、親父の咳にちゞこまる?は遊蕩兒であります。親父は私の擁護者であつて決して恐ろしい者ではありません。

また、この年、葭乃は劇作家にして川柳家であった食満南北に弟子入りしたことが、「麻生路郎物語」(11)―三日路亭・遅日荘繁盛記―（『麻生路郎読本』252～253頁）に、次のように記されている。

右の書簡にもある通り、葭乃は父芦村譲りの演劇趣味への関心の強いまま、南北に師事して劇作家を志した一ときがある。婦人雑誌記者になった当時の事である。その処女作は「ある日の地獄」（一幕）だが、もっともこの労作も長きが故に、「土団子」から敬遠され、陽の目もみずに終わっている。

「今その事を申されると冷汗が出ます。誰でも一寸思い付きそうな筋で、芝居の約束ごとも何も知らぬ素人が、一幕ものを書いてみようとした厚かましさ、穴でも這入りたい気持で、どうぞ忘れてしまってください」

「番傘」（大7・9発行）の「あれから」に、〈葭乃女史が脚本家たらんとして南北君の門に入る。近く脱稿するものがあるさうだ〉とある。また、「土團子」No.4（大7・10・1発行）の「MEMO」に、〈葭乃女史の

脚本「ある日の地獄」（一幕）は長すぎたゝめ掲載を見合せることにした〉とある。

葭乃が南北に入門したのは、次女の御世子を亡くした後だと考えられる。これから書くことは、全くの憶測であることを先にお断りしておく。葭乃は、この年の7月には「婦女世界」の婦人記者をしていた、と前に書いたが、もう少し早い時期に始めていたのではないか。そして、二、三ヵ月経った8月1日に、次女御世子を亡くして、婦人記者をやめてしまったのではないだろうか。子供を亡くして打ちひしがれている葭乃を見て、路郎は南北に入門することを勧めた。葭乃が自らの意志で南北に入門したとは思えないのである。「婦女世界」11月号に、「折にふれて」を素女の号で寄稿しているが、これは、婦人記者をやめた後に書いたものだと思われる。葭乃の文章の前に、「四方田柳子夫人　家庭訪問記」（吉村美代子）があり、後に、「婚禮衣裳のぞ記」（婦人記者　吉村美代子）がある。吉村美代子という人の肩書に〈婦人記者〉とあるのに、葭乃（素女）には、〈婦人記者〉という肩書が付されていないのである。

「土團子」に掲載されなかった「ある日の地獄」（一幕）が、「婦女世界」の大正七年十二月号に掲載されることが、十一月号の「△編輯局より▽」に予告されている。「麻生路郎物語」に、〈もっともこの労作も長きが故に、「土団子」から敬遠され、陽の目もみずに終わっている〉とあるが、「婦女世界」という商業雑誌で陽の目を見ていたのである。

△編輯局より▽

江湖の絶大なる歡迎を受けつゝある本誌は、號を重ぬる毎に益々改善の實を擧げ、內容外觀ともに雜誌界の覇者たらんことを期し、最善の努力を致しつゝあるが更に本年掉尾の花として次號は全く體裁を一變し、十數面の寫眞を增加し、奇想天然より落下せん。尚ほ讀物の奇拔なる今輕々に天機漏らすべからず、されどその二三を列記すれば

□小説　たつた一人　食滿　南北
はいよ〳〵佳境に入るべく
□講談　勇婦更科實傳　鶯見　桃逸
は舞臺一變して更科と相木の大活劇によりて修羅場を演ずるの大騒動を來たし血湧き肉躍るの快あるべく
□小説　かつ子　北島　春石
は新たに本誌のためにその椽大なる筆を揮ひて關西の市價を高からしめんとす
□脚本　或る日の地獄　麻生　葭乃
□小説　生と死　野村　白露
□梨庵先生の印象　町田　楓葉
□或る日、或る時　吉村美代子
□商人の妻となるには　麻生　路郎
□大阪の女流貿易家　ミヨ子
その他內容頗る豐富なれば、發行の日を俟ちて御一覽を願ひます。

葭乃の脚本の他、路郎の「商人の妻となるには」のエッセイも掲載されたことがわかる。「婦女世界」(12)月号を見ることができないのが、返す返すも残念である。

葭乃は、「週刊朝日」へも、葵素女の筆名で「結婚前後」とかいう題で書いたことが、「麻生路郎物語12」に記されている。「週刊朝日」で、路郎は昭和4年から川柳欄を担当していた。おそらく、路郎の紹介で、「週刊朝日」に書くことになったのだろう。葭乃の文才を最もよく見抜いていたのは路郎だったのである。

［付記］『麻生路郎読本』「麻生路郎年譜」の大正6年の項に、〈この年の二、三ヶ月、葭乃は子供を二人の子守に任せ、「婦女世界」（大阪市西區土佐堀裏町十六番地）の婦人記者になった〉とあるが、大正7年の誤りである。お詫びして、訂正しておく。

本社九月句会

九月七日（水）午後五時
アウィーナ大阪

3・11から半年、その傷口もまだ癒えぬ中今度は紀伊半島を中心に大型の雨台風が襲う。被害状況が次々と報道されるのを見るにつけ、改めて天災の恐ろしさを再認識し、同時に被害に遭われた方々には心からお見舞を申し上げる。そんな中、九月句会は七日、107名（投句七名）の参加で開催された。初参加は羽曳野市の藤原大子さん。

今月のお話は井丸昌紀さん。「ダイエット大作戦」という物々しい題のわりには、ユーモアに富んだダイエット川柳を折込んでのとても分かり易く肩の凝らない内容であった。

引用された川柳の一部を紹介する。

ああいやだ影まで太っている私
ダイエット犬の散歩で犬が痩せ
本だけはたくさん読んだダイエット

ダイエット後、見事にリバウンドした昌紀さんのお話に会場は終始なごやかだった。

（いさお記）

月間賞は池田市の上山堅坊さん。

（司会—美籠・善純）（脇取り—扶美代・蕉子）
（受付—俶子・賢子）（清記—勝弘）

席題　「ぬくい」　村上　直樹選

避難所の毛布のぬくさ身にしみる　満子
台風の後の援助の手がぬくい　弘風
がんばろう日本ぬくい冬になれ　公誠
ウォーミングアップはできたいざ五輪　淳司
今朝の冷えネコのぬくみが有難い　忠昭
譲られた席ぬくもりのまま座る　求芽
両の掌でおつりをくれるぬくい人　たもつ
道の駅目分量という秤　ばっは
冷蔵庫の掃除も兼ねる鍋料理　和夫
そっと拾うまだあたたかい父の骨　理恵
故郷の訛と温い会話する　誠一
一喝が終わってぬくい男親　遠野
発酵をするまで温めているジョーク　扶美代
わたくしのハートチンしてからあげる　大輪
いいのかな温温生きているけれど　勝弘
冷や御飯チンすりゃぬくい便利な世　東吉
下手ですと言うがとっても温い手話　保州
ボランティア手話が弾んだ輪がぬくい　柳弘
げんこつのあとからじんと来るぬくさ　哲男
手のひらのぬくみ熟成中の恋　冨美子
愚かさもそなえてぬくいお人柄　好
ひとり旅秘島のぬくい湯で癒やす　唯教
友来る地酒と訛ぶらさげて　和夫
左手も添えた握手に血が通う　一歩
崖っ縁差し出す友の手がぬくい　昌紀
ばあちゃんの仔猫知ってるぬくい膝　正雄
訥弁のスピーチほっこりさせてくれ　恭昌
老いふたり愚直に生きてぬくめ合い　唯教
裏を返せば恩師のぬくい鞭に触れ　寿子
母の手はいつでも春のあたたかさ　集一
Uターンぬくい訛に迎えられ　好
褒めことばより現ナマのあたたかさ　天笑

佳

金魚よりさすがどじょうは温かい　則彦
絵手紙が渇いた私誘い秋　よしみ
立たされた記憶も温い木の廊下　保州
子らよう笑い心をぬくうぬくうする　一風
ひと肌の酒とゆっくり時代劇　月子

人

夫婦とはぬくさが四分に冷え六分　郁夫

地

四面楚歌ぬくい一言ありがとう　ダン吉

天

一緒に食べるただそれだけでぬくい飯　希久子

軸

がんばりや祖母の握った手のぬくさ

兼題「天使」　桝本　宏子選

うちの天使は魔女の仮面を持っている　弘一
天使とて放射能には打つ手なし　東吉
蜜蜂や蝶農園のキューピッド　淳司
酒注いでくれる女性はみな天使　完司
スッピンのママが天使の台所　日の出
爪切って小さな天使抱きに行く　キヨミ
携帯の罠に潜んでいた天使　誠一
老母はいま天使の顔になっている　千里
天使とは遠い童話の憧れか　のん子
ドラマチックに秋を口説いている天使　柳弘
どん底で天使に出会い這い上がる　舞夢
僕からは天使に見えるあのお方　勝弘
キャラメルのエンゼルマーク懐かしい　紀子
気まぐれな天使可愛いので許す　わこ
シャガール展ようさん天使飛んでいる　蕉子
エンゼルフィッシュらしい優雅な泳ぎぶり　靖鬼
自画像は天使の様に書いておく　美代子
ナデシコの天使に見える監督さん　紀雄
笑い袋の中に棲んでいる天使　扶美代
微笑めば至るところにいる天使　黒兎
天使から誘われ服も靴も買う　月子
エンゼルが結んでくれたこの絆　賢子
なでしこはブルーエンジェル暑い夏　淳司
キューピッドにも言い分がある離婚劇　恭昌
採血で何度も針を刺す天使　茂
風にゆれるコスモス秋の天使たち　美智代
ニセモノの天使にうっかり恋をした　求芽
税務署が天使に見える還付金　則彦
どろんこで遊べぬ天使塾通い　(久)千代
これこそが天使と思う呱呱の声　保州

佳

水槽のエンジェルフィッシュ涼呉れる　玄也
看護師が巡るきっちり午前二時　ダン吉
天使より悪魔の方が社交的　すみ子
岩清水エンゼル達が来て遊ぶ　よしみ
キューピッドの放つ矢いつもとどかない　求芽

人

外科の天使すこし手荒でございます　義子

地

側に居る天使に君は気付かない　克己

天

金貸しは天使の顔でベルを押す　敏治

軸

母の日の一日だけの天使たち

兼題「マニア」　北野　哲男選

SLを見れば少年みたいな目　玄也
鑑定団がマニアの宝扱き下ろす　遠野
鑑定団がマニアの鼻をへし折った　蘭幸
がらくたにロマンを追っているマニア　冨美子
儲からぬことに熱中するマニア　冨美子
後期入り収集切手使い出す　正和
マニアにはガラスの欠片さえ宝　美智代
狂人とマニアの評価紙一重　東吉
一国一城主の顔をするマニア　弘光
ゴミにしか見えぬ切り抜き集めてる　天笑
ほんとうの撮り鉄列車には乗らぬ　保州
明日開通寝袋持って出るマニア　正雄
中古車でずーっと通したマニアです　堅坊
少年の心虜にした化石　耕冶
ブレーキが効かぬマニアの出来心　善純
偽作をいつもつかんでいるマニア　一歩
この歳で実は今でもサユリスト　いさお
食前食後六甲おろし歌ってる　弘一
釣れずともよいと言ってるのがマニア　保州
マニアにしか私の良さは分からない　善純
錆の出たブリキのアトム捨てられぬ　黒兎
ミニカーマニア霊柩車だけがない　俶子
蒐集は好きだが整理苦手です　希久子
写楽の絵売りに出てるが金足りず　靖博
無い袖もこの時だけは振るマニア　蕉子
「磯野家」の謎解きをする大真面目　時雄
ファーブルになれるか孫は虫博士　和夫
マニアとはこわい獲物を狙う眼だ　萌子
年金の範囲で溜める箸袋　真理子
ガラクタと添寝しているコレクター　弘光

何となく同じ匂いのするマニア　大輪
マニアともほとんどビョーキとも言われ　楓楽
佳
円周率千桁覚え物忘れ　黒兎
虫マニアだんだん虫の顔になる　完司
私にはゴミマニアには宝物　寿之
生真面目な顔で浮世絵マニアです　准一
ピンバッヂいっぱいつけたベレー帽　正和
人
シャガールもモネも一応手に入れた　美代子
地
断捨離は頭にないと言うマニア　かずお
天
土に生き農のロマンを追うマニア　集一
軸
ジャズマニアだった親父も今演歌

兼題「防ぐ」　鴨谷瑠美子選

無防備で何でもこいと受け入れる　房子
癌にならない予防注射はないですか　弘一
無口とて自分を防いでいるのです　たもつ
あの知事は防災予算まで削る　一歩
防戦になると弱気の虫が出る　玄也
全身をUVカットして残暑　美代子
恋人がいますと嘘の予防線　正雄
焼酎を毎晩飲んで癌予防　完司
ユニクロで若さを買って老い防ぐ　一風
陽よけ風よけ晩のおかずになるゴーヤ　哲子
せっかちで早めに出掛け難逃れ　月子
万歩計老いとメタボを防ぐ術　隆彦
老い防止よく寝よく食べ悩まない　天笑
日除け用ゴーヤあふれる冷蔵庫　哲男
防災の訓練逃げるだけの役　美智子
気休めかも知れぬが頭痛薬を飲む　美代子
よお笑いしっかり泣いて老い防ぐ　公誠
無防備でいるのに誰も襲わない　見清
落語家に客の居眠り防ぐ技　公誠
金を出すたびにカメラに睨まれる　朋月
無防備だった肌の手入れを悔やむ秋　遠野
コラーゲンぐらいで老いは防げない　満子
防いでもどこかで洩れる隠し事　すみ子
身構えて傷つかぬよう防いでる　紀子
雨風を防ぐていどの幸でいい　光久
にこにこと笑って攻めをはね返す　隆彦
飴ちゃんを渡してお喋り止めさせる　かずお
転ばぬ先の杖を探しているのです　みつ子
落石に注意は防ぎようが無い　天笑
こうなれば女の意地で防ぎます　義
度忘れを防ぐ薬を探してる　わこ
予防線張ってるらしい引けた腰　靖鬼
佳
神様も防げなかった災害地　日の出
あれ以来無口になった防波堤　冨美子
人の口防ぐすべ無し時を待つ　すみ子
物忘れ予防注射が欲しくなり　好
台風が来ないうちから屋根修理　月子
人
火傷する前にきっぱり手を切ろう　寿子
地
妻の口防ぎきれぬと諦める　かずお
天
防げない老いに逆らうことはない　(志)千代
軸
その口を防げなかった嘘まこと

兼題「辻」　川上大輪選

その辻を曲がればボクの新天地　一歩
にんげんの辻を無視して暴風雨　完司
曲がらねば家に帰れぬこわい辻　天笑
あの辻を曲がると酒が待っている　弘風
辻地蔵涙の枯れることがない　千里
地下街の辻から迷い子になった　冴子
人間のドラマ見守る辻地蔵　朝子
方向音痴になった七十の辻で　扶美代
里帰り丸いポストが似合う辻　哲男
辻へ来るたびに女を思い出す　完次
四辻は絶対さける逃亡者　たもつ
六ヶ月ガレキの辻がまだ消えぬ　求芽
辻ごとに人の情けが沁みてくる　紀乃

ウインカー出さずに曲がるお母さん　正和
人生の辻ごとにある落し穴　紀乃
追風も向い風にも出合う辻　光久
四辻の風に占う明日の道　黒兎
四つ辻が私にくれる思考力　文代
悪さする子にも優しい辻地蔵　シマ子
新しい花束がある交叉点　天笑
酔っぱらい草書のように辻曲る　正和
四辻のまん中辺で風を読む　和夫
元気だせと背中を叩く辻の風　美籠
辻を曲ると海の匂いがするだろう　蘭幸
どの辻をどう曲っても着く浄土　楓楽
あの辻は左へ曲がるべきだった　昌紀
青春は無駄に過ごした辻もあり　日の出
辻曲ると少し怒った道祖神　ダン吉
十八の私に出合う辻がある　美智代
辻説法続けて天下取るドジョウ　茂
曲らねばならぬ辻ありあみだくじ　哲男
標識の無い辻だから愛がある　集一

佳

欲言えばきりなし次の辻曲がる　義
しがらみの待つ方向へ曲がる辻　真理子
辻ごとに謎々がある通せんぼ　能子
振り出しに戻れる辻が一つある　義
辻まがるまでよそゆきでいる背中　満子

人

辻曲るたびに電柱借りる犬　則彦

地

辻に立つお巡りさんが邪魔になる　一歩

天

寺の辻曲がると寺へ出る京都　完次

軸

新しい辻カーナビはまだ知らぬ

兼題「雑魚」　河内　天笑選

復興に雑魚がいちばん汗流し　一歩
雑魚同士集い復興助け合う　ルイ子
汚染の海泳いだ雑魚に生きる意地　隆彦
避難所で疎開の雑魚寝思い出す　哲男
雑魚だって清き一票持っている　大輪
知らぬまに雑魚が立派な社長さん　のん子
雑魚の意気あげる屋台の発泡酒　恭昌
コップ酒雑魚の哀歌が浮いている　郁夫
山の宿東北弁と雑魚寝する　正雄
理想郷探し求めて泳ぐ雑魚　一風
ずっと雑魚ご先祖さまのそのまんま　修
雑魚の夢自分信じて挑みます　ふりこ
大海を夢見る雑魚に虹が立つ　黒兎
とっときの入歯に雑魚の骨ささる　柳弘
だし雑魚で五人育てた母の愛　克己
清貧の雑魚は贅肉などつけぬ　公誠
チョッピリは悔しいけれど雑魚でいい　勝弘
雑魚だけどゴールド免許持っている　玄也
底辺を支えています雑魚の群れ　寿之
集団の力で雑魚は生き延びる　紀子
雑魚に生まれて毎日が命がけ　瑠美子
鯛平目夢見て雑魚のまま終わる　房子
群れているだけで安心僕も雑魚　誠一
雑魚だから好きにのびのび生きてます　美花
雑魚なりに身につけました生きる術　善純
雑魚なりに保身の術を身につける　光久
大物は逃げて雑魚だけ二三匹　茂
要領のよい雑魚がいる非常口　瑠美子
雑魚ばかり蠢いている多数派よ　ダン吉
雑魚ばかり群れる場末の縄のれん　集一
雑魚ばかり群れてなにやらきなくさい　月子
群れたまま雲になりたい雑魚の夢　集一

佳

太平洋の匂いを持っている雑魚だ　蘭幸
誰とでもすぐ友達になれる雑魚　求芽
雑魚だって目指しています一人立ち　ばっは
雑魚の群れ国を動かす票を持つ　正雄
先頭の雑魚は覚悟を決めている　扶美代

人

雑魚なりの目立たず泳ぐ処世術　則彦

地

わたし雑魚へこたれぬのが取柄です　ふりこ

天

雑魚なりにきりりと生きてこれました　上山堅坊

軸

ツキのある雑魚は大統領になる

花地抄壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。編集部

川柳あまがさき（兵庫）（前月分）　田原　一兆報

僕の誕生日に母は母になる　哲夫
相合傘女房に見られムード飛ぶ　柳明
夫のそわそわ妻はすべてをお見通し　あかり
猫撫ぜていやされている独り者　江美
節約か俎板の音途切れ勝ち　靖鬼
仲人がそわそわしてる披露宴　野薫
そわそわと彼の隣に座るとき　幸香
買い物が食べ物だけという暮し　美代子
さくらんぼ郷里のかおりほろにがく　雪菜
よかったと坊主頭を撫ぜてやる　龍
五百円以下で押える昼ごはん　哲男
温暖化ゴーヤが助け船を出す　政江
しなやかな素足きりりと浴衣着る　里江
節約とうまい言葉で逃げるケチ　五月
水提げて東下りののぞみ乗る　奮水
節約も程度を越せばけちん坊　朋月
いつからか僕のビールは発泡酒　正月
すり傷も母さん撫でたら飛んでゆく　祐康
そわそわと被災地無視の永田町　キヨミ
辛かろう添え木だらけの木を撫でる　和子
溜息はよそうアイスが溶けるから　イサミ
よしよしと自分の頭撫でている　菜々子
本番は大きく息を吐きいどむ　芳子
逢いにゆく余計なものは持たないで　こはな
嬉しさにお腹を撫でた人も逝き　泰子
もう一本あと一本で飲み過ごす　かずお
節約と熱中症で揺れている　勝巳
節約を楽しみながら腹八分　りこ
あの傘を取りにゆけない訳がある　ひとみ
手足・背いっぱい撫ぜて母を看る　満子
言い放ったひとことすぐに悔んでる　葉子
おしゃべりをちょっと節約本を読む　宏子
節約が生みだす新型非国民　求芽
節約のお蔭で建てた兎小屋　鹿太
歩をとめて時どき風と対話する　美籠

川柳塔さかい（大阪）　村上　玄也報

買う方がよっぽど安い修理代　好
美しい自信がつんと鼻にでる　公誠
自信過剰扱い難いおひとです　半銭
つぶやかれ自信ふっ飛ぶ時がある　つづや
ほっておいても私の思うようになる　みつこ
一本の薔薇で恋敵に勝てる　明子
自信ない口振り語尾に力無い　玄也
挫折から学んだ奇跡だってある　唯教
徳を積み奇跡をじっと待っている　千代
よっぽどの事がなければ別れない　舞夢
五十年添ってるなんて奇跡だな　竜之介
願掛けの奇跡見てきた百度石　俶子
復興へ奇跡は起きぬ遠い道　誠一
奇跡より努力と買わぬ宝くじ　健吾
大笑いしたら逃げ出した胃癌　進
生還の奇跡はきっと神の加護　のん子
不合格やはり奇跡は起こらない　かりん
奇跡だと褒めあげられた卵焼　時雄
あの人を怒らせるのはよっぽどよ　日の出
夏来たらよっぽど冬がましと言い　澄空
夏でも燗よほどお好きと見えますな　和夫
根回しがよほど効いたかいい返事　政男
愛憎によほど懲りたか尼になり　深雪
浮く屋根に命拾いをした子犬　像山
ありがたいお経に死者が蘇る　愿
爺ちゃんが手を出す僕の貯金箱　としお
うまい汁よほど吸ったか凄い家　雅明
梅檀と言われていたが息切れる　敏治
あかんあかん言いついつい上にいる　世紀子
喜寿過ぎてぼちぼち髪が生えてくる　朋月
特効薬まっ赤にふったとうがらし　ばっは
とつぜんにまっかな薔薇をとうさんに　冬虹
傍目には短気に見えるから困る　月子
臓器移植よほどの覚悟した身内　五月
雨女集めて雨乞いのダンス　天笑

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

あやかりたいサザエさんちの暮らしぶり　章夫
平成の家に昭和がなじめない　夢子
古民家に住む流暢な日本語　町子

家苞で親孝行の真似をする　かず子
家付きの嫁でそまつに出来ません　みね
一等地に住んではいるが借家です　武昇
こそ泥が二の足踏んだ門構え　喜久子
簡単に家もネットで買う時代　義泰
家系図の線は夫婦で横並び　ひろ子
一聞いて十を悟って叱られる　順一
宝くじは皮算用を売っている　義雄
先走ることを知らない蝸牛　碧
先走り大きな魚とり逃がす　富子
先走る謀反の風が生ぬるい　菜摘
憧れの椅子へ気合が先走る　絹子
正念場どうも気持が先走る　起世子
先走り胸のボタンをかけ違う　かずみ
気持だけ親孝行が先走る　朱夏
野にありて守る小さな正義感　保州
優勝をしたその日から追われる身　智三
落ちこぼれだったあの子が墓守る　准一
歩には歩の守る道あり意地もあり　和子
守備範囲拡げて肩で息をする　幹子
守りたい家族があって一歩引く　八重子
伝統を守る秘伝のさしすせそ　当代
危機感を察し護身のだんご虫　東吉
被災者を守る大義の無い政治　登美代
御守りを抱いているから大丈夫　イセ
家族の体守って今日の塩加減　孝子
杜氏の技死守した灘の生一本　桂香
青息吐息で守っている家業　信子
バス停で暑さ寒さも耐えて待つ　章子
学園前バスふくれたりへこんだり　俶子
百円でばあちゃん拾う路線バス　美花
和歌山城眺めてバスが心地よい

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川﨑ひかり報

鳥さえも通わぬ玄海の勝ち戦　あきら
空は青自由に泳ぐ島の群れ　はつ恵
朝の海独り占めしたユリカモメ　八重子
大型に呑まれ閑古鳥鳴く小店　放任
懸命に生き抜く小鳥餌をやる　いさむ
巣立った姦し障子に舞うツバメ　弘
巣立ちゆくヒナに無限の空が待つ　ひかり

竹原川柳会(広島)　古田　太虚報

復活はガレキ一本持った朝　規代
被災地の鰹が跳ねて活気づく　弘子
いく度の災害復活した日本　房子
被災地の復活願う世界の瞳　淑子
缶ビール明日は復活するつもり　比呂子
復活の海に漕ぎ出す力瘤　敬子
オペ終り生への復活心意気　年子
敗者復活誰にもきっと来るチャンス　ヒデコ
何もかも委ねて運を信じよう　笑子
一枚の絵から幸運始まった　蘭幸
やってみる運良く出来るかも知れん　半徳
ふり仮名のように貴方に添うた運　静風
運命と言うには過酷被災者よ　汎美
披露宴父は涙の酒をつぐ　栄恵
菅内閣派手な宴の見えぬまま　力

佳句地十選（9月号から）

奥　時　雄

皆の衆洞窟掘って涼もうよ　石花菜
キャンプに来ても酒呑んで眠るだけ　盛桜
五欲というとても素直な声がある　あきこ
沈黙へ言わぬでもよい事を言い　清帆
意地悪が言いにくいこと敢えて訊く　かずお
もう少し押さえてモノを言うてんか　勝弘
大袈裟になって困っている些細　次郎
ゆっくりと回る時計が欲しい歳　哲男
厚化粧くらいに負けぬ深い皺　正和
負けてとは誰も言わない薬代　水歌

短夜の蛍の宴三つ四つ　京子
宴果てたような男の厨房よ　輝恵
歓迎の宴初初しさ光る　慶子
飄飄と鬼の宴に座る夢　千代美
宴にはいつも亡夫の影がある　幸子
夕焼けの水平線を見る岬　一路
岐路に立つ度降りてくる天の声　厚子
間違ったままで覚えている漢字　栄香
夏本番入道雲に届きそう　史子
プレゼント喜ぶ君が見たいから　千枝

川柳塔打吹(鳥取)　野口　節子報

毒にでも薬にもなる放射能　陽之助
想い出の町をこわした放射能　美代子

見えぬから怯えて暮す放射能　龍枝
小言言う妻から受ける放射能　芙美子
紫陽花を泣かせる黒い雨が降る　美ッ千
無知無能無色無臭の放射能　くにこ
豆選ぶ母の背中はまんまるい　美知江
一票へこんなはずではない政治　ひかり
選びぬきやっと貴方に会えました　紀美恵
逝く時の季節は春と決めている　いさお
選ばれて人の形で生かされる　照彦
星印サッポロ生で生き返る　貴恵
涼み台胸ときめかせ星あおぐ　久芽代
星空に九ちゃんの歌口ずさむ　善江
星の下良くも悪くも生きるのみ　盛桜
金星をとってふんどし引締める　禎元
宇宙からリストラになる流れ星　富恵
空へ空へ蛍が昇り星になる　芳光
父母きょうだいあの人もみな空の星　和子
流れ星急いで願いとなえます　悦子
東北に二万余の星仲間入り　道子
クラス会星の王子が来ていない　玲子
織姫に今年も逢えませんでした　玲坊
節電を喜んでいる天の川　公恵
願いごと聞かずに消える流れ星　泰輔
短冊をつけられ星も忙しい　泰山
母は皆星の卵を産んだはず　三津子
過って灯油をついだ船外機　重忠
過ちで済まぬ原発見えぬ敵　清
原発は過ちだらけ繰り返す　螢
過ちを庇ってくれる恋女房　義人
過ちを認める人は許される　勝憲
過ちのない人生は幅がない　滋
迂闊にも主役を切った花鋏　たけ代

松露川柳会(鳥取)　小西　雄々報

子供の声村にひびいて弾みあり　節子
声かけて元気たしかめ安堵する　久子
神様の声は一度の聞いてない　智恵子
別れても心に残る君の声　鈴枝
裏声で歌いつづけて頂点へ　公美枝
クラス会乙女の声に様変わり　弘子
感謝する気持を声に出して言う　和代
笑い声絶えぬ茶の間のある温み　静江
見破った疑似餌を笑う声がする　正光
　　雄々

川柳塔みちのく(青森)　小寺　花峯報

下駄の音カラコロ鳴らしホタル追う　小とみ
雲間から今日も良き日と夕陽のび　信子
帯ほどく衣ずれの音牡丹散る　一湖
憶測で反感買って友が去り　つとむ
海鳴りの子守歌ではもう寝れず　初江
僕らしい味になるまで一直線　呑舟
ケータイを鳴らし孤独の壷に入る　柳子
直線を歩く笑って笑われて　ひとし
盆間近か恋しい亡妻に鳴らす鈴　芳生
憶測であなたの過去をあばかない　隼人
直線で結ぶと近い君と僕　則彦
満月が朧になって泣く羽毛　一呑
小さいが澄んだ音色の鈴にする　ふさゑ
応援にりきみ鳴り出す力瘤　花匠
築城を祝うネブタの笛太鼓　雅城
できたてのふわふわ饅頭邪気がない　愁女
事故診断癌だと決めて不眠症　井蛙
強くなるために口笛上手くなる　黙人
直線を引かれた孫の誕生日　花峯
焼け太りまた建物がデカくなる　慕情
イケメンと言葉交わしただけなのに　一花
ふわふわの蕾だいのち抱いている　劦

川柳らくだの会(鳥取)　岸本　宏章報

世界中なでしこジャパン勇気まく　仁子
ジャガ芋がかなりの出来と一人笑む　冨貴子
叶わない夢にはしごを掛けてみる　清
ベンチから叫ぶ役目もある補欠　せつ子
一家言持つと言われて溶け合えぬ　大鯰
セシウムをかなりの人が食べている　宏章
慈悲深い土は枯れ木を抱いてやる　盛桜
下戸ですがやってみたいなはしご酒　都
ねむの花小豆蒔きだと急かされる　寿賀子
チャンネルのはしごしてます韓ドラマ　玲子
かなりいいほめられたって負けは負け　邦昭
外されるはしごと知らず登り切る　孝子

川柳ふうもん吟社(鳥取)　夏目　一粋報

被災地のギャップを救うのは愛だ　洋々
子守唄わすれていない真人間　無限
紙おむつしてますしびが悪いです　とも湖

分裂も起さぬ様に和をはかる　雅女
真人間ばかりの船が難破する　地佳平
ギャップなど無いと思って居た誤算　秀四
溜息の先にギャップが横たわる　美恵子
見ぬ振りをするから見たと思われる　清信
愛してるしびが悪いよ言うもんか　春名
分裂は遺産分けです愛と憎　一瑶
お見合いの写真ギャップがあり過ぎる　一京
越中ふんどし前とうしろを間違える　蟹郎
女風呂場所間違えてしび悪い　孝二
真人間になって親分塀を出る　美智代
腹の中見えないままの真人間　回春子
デート中ひょっこり妻と出っくわす　圭一郎
むつかしい十七文字意思表示　節子
真人間なんてこの世にいるもんか　稔
復興へ政治分裂しておれぬ　昌鼓
分裂は国の為ではないらしい　妻子
内輪もめ分裂すると奈落だよ　孝男
腹の中吐き出したくて筆をとる　清帆
おくやみ欄チェックするのが日課です　凱柳
被災地の球児ギャップを乗り越えろ　金祥
ギャップから今の自分が見えて来る　はつ江
重力のギャップこんなにある宇宙　美雪
学歴も給与も齢も妻が上　毅
本家と分家ギャップ埋まらぬままでいる　茂登子
歳ですか脳が分裂しほうだい　善夫
いつまでもギャップなど無い夫婦です　振作
生きるため時どき呼吸整える　菊花
真人間に飽きてしまった狐たち　大鯰
嘘ついたことはあっても真人間　喜子
酔いたん坊も酒が醒めれば真人間　隆浩
愛してるしびが悪いが言いました　一粋

ローズ川柳会(兵庫)　木村貴代子報

喜べばまな裏で見る虹の色　藍
切りたくない声聞くだけでいい電話　貴代子
きれいだな虹はみんなを和ませる　義子
虹のかけらは今も大事にとってある　年代
ケータイを持たぬ自由を大切に　みつ子
お互いに元気分け合う電話する　哲子
あきらめないぞ覇者には虹もかなわない　いわゑ
それでいい虹の彼方にある明日　てる

川柳塔なら　坊農　柳弘報

無い袖は振れぬと悟り楽に生き　さざ恵
工面した努力に愛の巣が宿る　隆之
転ぶたびどっこい燃える馬鹿力　ふりこ
原発の恐怖神さん言うてはる　博一
ぎりぎりの妥協で抜けた倦怠期　堅坊
被災地へ工面の品を送ります　太郎
昭和の味です袖からの駄菓子　信子
転んでもまた転んでも挑む坂　洋子
転んだらわかるほんとの人の情　萌子
日本中活断層で抜けられぬ　紀雄
転んでも小さな石を握ってる　寿之
喜寿過ぎて未だ抜けられぬ色と欲　弘風
ドラゴンもすぐに転んだ上目線　(江)勝弘
一寸だけ抜けて人間味を出す　比呂志
底抜けの妻の陽気に救われる　恭昌
筒抜けの話へつのりゆく不信　理恵
やり繰りの上手な妻にシャッポ脱ぐ　満作
七変化舞台の袖で待つ衣装　(中)勝弘
三角で転び四角で起きる今　惠美子
幼さがふっと顔出す舞妓さん　修
引き際の美学を知って座を抜ける　隆盛
やりくりの苦労を母は丸く飲む　國治
子育てへ工面していた割亨着　賢子
底抜けの善意がドナーから届く　良一
底抜けに笑った顔にする遺影　郁夫
満中陰母の形見に袖通す　克己
路地抜けて抜けて探している昔　美千子
ここ一番内助の功でする工面　朝子
望郷を舌に転がすくにのお茶　一風
よく切れる頭も工面つかぬ金　完次
前転後転みごと柩に着地する　芳子
激流をころがり男丸くなる　富子
生き抜いた昭和の太いふとい指　道子
人間の闇を見つめて来た工面　美智子
色即是空酒と女と袖の下　柳弘

川柳塔鹿野みか月(鳥取)　福西　茶子報

なごやかにうれし涙を流し合う　螢
食って寝る度に阿呆になって行く　盛桜
恩返し出来たと思うことがない　実満
ころっといける念仏を繰り返す　(鹿)節子
ありがとう繰り返したくペンを持つ　久枝
いくばくの恩に報いる一善を　弘子

戴いた恩をなかなか返せない　(西)和　子
あした食う瓜をカラスが見ています　稔
六根しょうじょう野心を捨てて山登る　彩　子
ほどほどの恩を肥やしに生きている　照　彦
世渡りへ七色の声繰り返す　忠　良
横着でないぶらぶらすると犬が吠え　蟹　郎
そむかない土と知ってる父の爪　美恵子
私に輸血の恩は命がけ　孔美子
瓜も芽をつまれて身なり整える　富久江
瓜の芽を摘んで摘んで実らせる　八　重
ビール漬け胡瓜ほんわか酔いそうな　(岸)和　子
姉の背も亡母かと思う瓜二つ　くに子
穏やかな顔でときどき毒を吐く　茶　子
もろもろのご恩で生きてきた老後　重　忠
同窓会恩師は呼ばぬことにした　はるお
なごやかな言葉にこころ救われる　永　子
絵画にもなごやかな性表れる　露　子
なごやかに父母と夕餉の里帰り　惣　子
なごやかな風に集まる立ち話　美代子
いくたびの我慢重ねる腹の虫　満
僕はまだ戦うつもり石を持つ　小　鹿
瓜かぼちゃ私の手入れ成長期　かおる
なごやかな水面に石を投げてみる　(野)節　子
店先に並ぶ瓜にもある序列　いさを
高のぞみ瓜しか成らぬ夢がある　京

川柳塔まつえ吟社(島根)　相見　柳歩報

八十年級る人生稿模様　幸　代
人生模様描くデザイン模索する　淞　丘
鍬の手をせかす西空雲模様　左　余
水郷祭湖面へ映る夏模様　ちえこ
曇りのち晴れ人生模様仕上げたい　草　庵
ひと言が心の奥に雨模様　幸　子
今日も又人間模様見る紙面　桂　子
さあやるか心模様に色がつく　柳　歩
私の血純粋ならば差し上げる　ゆ　き
騒ぐ血を鎮め弁解聞いている　久　枝
血縁に警察官がふたりいる　博　子
娘と孫が瓜二つなんだか嬉し　禮　子
血液型おんなじ人と盛り上がる　凉　子
徘徊の姑血眼で連れ戻す　玲　子
争えぬ血筋酒好き祭好き　澄　子
酒五合まだ名調子止まらない　注　湖
内緒ごと口止めされる二度三度　政　子
古時計もう休んでもいいんだよ　昌　枝
カーテンを閉めてのっそりコップ酒　たけし
カーテンは二人の距離も知っている　民　子
カーテンを破ったあなた付いて行く　とも子
カーテンも連れも傷みが酷くなる　芳　恵
歳甲斐もなく豹柄が好きになり　治　代
母のいぬ故郷泊まる事もなく　千　里
泊り客宿の浴衣で口説いてる　孝　流
連休の我が家はいつもプチホテル　美智子
ベッカムとならいつでもお泊りOKよ　寿　代
山小屋に泊まって星と近くいる　知恵子
無断外泊一度やりたい婿養子　弘　充
素泊まりを知らないだろう天皇家　芳　山

南大阪川柳会　吉川　寿美報

もったいない写るテレビを廃棄させる　正　春
アンテナが聳えて地デジ完了す　柳　伸
地デジ地デジと今年の蝉は鳴き叫ぶ　克　己
地デジより今日のご飯がない独り　一　歩
あの人の胸にこの矢が届かない　郁　夫
煽てると二つ返事のお人好し　東　吉
煽てても踊らぬ芯の強い人　直　子
新社員煽てるままに軽い尻　とし子
老人の役だ煽てと知ってても　シマ子
手の平の夫おだてたりなだめたり　恭　昌
補聴器をはずして暫し無に還る　直　樹
遠い耳悪口だけはよく聞こえ　庸　佑
大型の地デジは毛穴まで写り　ひさ乃
無事写る二十三日午後0時　直　子
今日からは大きな顔をする地デジ　太　郎
行ってみたいプラハウィーンブダペスト　勝　弘
一度だけそんな煽てに乗りました　あおい
鎮魂の祭だろうか遠花火　志華子
夫とは違った空の星になる　弘　子
遠目には皆な美人のサングラス　清
煽てると気前よくなる太っ腹　なぎさ
恩讐越え恩師に遠いこの一句　たもつ
直球は投げない僕の処世術　昌　紀
魁皇の辛苦の記録おめでとう　弘　泰
さあ祭りだきりっと締めろ六尺だ　ばっは

転んだらおしまい大地踏みしめる　ルイ子
いい風にめぐり会いたい切符買う　更紗
なでしこが季節待たずに花咲かす　忠昭
水分を採れと言うから大ジョッキ　和雄
お隣りで腰据えている福の神　(喜)修
憧れのパリも日帰りマッハ4　弘風
倦怠期ときどき妻のプチ家出　柳弘
生きて行く節目節目になる踏絵　集一
薬より歩きなさいと言うカルテ　楓楽

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

下ったら上れぬ坂がやってくる　見清
自転車はもう止めようか坂の街　春代
尾道は文学と猫坂の街　公子
早く吹け秋風を待つ登り坂　純子
下り坂膝は笑うが涙顔　順子
さりげなく妻に合わせる坂の道　郁子
抜け道を風と共有坂の街　黒兎
かなうなら被災の海よ妻返せ　長一
かなうなら竜宮城で暮らしたい　幹治
かなうよう努力した日が光ってる　桂子
叶うなら皺を伸ばしてつけ睫　康子
ローン一杯抱えて叶うマイホーム　美智代
年金に適う暮らしに切替える　扶美代
さくさくと足音残し浜駆ける　正子
優勝をなおも信じてトラファン　契子
七年も潜んで地上蟬の穴　柳童
指きりはしたが約束それっきり　久子
どれにしよう閻魔の前で脱ぐ仮面　勝

城北川柳会(大阪)　伊達　郁夫報

被災地に光を放つ初鰹　隆男
合わす手の隙間で放つ蛍の灯　千恵子
ITの進化なるべく遅くして　榮子
衣食住どの限界も越えて来た　妻子
すれちがう風は優しく肩なでる　佐津乃
信念を曲げずに生きた木偶坊　満作
議事堂の瓦礫撤去も捗らず　縣筰
家族の中でなるべく先に逝くとする　ルイ子
三の矢を放ち息の根止めに来る　郁夫
目配りをしつつ家族を放し飼い　杁香
赤い糸結び直して行く夫婦　義昭
矢を放つ心で怒り投書する　求芽
あなたとは偶然だとは思えない　勝弘
黙礼してカードが通る義援箱　とし子
憂いの日もなるべく笑顔作ってる　美智子
財布にはバンクカードのある余裕　弘風
なるべくは妻にはいはい言っておく　宏
生きろ生きろと診察券が騒がしい　正子
燎原に原発ノーの火を放つ　一歩
節電へレッドカードがよく喋る　野鶴
裏切られた女心が火を放つ　倫子
金のことはなるべく知らん顔しとく　修
ビードロの風鈴熱帯夜を捌く　柳弘
なるべくと言われ半分期待せず　昭
自分史の伏せ字の裏にある懺悔　直樹
期待する花へなるべく肥減らす　典子
青い空心の欝を解き放つ　志華子
幸せのカードあなたを離さない　朝子
表札裏向きカード破産をしたらしい　たもつ
パンドラが原発の箱開けたがる　正
なるべくなら性善説を信じたい　和夫
清流へ放つ稚魚へと持つ期待　寿子
実印とカードを妻が離さない　集一
風穴をあけてわたしをやわらげる　葉子
なるべくなら妻も元気で留守がよい　賢子

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

肉じゃがは肉じゃがに合う器です　泰子
大盃で見事絵になる黒田節　一幸
度量人も背を丸めて万歩計　ミヨノ
大器晩成今は曾孫に期待する　勇太朗
寄り添って似た相になり半世紀　みちる
八卦見もハッとするよな面構え　敬子
いい人相と自信をもたす占師　薫風
眉間には人生写す鏡あり　克衛
やさしい心奥に秘めてる鬼瓦　やすの
お年玉硬貨よろこぶ孫がいる　三楽
夏休み孫はメールでごあいさつ　昭好
現金で白星買って追い出され　楽鬼
現金を握って妻は神となる　重風
嬉しくてしわのお札を寝敷する　

川柳塔唐津(佐賀)　仁部　四郎報

嫁ぐ子の幼な日偲ぶ写真集　高明
夕立に湯気がたちそなアスファルト　勝視
なでしこの女勝ったねアメリカに　實

亡妻に似た入道雲よ消えないで　輝夫
逆もまた婦唱夫随は真であり　四郎
出来た句を前に徳利傾ける　蜂朗

いずも川柳会(島根)　佐藤　治代報

のこのこと二つ返事の軽い腰　志げる
治るまで受けとめてやる抱いてやる　登貴枝
胸の中消せない影がひとつある　敬子
驚いてぴたりと止まる風車　歌子
のこのことくの字の影がついてくる　幸子
のこのこと又やってくるのれん街　シゲ子
正座した影も小さくなった母　治代
付いてくる影がわたしを離さない　桂子
驚いたあの年よりもボランティア　蘭水
世直しの勇気を持った顔がない　あきら
美人だが涼しい顔して嘘をつく　弘子
泣き止んで涼しい顔で逢いにいく　玲子
のこのこが来ると半日棒に振る　きみえ
治すまで横向いている菊人形　美代子
飲み放題のこのこ出かけ高くつく　夢生
治したい愚かな私カツ二つ　英子
のこのこと出て来て坐る椅子がない　孝亮
お互いの短所を許し合う夫婦　煩悩児
ポックリと親友が死ぬ知らせ聞く　房緒
驚いて見せると極秘まで漏らす　熊四郎
治す歯が無いのにうずく乱れ髪　佳子
電光に一喝されてガン治る　祐次
治っても又騒ぎだす恋病　たえこ
のこのこが来てバランスが狂い出す　喜子
ついてくる影は私を裏切らぬ　美千代
のこのこと千の星など引きつれて　健柳
のこのこと用事ないのに来るお客　キミエ
驚きを土産に持たす子の錦　妙
性分で治ったらすぐ無理をする　昌枝
涼しさは金子みすゞの「蝉のべべ」　寿美
十億円ポンと寄付した人がいる　ちえ
あの人と添えば治ると医者が言う　茂美
米寿とは驚く若さ働き手　左余
後遺症まだ治らないキノコ雲　ちかし
雨の日はのこのこ廊下拭いている　文子

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

懐かしい声に話が長くなる　久子
柿も人もいつしか甘く枯れてゆく　美緒子
甘い水なくて蛍が来てくれぬ　純子
人生の岐路に合図の笛がない　文子
ふたりして合図のしかた決めていた　美沙子
足跡は風のたよりで届けられ　哲男
被災地で悲しさ飛ばす盆踊り　稠民
目で合図そうかそういう仲なのか　真由
母となり娘は堂々と胸を出す　啓子
御先祖の足跡残る瓦礫下　多美子
見通しの甘さが産んだ難しさ　開子
甘党というむつかしい御接待　可住
帰省する皆に会えるお盆月　かほる
甘酸っぱい想い出遠くなつかしい　幸子
万緑が目にやさしくて癒される　照代
子や孫にたしかな足跡残したい　美智子

長柳会(大阪)　坂上　淳司報

握手など誰がするかという拳　淳司
嫁姑妥協の春は孫誕生　マサ
無策でも延命策は目を見張る　光弘
ざわざわと平和に育つ砂糖きび　輝子
円満は僕の妥協が保ってる　ヒロ
資金繰りじっくり出来て火の車　靖博
妥協する意地が横からノーと言う　武男
産声を上げた時からやんちゃくれ　篤
身に余るお言葉生きているうちに　正博
残された母の言葉が力貸す　孝代
原発が砂糖のように見えた蟻　弘光
スタートに戻り老い路のマイペース　三和子
妥協して夫の席が狭くなる　たけし
相談に耳は貸すけど出ぬ答　隆彦
胃袋にチョット貸したい消化剤　エミ
喉元で出せず留める嫁の愚痴　加修子
砂糖と塩がいい按配に母の味　敬二
歩み寄る心で丸い一つ屋根　久美子
昼の鬱甘いケーキに閉じ込める　一慧
負けて勝つ妥協おしえた母だった　正一
今日だけを思いスタート線に立つ　芳野
貸した物だけは覚えている不安　ふみ
未練です私の心貸したまま　明子
いつ迄も貸した小銭は忘れない　幸子
争いの火種が眠る貸金庫　和子
妥協して貰った嫁に城取られ　正子
もう一度逢いたい人に貸した傘　英美

友に貸す帯がくやしい程似合い　けい子
神さまに貸してもらっているいのち　和代
お地蔵もレンタル街の地蔵盆　正美
激闘のゴングヒト科と放射能　直樹
政治家の群がる先に砂糖壺　もこ
人間に貸して汚れてゆく地球　冨美子

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

試着室お似合いですについゲット　百合江
今ならば少し昭和へ戻せそう　美千代
間違えると大変だからシオと書く　遡行
推稿もいいがさっぱりせぬ頭　幸子
肩書が付くと男は生き返る　かつ子
オーダーは大きな声で頼みます　雅美
来世では家事も育児もお願いネ　まみ子

西宮北口川柳会(兵庫)　小林　わこ報

風向きも潮目も読んで波乗れず　浩司
惑うのは風の所為ではないのです　喜明
ふわふわと夫のくれるうちわ風　ひとみ
ひぐらしに少し秋風予感する　弘子
涼風の情けもあって夕暮れる　義子
出来る奴急所外して攻めてくる　盛夫
匿名のペンが急所を衝いて来る　野鶴
愛の字が急所に貼ってある絆　哲男
人生の急所に友の手があった　直
急所には錆びない釘を打っておく　比ろ志
ネジ一本抜けて急所が守れない　光久
お互いの急所を知って許し合う　いわゑ

虎の巻解を省いて答のみ　基輔
前略でたった一行金送れ　茂
省きたい人もいるけど民主主義　勝弘
簡潔な省略法にある余韻　折抗
省略の街で弱者が屯する　秋果
四季のうち省いてほしい熱帯夜　求芽
しきたりを省いて嫁に任す盆　キヨミ
手間ひまを省きひとりの夏料理　光子
叶えたい夢あり今を省けない　わこ
戦力外通知されても振るバット　淑子
手を抜いて素材生かした料理です　りこ
ギラギラの舗道打ち水涼を呼ぶ　毅
ギラギラと燃える目付きのチャレンジャー　武臣
復興の汗ギラギラとボランティア　敏夫
ギラギラを集めてつくるエネルギー　宏造
ギラギラと額の汗が競い合う　玲子
脂ぎる仮面の下のしたり顔　千代
球児には地元に見せる汗がある　順子
八月六日午後少年は戻らず　哲夫
体力は無いが根気で日日暮らす　奮水
ジイちゃんもゴーヤ日記をつけてます　正和
灯がにじむ帰れないかも知れぬ街　美津子
八月の海凪いで祈りが深くなる　嘉代子

はびきの市民川柳会(大阪)　徳山みつこ報

胸板の厚さ夫へ頼り甲斐　泰子
廻る寿司板前いらぬ機械化へ　フジ
板前を目指してシャリを握る日々　雄太
俎板の鯉にも夢があったろう　佳代子

立て板に水の弁舌聞かせない　章司
「脱原発」でっかくかいたべニヤ板　いさお
大きめの日傘に老いの安らぎて　美喜
片方が鳴くとこっちの蝉も鳴き　獏沓
蝉に負けず脱皮をしたい顔の皺　りつえ
写経の手止めて聞いてる蝉の声　庸佑
終戦の日も蝉がよく鳴いていた　敏
節電のヒト科を笑う蝉時雨　ダン吉
夏バテを蝉のしっこに冷やかされ　淳介
うんざりです愚痴聞く耳は持ちません　ヨシ枝
渋滞にうんざりしても旅はいい　喜久子
節電にうんざりしてるこの暑さ　アヤ子
もうたくさん足を引っ張り合う政治　登志子
うんざりなんて言ってる時でない地球　扶美代
お宝かゴミか出てきたソノシート　光男
シートノック夢はやばやと甲子園　久仁子
迷いある優先席のまだ六十路　ちづる
月光へブルーシートが訴える　みつこ

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

鼓笛隊と手旗で送る蟹の船　蟹郎
逆風も工夫次第で船進む　圭一郎
船酔いに旅情すっかり水の泡　公子
仏壇を磨いて盆の客を待つ　完司
節電に盆提灯は辞退する　はるお
復興の兆しうれしい夏祭り　茶子
盆踊りした場所今は幻か　たぬ
盆過ぎりゃさあ稲刈りだ鎌を研ぐ　稔
大トラがお盆一つでかくし芸　幸安

台風の道に住んでる低い屋根　忠良
近づいて低い声です内緒事　節子
飛ぶチャンス狙って体低くする　一瑶
原発のうわさに低く穂が垂れる　菖子
露の身に染みこんでいる情けあり　螢
人情の薄いこの世で風邪を引く　一京
車椅子に人情の手を添えてやる　重忠
愛情をたっぷりかけて裏切られ　昭弘
感情は表に出さずなかまいり　雅女
強情と言われた少女丸く老い　和子
情報の海カリスマも難破する　美恵子

あかつき川柳会(大阪)　山本　柳昌報

意見をすれば国を出るぞとドラ息子　鈍甲
保安院ブレーキとアクセル間違える　紀雄
原発事故ヒト科の無能知らしめる　正
復興へ支援ふっとう甲子園　たもつ
消費税上げる足並みだけ揃う　哲男
夏休み急に家族が増えたよう　シマ子
海亀の涙に産みの辛さみる　秀夫
日焼け止めたっぷり塗って荷物番　忠昭
根回しで五十四基も日本国　美世子
現実にかすみをかけて生きている　柾子
現実に蓋して神話撒きちらす　宏
現実はSFよりも無残です　武
理想と現実落差を埋める汗の量　敏子
現実は私が主夫で妻が翔ぶ　克己
現し身よ風呼ぶことは透けること　雲水
光沢が失せた男の更年期　遠野

蛙の子磨けば光る蛙飛び　たかこ
命懸け磨きをかけた彬の句　房男
頑張れる靴を磨いて八月忌　昭
人間を磨き仏に近うなる　朝子
残酷なはなし磨くと煙吐く　公誠
一言の意図を磨いてから会話　森子
節電に協力しないパチンコ屋　義
震災遺児だれを頼りにして生きる　一歩
飾らない言葉で海は凪いでいる　柳弘
網渡りの技を磨いている両手　太郎
花瓶の底に見えない鬱がよどみ出す　廣子
えらいこっちゃ妻の花瓶を割ってもた　まつお
なでしこに花瓶は要らぬ野が似合う　和雄
生きとし生けるものの悩みを知る花瓶　美籠
捨てられて栄枯盛衰知る花瓶　桃花
野の花の笑顔が好きな備前焼　華
病室の花瓶は全て知っている　愿
原爆忌せめて花瓶に白い花　いさお

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

さぞ若くなったでしょうね恋をして　紀乃
放射能浴びても生える草みどり　郁子
子の自我が芽生えてママは大慌て　(岩)玲子
子の信念我慢強さに父も折れ　庸佑
津波にも放射能にも負けぬ草　行兵衛
行くあてがあるのだろうか蝸牛　きらり
うるさいが鳴かぬも淋し蝉しぐれ　幹治
妖術は使えぬけれど魔術なら　(永)玲子
取りあげた酒を墓前に注ぎに行く　由美子

まんまとはまるすねて甘える妻の術　佐和子
花いっぱいさぞや優しい人だろう　雀舎
意識して優先座席避けている　美津子
穂希なる名前がきっと流行り出す　歌留多
継続は力我慢のままでいる　隆
宝石は子供ですよと言った妻　堅坊
震災後さぞ怖かろう波の音　美籠
もう少し世間がよくなってから逝こう　求芽
復興へ戦後と競う震災後　遠野
ひこばえが大きく育ち山動く　美智代
羊水の中で会得の泳ぐ術　美義
魚一匹さばくごときに手術され　満子
あの世へはそっと手ぶらで行くつもり　則彦
これ以上もう無理ですと妻のメモ　幸雀
プレートのせいです海は悪くない　見清

富柳会(大阪)　古田　千華報

恋が抱きつく稲妻のチャンス　欣之
大好きで神様にまで楯をつく　扶美代
おねだりがすんなり通る日を選び　昌
天から試される一日いちにち　未知
すんなりと言えばこじれる事はなし　七朗
丁寧に生きて明日をまるくする　華
リストラの切符手にしてから無口　和子
奥方がすんなり黙る手立てあり　田鶴子
些かもぶれぬ背骨の父である　恵
プレミアの価値薄くなる巨人戦　壽峰
肩の荷を少しおろした昼の月　紅紫朗
今少し肩肘ぬけば旨いお茶　よしみ

まだ少しためらい傷が残ります　浩子
約束という切符はいつも光ってる　アキ
もう少し一会の風と踊りたい　信子
借りた傘美しすぎる新樹色　千華
歩こうと思う元気のあるうちに　登子
ふるさとの風が越せないうしろ指　鬼焼
最後かも知れぬ二人の旅切符　伸雄
ふる里は遠い未来へ灯を点す　千恵
縄電車葉っぱの切符で東京へ　深雪
元彼の恋文処分踏み切れず　武人
聞き流すことの上手な頑固者　彦次
片道切符いま神風になりました　奏子
すんなりと聞けない耳を持ち歩く　寿之
いとおしくすんなりした指そっと咬む　高鶯
風吹けば情に縺れるかやなぎ　森子
すんなりと伸びた手足にない躾　寿之

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

咲かせたい脱原発はなだ蕾　鬼一
つまづいた足の開きがままならぬ　賀寿恵
大臣の頭全頭開きたい　次男
開いても今の国会見たくない　龍枝
お開きにしてからはずむクラス会　智恵子
被災地は窓を開けれぬ放射能　貞子
よっぱらった私確かにアホである　完司
傾聴で確かに変わるあたたかみ　康子
家業つぐ孫が確かになりました　重忠
雑草の強さ確かに継ぐ血筋　茶子
人はみな確かに終着駅がある　酔芙蓉
なでしこは確かに咲いた世界一　祐子
預かると預けるのとは大ちがい　けいこ
子を預け出かけた嫁が戻らない　由紀子
売れもせず先祖の田畑預かって　日出子
ふところに命預けた児はねむる　節子
妻旅行留守を預かり不便だよ　泰輔
次世代のバトン預かる小学生　風露
石垣が残る名家の夢の跡　喜美子
有名になりたい歌の稽古する　螢
湧き水を有名にして金儲け　美代子
有名な人も三途の川わたる　よしえ
五右衛門は釜ゆでになり名を残す　悠子
有名になって汚点をかき出され　萩江
有名になってお墓の下にいる　照彦

高知川柳社　小川てるみ報

騙し騙されだからこの世は面白い　典雄
騙された時効はないと妻は言う　勝重
バツ3と騙し男を遠ざける　千恵子
誠実な素振りまんまと騙される　てるみ
遠近両用どこかで嘘が笑ってる　哲史
やむを得ず騙す日もある聴診器　三郎
騙す気はないが相手が疑わぬ　暖
騙すつもりで胃薬を飲んでおく　和広

岬川柳会(大阪)　八十田洞庵報

満月も議事堂照らす恥ずかしさ　茂平
年ごとに席ゆずられる数ふえた　圭子
蒸し暑さ被災地思う扇風機　富美子
震災の地元賑わす初鰹魚　冨美
八百八橋四つ橋線で逢うた恋　和美
復興が聞いてあきれる辞任劇　清一
ラスカルの訪れまだ拍子抜け　覚庵
お母さんただいま帰る里も消え　寛
質問に鋭意努力と言う返事　東吉
里帰り母と一緒に見たひばり　和香
アルバムに思い出めぐり偲ぶ夜　礼三
根性なくビール注ぐ手震えてる　令子
故郷へ帰ると若さ目をさます　貞夫
写経する祈願の一００枚あと少し　峻史
根性と勇気で築く被災の児　桜琴
里みやげ一つどうぞとさくらんぼ　悦子
渡り鳥落伍の友は何羽だろ　洞庵
ねじり花見たくて今朝も同じ道　洋子

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

議事堂に春の霞が輪をかける　すみえ
忘れずに非常袋に酒と水　紀の治
ありがとう胃カメラのんで異常なし　登美枝
たまに母はわすれたふりの芸をする　未延子
夕立にぬれて行こうと犬が言い　宏之
ナスの花実になりますと約束し　多美子
真夏日に熱いお茶飲みすっきりと　欣子
今のうち物忘れして身を軽く　正二
帰省する子らに泳げる海が待つ　礼子

東北に花火が上がる喝采の　ふみ
おだやかに行こうそんなに尖らずに　公一
小間切れをつないで幸せを作る　盛桜

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田　毅報

虹の橋渡り逢いたい人あまた　みつ子
垣根はずして飾りはずした風通し　能子
ありがとう一筆箋に飾る文字　美恵子
飾らずに自然体での人生を　和恵
飾らずに生きる雑草あきらめぬ　孝子
着飾って維持費のかかる女です　武彦
張り替えた飾り障子に猫の手が　照子
購買力そそる上手な飾りつけ　基輔
飾らない君のハートをゲットする　(山)弘子
悩みごと月に託して今日は寝る　勤
スッポンが負けを認めた青い月　茂
まん丸の月を見てたら怒り消え　康子
酔いました月様ワルツなど如何　夏子
どの月も笑いの洩れる家が好き　和郎
手をつなぎ静かに妻と月を見る　弘
雪月花妻も私も恙無い　淳
月々の医療費増えて治らない　千賀子
うれしい日お月様にも話しかけ　(飯)弘子
どこまでもついてくる月恐かった　盛夫
友の計に鬱々短夜が明ける　美穂
ごめんねと言えずに靴を磨く朝　利子
青春を返してほしい学徒隊　和子
償われても心の傷は癒されぬ　浩司
償いはガレキの山が知っている　洋一
一言を償いきれず胸痛む　忠貞
子育ての反省こめて孫の世話　妙子
登山靴紐締め直す八合目　毅
招かれてぶどうの種の置きどころ　登美子
無人島一つ持つなら鼻毛抜き　義博
健脚が自慢の夫後ろより　寿郎
傘寿来て生きる喜び指を折る　繁義
薬飲むために三度の飯を食う　武臣
たくさんの愛を背負っている根っ子　無限
レモンティーやんわり急所ついてくる　いわゑ
軽口にたっぷり毒を振っておく　楓楽

川柳さんだ(兵庫)　堀　正和報

弱いから人に紛れて生きてます　哲男
横になり帰省ラッシュを見るビール　美籠
涼感のタオルで猛暑拭いてやり　遠野
母ちゃんと恋えば仏が笑うかも　哲夫
弦のないギターに青い日を偲ぶ　彰
惚れたから背中あわせで飲むビール　菜々子
返り血を拭いて男は勝負する　朋月
しみじみと酒くみかわす偲ぶ会　祐康
ゆとりこそ転ばぬ先の強い杖　一泉
大ジョッキ底に本音がたむろする　雅司
スーパーの夫婦連れ見て亡妻想う　雄太郎
一線を越えてしまった体重計　宣子
泣き顔が微笑むまでの鏡拭く　美和子
石仏に御辞儀して生きている　順子
ねじ少し緩めて孫に会いに行く　淑子
まだこの世ふるさと恋し人恋し　ちあき
まだ私ペパーミントの恋をする　ひとみ
今も好き遺影の夫とみつめ合う　一子
涅槃図の如きばあちゃん昼寝中　キヨミ
なにくそはその他大勢から育つ　章子
素寒貧仏の顔に近くなる　忠
便秘ですしっかりビール飲んでます　正和

川柳同友会みらい(鳥取)吉田　陽子報

コラーゲン文字に眼を止め耳を立て　葵
夜通しの蛙の愛にうなされる　一聴
人の輪にまじって増える智恵袋　美江
いいニュースみなの笑顔が連鎖する　けい子
マドンナの孫の自慢にやや白け　寒之
太陽と寝起き電力足りている　陽子
七夕の星はいっぱい頼まれた　純宏
渋い茶を旨いと思う歳になり　ふみ子
後列が似合うと思う顔である　久司
昇進をめざす階段踏み外す　温子
うなされて自分の声で目が覚める　章子
ベランダで灰皿持った蛍とぶ　美恵子
情熱は老いも若きもかわりない　千恵子
植えた木が伸び伸び育ち澄まし顔　ひとみ
ひとり暮らしテレビがないと死にそうだ　みち子
舌の先想定外の風が吹く　くにこ
地デジ買う宿題済んだ気持ちする　敦子
失せ物が出てきて治る不眠症　三郎

一滴も無駄にしません化粧水　信子
駅跡に桜一本客を待つ　勝之
畑仕事満足感のある疲れ　嘉子
諭吉様おずおずと旅に出す　安子
夫の介護出来る余力を溜めておく　律子
ふるさとを潰され誰を憎もうか　勇
原発という怪物が手におえぬ　華蓮
放射能吸い込む種に望みかけ　和代
海の底悲しい玩具眠ってる　一眸
人形が熱中症になっている　はるお
むなしさを悟る人間裁いてる　菜美
人裁く目線の高さ揃えよう　遊子
転んでも七回までは許される　公弘

翠洋会(大阪)　佐々木満作報

雑魚の意地鯨になった夢を見る　昭
餌まきに行ってるような魚釣り　桃花
オバチャンの服もシャベリも十二色　真澄
カラフルな衣装が似合うおばあちゃん　舞夢
カラフルにすっとひと刷り少女羽化　弘子
カラフルなネオンが消えたこれもエコ　日の出
カラフルなネオンの街の浮き沈み　志華子
一日中動いてくれた足さする　楓楽
頭髪を労り毛染め止めにする　紀子
妻の注ぐ「御苦労さん」に癒される　恭昌
労り合って老人会の笑い声　千歩
贅沢も貧乏もよし暮し方　公平
明日のある男の靴は光ってる　正雄
なでしこに未明の日本歓喜する　げんえい
オアシス化する図書館の昼下がり　満作
送っては行けぬと母は車イス　捷也
卒寿機に自転車やめて不自由する　知之
国技館君が代に皆素直なり　善之
この会が好き柳友がたんと居る　浩二
席題に居合い抜きして立ち向う　滋彦
子や孫と昔を語る盆の夜　照子
猛暑でも平凡な日々ありがたし　みつ子

川柳クラブわたの花(大阪)　西川　義明報

日に何度自分を叱る物忘れ　ますみ
ひとり旅人恋しくて書く便り　美代子
幾山河越えて深まる夫婦愛　耀一
顔揃い法事の読経おごそかに　知佐子
コネの無い椅子に男の意地がある　民
心とこころ行きかう世界川柳は　博子
震災が人との絆深めゆく　愛子
握手して喜び合える友がいる　奈良司
海から見る山や恋しき母に似る　宏至
晴れ舞台夢見て励む馬の脚　いつふみ
遠足のおむすびにある母の愛　宏
遠花火別れの涙消して去り　義明
菅総理なに言われても馬耳東風　正春
道標山の恐さを知っている　俊子
馬合うてついうっかりと出る本音　はじむ
百までも生きるつもりで歯は自前　晴美
笑い顔みんな美人にしてくれる　浩三
頑張れと握手した手温かさ　孝子
握る手に落ちた涙があたたかい　和子
天翔ける夢みて駄馬も闊歩する　一風

川柳塔すみよし(大阪)　岩崎　公誠報

プレッシャー消えてじわじわ惚けてゆく　昌紀
本意ではない選択が続いてる　半銭
午前二時妻が寝ないで待っていた　裕之
効能を並べ過ぎると不安わく　のん子
全身で笑顔振りまく退院日　りつえ
プレッシャーとさよなら明日は明日の風　かりん
折ってみたいあの人の鼻ポッキリと　勝弘
誕生日撒いたヒマワリみんな咲き　篤子
スッポン鍋何やら効いてくる予感　まつお
二者択一私一人に任される　芳香
この鼻をトレードマークにして百歳　シマ子
念入りにいろいろ下見菓子当番　定子
入院の時から捜す転院先　(矢)五月
目鼻立ち妻そっくりで笑えない　日の出
手術後に初めて飲めた旨い酒　(奥)五月
臭わない見えない恐い放射能　美世子
きゅうりもみ私の好きな酢が匂う　たかこ
プレッシャー適量ならばいらっしゃい　正太郎
ケータイへサクラサイタをしかと撮る　庸佑
よく遊べよく学べとはご無体な　克博
余裕ある顔をするのも芸のうち　温子
はぐれた子母の迎えに泣きやんで　チヱコ
もみじマークの社長が乗れとおっしゃるの　ばっは

幾山河越えてふんわり丸い鼻　朝子
ガンバレの言葉が余計プレッシャー　賢子
衣更え内ポケットから諭吉さま　妙子
母になって母の意見が効いてくる　桃花
プレッシャーに弱い女のつけぼくろ　柳弘
プレッシャーがなんだ殺されたりはせぬ　見清
ライバルに効く切札を持っている　美籠
天狗の鼻異状気象で曲ってる　舞夢
親を看る時に泣きたいプレッシャー　蕉子
三十年満期の保険明日下りる　公誠
ひと言の威厳で諭す男親　遠野

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

寝袋に森を包んでいる男　輝子
胃袋はわたしの心見抜いてる　よしこ
白い秋詰めたふくろがここち良い　小雪
駄菓子屋の袋昭和の匂いする　大輪
野仏と同じ日傘の中にいる　精子
身軽にはなれぬ仏になおなれぬ　緑良
仏様ごめんと盆の蚊を叩く　英子
仏という動かぬものになっている　あきこ
仏にも鬼にもなれず女道　めぐみ
飲み込んだ本音抑えるのど仏　利治
出方次第で私鬼にも仏にも　克子
真実を話せば仏横を向く　准一
ほだされて仏心が邪魔をする　ほのか
忍耐を濃い目のお茶で溶きほぐす　寿子
わだかまり自然解凍させている　徑子
手を繋ぐことで溶け合う老い二人　登美代
溶けそうな夢に翻弄されている　翠子
反対をゆっくりとかす子が生まれ　紀子
溶けながらこれで良いかと考える　夕胡
プロポーズじりじりはいや直球で　佐一
魂の怒りじりじり八月忌　和香
じりじりと迫る地球の汚染体　美子
約束の時間過ぎてる長い影　紀久子
遠出する意欲じりじりせばめられ　秀子
じわじわと家も私も老朽化　智三

大山滝句座(鳥取)　新家　完司報

まだ元気かゆいところに手が届く　やえ
変わるたび小粒になってゆく総理　紀の治
生命線の長さへ保険かけておく　ひかり
つまらないことは忘れぬ変な脳　玲子
いい仕事してくれている炊飯器　宏章
口でなく顔でしっかり文句言う　孝子
靖国は英霊他は雑魚の霊　照彦
引き取ってください文句言う女　螢
ご飯どき鉄砲玉が戻らない　美恵子
飯の種どんな端役も引き受ける　忠良
バンダナが制帽ですか山男　蟹郎
樹海の果て天国が待つ富士である　大鯰
めしは空気だおかずは音楽だ　石花菜
まずお風呂ビールのついた晩ごはん　圭一郎
上向いて吐いた言葉が降ってくる　麦青
一句でも入選すれば文句なし　泰輔
御飯ですよ張り切り呼べぬ有り合わせ　けいこ
飯粒を担いだ蟻は力もち　重忠
そんな目で見ないで母の低い鼻　水歌
のんびりの暮らしが過ぎて句ができぬ　鈴野
さぼるのを暑さのせいにしてしまう　久子
熱中症寒暖計とにらみ合い　恒子
本人は自覚できない認知症　すみゑ
三度のメシだけは忘れず食べている　仁美
じじいが集う「姥捨て山」という酒場　完司

川柳藤井寺(大阪)　鴨谷瑠美子報

転んでも起こしてならぬ愛もある　婦美枝
クーラーの下に寝ころぶ午後三時　榮
わが想い曲げてころぶも生きるため　清之
転んでも起きてまだまだ立ち向かう　雄太
華やかに見せて熟女よう転ぶ　弥生
一筒さんいつもころげる句をつくる　勝弘
偉い人転ぶとなぜかおかしいな　夏子
転んでも起きる勇気があればいい　アヤ子
神さまの頭踏んだかまた転ぶ　みつこ
合併で生まれ故郷が地図に無い　雅枝
兄弟が合併すればイケメンに　昌子
食欲なし動悸に眩暈してる恋　光男
大津波神も仏もみなさらえ　武義
ときめきと合併したい女偏　アキ
合併後も旧の住所で出す意固地　シルク
凹凸を重ね合わせて丸い町　龍一
合併で派閥の渦が一つ増え　絹枝

自由席美女の隣が空いている　六点
断捨離へ「もったいない」が邪魔をする　いさお
食べ残し持ち帰りたいフルコース　ちづる
もったいないいくら飲んでも酔えぬ酒　扶美代
桶で運んだ水一滴ももったいない　シマ子
おしゃべりでイケズずばらで酒が好き　一筒
もったいないハートの雲が切れ切れに　あかり
大型ゴミ事情ありそうセミダブル　登志子
自作野菜へんな顔でも使い切る　喜代子
一滴も残さず使う化粧水　瑠美子
合併の話が進む水面下　庸佑
合併を重ねて元の名わからない　映三子
接ぎ木して一株に咲く赤と白　ヨシ枝
ころんでも怪我一つせぬ生き上手　史郎
節電はおにぎり持って図書館へ　一歩

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

忙しく記憶を辿っている真偽　亜成
世話役はとぼけ上手で忙しい　柳弘
女旅旦那はきっとクシャミ漬け　尚世
もう一度そっと体重計に乗ってみる　美江
人間の英知を壊す核の罪　秀雄
にこにこと何考えているのやら　仁清
大の字に寝てる大物かも知れぬ　博泉
矢印の無い人生という旅路　祥昭
涼しさを五感で味わう心地良さ　薫麗
ダブルベットで大の字で寝る妻と犬　とし子
カン高い声と早口忙しい　美智子
疑うのは性に合わずに信じちゃう　さち子
寝相悪い夫よくも五十年　洋
ぶらり旅風に案内してもらう　弘一
出て行って欲しいお方は旅嫌い　仁
免罪が晴れて信じる神仏　ルイ子
将来は大物大の字の寝相　郁夫
飼い猫が跨いで欠伸する寝相　修
疑えばあの日あの時から兆し　一風
幸せな人で転べばすぐ眠る　忠央
疑わず釈迦の足跡追っている　かすみ
太陽も月も疑うことがない　寿子
熱戦の拍手の余韻抱くボール　栄二
忙しい時でもふっと思い付く　三郎
疑いが解けてビールで仲直り　弘風
黄泉の旅誘うパンフは未だ要らぬ　朝子
人生の旅路まだまだ好奇心　賢子
一期一会ぬくいこころが通い合う　恵子
カナカナや忙中間の中にいる

川柳あまがさき(兵庫)　加川　靖鬼報

秋風を辿れば里の祭り寿司　比ろ志
ポリシーは元気呑気と根気です　茂幸
あなたとは不思議なご縁まだ夫婦　ひとみ
言い勝てどあとのまつりようら淋し　江美
金婚へ僕の根気をほめてやる　正和
明日逢えると寝返りばかりしています　里江
ご神灯が毎年うちの前に立つ　耕治
昼寝して夜もしっかり寝ています　朋月
暑い夏疲れて眠るいい寝息　雪菜
寝たふりで噂話を聞いている　幸香
慈しむ心に触れて夢描く　龍
寝てる顔主人と同じ笑っちゃう　あかり
しんみりと脚色多く母語る　洋子
風の盆二度と逢えない人若し　和子
リストラでしんみり手酌赤提灯　祐康
馬の足家では威張る旦那さま　五月
三猿で風を躱して生きている　キヨミ
パソコンの壊れて何の不便なし　りこ
天無情止まぬ余震にゲリラ雨　勝巳
介護未だ受けず粗食で一万歩　奮水
ダンス終え男女で涼の生ビール　柳明
一言を鏡に言わす不精髭　よしひさ
男は弱い未練を抱いてうろたえる　かずお
盆が未だ親父呑むかと仏の間　野薫
平和っていいね華麗な大花火　ヨシエ
幸せになれよと願う児の寝顔　美籠
串焼きの鮎逆立ちで睨んでる　靖鬼

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

この先をどう歩こうかたんぽぽよ　かつ子
好ききらい歩きつづけた決算書　はるみ
その話のってみたいな秋茜　好栄
日が昏れて逃げる道など見つからぬ　恵美子
日が昇る空を見上げて立ち上がる　英子
繕いが続くと五体の綻びに　ちよえ
明日まで待ってくれとはもう言わぬ　博利
同期生残らず送り一人旅　清泉

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田川柳会	**16日(日)13時締切** **第61回 市民川柳大会** 希望・一・笑う・サービス・たっぷり	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳ねやがわ	16日(日) 14時締切 お寺・影・煙・自由吟	寝屋川市立総合センター　4F　第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	16日(日) 14時締切 恐怖・こもる・作品	淡輪17区集会所　南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
西宮北口川柳会	17日(月) 13時45分締切 あかん・意地・じたばた 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分　プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3—15　亀岡哲子
豊中もくせい川柳会	17日(月) 13時40分締切 済む・裏わざ・浅い・自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳さんだ	**18日(火) 吟　行　10時30分～** ワイン・のんびり・遊ぶ・米 自由吟　各題2句	集　合：JR三田駅　南ロータリー　10:30 行き先：神戸フルーツ・フラワーパーク 堀　正和　TEL 079-559-1255 田中章子　TEL 079-559-6344
川柳塔すみよし	**22日(土)　吟　行** 指・裂ける・ころころ	不死王閣　詳細はパンフにて 072-751-3540
和歌山三幸川柳会	22日(土) 12時30分から ドラマ・早い・あの頃	和歌山商工会議所4階　第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「読者のひろば和歌山三幸川柳会」係
はびきの市民川柳会	23日(日) 14時締切 すすき・驚く・サイズ・喧嘩	綾南の森　公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳ふうもん吟社	23日(日) 13時30分締切 下品・トレード・長引く	鳥取駅　2F　シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
南大阪川柳会	24日(月) 18時から しみじみ・焼酎・ほんの 抜ける	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露川柳会	24日(月) 19時30分締切 茶碗・歯・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブわたの花	28日(金) 午前9時30分から 鹿・波・結ぶ・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1—4—8　西川義明
京都塔の会	24日(月) 14時締切 助ける・ありあり・箱	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

10月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	1日(土) 13時開場 皮肉・まさか・タイプ 自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	1日(土) 13時開場 重い・ふところ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉川柳会	1日(土) 14時締切 これ・類・鋭い	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔なら	6日(木) 13時開場 握る・勧・退屈	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳塔さかい	**秋の誌上大会** **締切 10月10日** びっくり・出来る・味・抜かる	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳大阪	8日(土) 14時締切 シンプル・情・過去	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔まつえ	8日(土) 14時締切 太陽・本音・転ぶ・ゆっくり	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織曉子
川柳塔みちのく	8日(土) 17時締切 淡白・強気・ほのぼの	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1 小寺花峯
川柳塔打吹	8日(土) 14時締切 地図・捨てる・外す	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3 牧野芳光
八尾市民川柳会	9日(日) 13時30分締切 民話・舌・磨く・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔わかやま吟社	9日(日) 13時40分締切 無・玉手箱・さらさら 果物・フルーツ	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2—1—2 川上大輪
川柳あまがさき	11日(火) 14時締切 臆病・漏れる・こっそり 自由吟	尼崎女性センター トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる川柳同好会	11日(火) 13時30分締切 他・染める・ふわり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1 水野黒兎
あかつき川柳会	14日(金) 14時締切 吹く・腹・錯覚	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳藤井寺	16日(日) 14時締切 三時・山盛り・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子

柳界展望

★全日本川柳2011年仙台大会、事前投句には一六〇二名の応募者があり、本社同人の秀句は次の通り

七夕に受胎告知と神の声　岩崎　公誠

★竹原川柳会創立55周年記念川柳大会は8月28日、出席241名、事前投句389名によりホテル大広苑にて開催、天位

桐の花母が笑ったように咲く　牧野　芳光

まっすぐに伸びて竹の子塔になる　川上　大輪

ポケットの石をころっと忘れてた　久保田千代

花束を抱くと頑固が消えている　小島　蘭幸

DNAの中には海も入れてある　牧野　芳光

★第58回八尾市民川柳大会は8月28日八尾プリズムホールで開催、参加者116名。本社同人の秀句

遺失物置場に父の忘れ物　太田扶美代

生命の神秘雅に厳かに　両川　無限

★川柳文学コロキュウム50号記念全国誌上大会は、335名の参加があり同人の特選

シャッフルで海を朧にしてしまう　木本　朱夏

☆斉藤　劦さん（理事・弘前市）は、二〇一一年春の叙勲に際し瑞宝小綬章を授与された。6月22日、東京イーストホールでの伝達式に引き続き皇居に参内し、豊明殿に於て天皇陛下よりお言葉を賜った。

☆大橋政良さん（同人・砂川市）は、第35回全日本川柳2011年仙台大会に於て、八十歳以上の功労者として顕彰された。

☆青森県川柳社、平成22年度、第41回川柳年度賞は、松山芳生さん（同人・青森県）に決定。

少年の眠りの中へもぐる　橇　ほか4句。

☆新家完司さん（副主幹・鳥取県）は、川柳マガジン8月号から「名句を味わう理論と鑑賞」と題した連載の執筆を開始。

☆8月28日、河内天笑名誉主幹、西出楓楽理事長、板尾岳人・奥田みつ子相談役他12名広島県竹原市行き。

☆読売新聞9月3日朝刊の編集手帳で薫風先生の「人の世や嗚呼にはじまる広辞苑」が引用された。

☆木本朱夏さん（常任理事・和歌山市）は9月12日、大阪府高齢者大学「古典文学を楽しむ科」で、「川柳にみる人間模様」として講演。

▽御芳志御礼△

○神夏磯典子さん（参与・大阪市）から、ご夫君の供養として金一封を拝受。

○故堀端三男さん（和歌山市）ご遺族から金一封拝受。

▽出　版△

○そうりゅう会（代表世話人・村上玄也さん）は、『そうりゅう会・句集六』B六判60頁を発刊。

▽お詫びして訂正△

▼9月号＝P3上段12行目

清川玲子→稲村遊子

▽新誌友紹介△

木津川市　**新井　弘子**
紹介者　米田　恭昌

松山市　**神野きっこ**
紹介者　西出　楓楽

箕面市　**酒井　紀子**
紹介者　久保田千代

河内長野市　**泉谷比呂志**
紹介者　松尾美智代

大阪市　**中野　幸一**
紹介者　川端　一歩

常任理事会＝9月7日(水)

①川柳塔まつり関連②同人総会について③各地代表者・役員拡大会議関連④高野山合祀祭関連⑤定例確認事項⑥各部報告事項⑦その他

次回＝9月26日(月)　PM13時30分～

このたびの台風十二号により被災された皆さまに謹んでお見舞申し上げます。

一日も早い復旧を心からお祈り申し上げます。

新同人紹介

島田千鶴子（しまだちずこ）

―楓楽・直樹・美智代推薦

第25回記念 NHK学園「全国川柳大会」作品募集

■日時　平成23年11月19日（土）　午後1時～4時

■会場　東京都国立市「くにたち市民芸術小ホール」

事前投句の課題と選者（各題2句・2人選）

雑　詠　西出　楓　楽（川　柳　塔）
島田　駱　舟（NHK学園専任講師）
荻原　美和子（NHK学園講師）
四分一　周　平（川柳三昧会）
やすみ　りえ（無　所　属）
津田　暹（川柳研究社）

①「伝える」
②「自　由」

当日投句の課題と選者（各題2句）午後12時50分締切り

④「響　く」　森　中　惠美子（番傘川柳本社）
⑤「深　い」　竹　本　瓢太郎（川柳きやり吟社）

●**投句要領**　専用の投句用紙（無料）をご請求ください。

●**投句料**　・雑詠のみ2句　1000円
・雑詠と課題「伝える」「自由」の合計6句　2000円

●**投句締切**　**平成23年9月16日（金）消印有効**

●**賞**　大会大賞作品は、文部科学大臣賞の候補作品となります。

●**投句用紙請求・問合せ先**

〒186－8001（住所の記入は不要です）
「NHK学園　全国川柳大会事務局」
電　話　042－572－3151㈹
FAX　042－572－0061

主催・NHK学園　共催・国立市

全日本川柳誌上大会のご案内（柳多留第16集）

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」（平成柳多留第16集）を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ㈳全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と共選者（各題2句・連記）

「逆　」　佐藤　美文　―　酒井　路也　共選
「明るい」　いしがみ鉄　―　三宅　保州　共選
「龍　」　及川竜太郎　―　奥田みつ子　共選
「都　」　山田　昇　―　矢沢　和女　共選
「ガラス」　弘兼　秀子　―　竹崎たかひろ　共選

第二次選者　津田　暹　佐藤　岳俊　松代　天鬼
植木　利衛　西出　楓楽

参加費　2000円（投句料・『平成柳多留』第16集代金含む）

賞　平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・㈳日本青少年育成協会会長賞・㈳全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞（予定）

締　切　**平成24年1月31日（火）（当日消印有効）**

発表・表彰　第36回全日本川柳徳島大会（平成24年6月）

参加方法　参加用紙（雑詠1句）と出句用紙（2通1組）に記入し、参加費2000円（振替又は小為替）とともに左記へご送付ください。

〒530-0041　大阪市北区天神橋二丁目北1－11－905
社団法人　**全日本川柳協会**
電　話　(06)6352－2210
FAX　(06)6352－2433
振替口座　00970－9－3575

編集後記

★軽い嘘種なし葡萄食べながら　薫風

★小島蘭幸主幹に交代して最初の六賞発表号をお届けする。受賞された皆さん、おめでとうございました。惜しくも入賞を逃した方、応募を忘れていた方、次回のチャンスを目指して頂きたい。

★今月号から編集スタッフが交代する。会計部長という重責を担いながら、編集部員としてお手伝い下さった山口光久さん、事務部と編集を掛け持ちで頑張って下さった山岡富美子さん、お二人は編集部から離れ、それぞれの業務に専任される。お疲れ様でした。

★代わって、鈴木いさお、江島谷勝弘、森松まつおが編集の中枢を担う。各地柳壇を主として黒田能子、校正要員として飛水ふりこ。以上のメンバーで誌面を作って参ります。同人・誌友の皆さんのご協力も仰ぎたいと思っています。よろしくお願いします。

★かつて「平安」という川柳結社が京都にあった。清新な作品の数々は平安調と呼ばれた。その名編集長として活躍された坂根寛哉さんが転居をきっかけに、蔵書の一部を送ってくださった。「川柳平安」が数十冊、また井上剣花坊夫人・井上信子一周忌記念号「川柳人」も含まれている。古きをたずねて新しきを知る、誌面づくりにこれら貴重な川柳誌から教わることも多い。私の血となり肉となるまで読みこなしたいと思う。

★十月十日(祝)、川柳塔まつり。アウイーナ大阪でお待ちしています。　(朱)

◇川柳塔誌を作成する編集メンバーに加わりました鈴木いさおです。

◇主な仕事は、同人や誌友の皆さんから送られてくる原稿が正しく印刷されるかをチェックすることです。

◇誤字脱字から送りがなの間違い、更には校正ミスや印刷ミス等々を、目を皿の様にして捜し出したり、四種類の辞書を繙きながら、正しい使い方が一つだけではないことを確認したりする作業が続きます。

◇この仕事を通じてつくづく思うことは、塔誌の充実には同人や誌友の皆さんの積極的な参加が何よりも大切だということです。

◇「川柳塔」「水煙抄」などへの積極的な投稿はもとより、大会案内や成績などもどんどん編集部宛てに送って下さい。　(い)

□編集長から句と作者名は一字一句間違わないようにと口酸っぱく言われながら見落としている。読み方は二つ以上の辞書で確認をと叱咤激励がいまも続いている。句もヘタ、誤字も多い私が編集部という重責に耐えうるか分からないが、とにかく挑戦をしている。

□「朝日歌壇」で話題になったホームレス歌人に興味を持っている。消えてもう二年、九ヶ月間に二十八首も入選していた。三山喬著『ホームレス歌人のいて冬』(東海大学出版社)が出版されている。著者はホームレス歌人が住んでいた横浜市寿町辺りを探したが、見つけることが出来なかったと言う。選外の一首をご紹介する。

半年余り無為に過ごして
二十首と数首の短歌を実りと思う　(勝)

○編集は月三回事務所に集合、一回目は本社句会後すぐの日曜日で、同人・誌友の投句の確認から始まる。

○川柳塔は読んではいても一冊読破した事などなかったのに、表紙から裏まで全て確認する作業は大いに勉強になる。編集長は一回目の前に原稿全てを確認済みと言うからすごいと思う。

○二回目は初稿で訂正した分の確認と再チェック。しっかり見たつもりでもいくつかの訂正があるもので、発見した時は思わずニヤッと笑ってしまいながらも「てにをは」の大切さを痛感

○三回目は次号川柳塔同人句を確認し、地域別に分け作業は終了するが、他に各自がパソコンを駆使しての作業もあり大変な部署に入ったなと思っている。(ま)

編集の苦労ふっ飛ぶ刷り上がり　金太

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（12月号）地名

都道府県
市

姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「ピリオド」　（10月15日締切）

12月号発表

池　森子 選 ――共選―― 福士　慕情 選

B　A

地名

県府 市道都

姉雅号

切らないで下さい

B　A

地名

県府 市道都

姉雅号

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

12月号発表（10月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　川上大輪選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「ピリオド」（2句）　福士慕情共選　池森子
一路集（3句）
「畳む」　太田昭選
「けじめ」　斎藤さくら選
「いろいろ」　飛永ふりこ選
初歩教室「マーク」（3句）　鈴木公弘担当

第63回　大阪川柳大会

日　時　11月25日（金）12時20分開場
場　所　大阪市立住まい情報センター3階ホール
電話 06－6242－1160
地下鉄「天神橋六丁目」駅下車③号出口
JR大阪環状線「天満」駅下車　北へ660m
会　費　1000円（発表誌呈）
「揺れる」河内　月子　選（川柳塔社）
「マナー」河津寅次郎　選（川柳文学コロキュウム）
「　外　」足立　淑子　選（番傘川柳本社）
「　底　」久保田半蔵門　選（川柳天守閣）
「野　原」小島　蘭幸　選（川柳塔社）
「しみじみ」本田　智彦　選（番傘川柳本社）
「日　本」井上　一筒　選（川柳瓦版の会）
出　句　各題2句　席題なし　締切 13時20分
賞　各題の秀句に大阪市長賞贈呈
主　催　番傘川柳本社・川柳塔社
川柳文学コロキュウム
川柳天守閣・川柳瓦版の会
後　援　大阪市

1月号
檸檬抄「ぜいたく」
一路集「織る」「いちばん」「べったり」
初歩教室「脚」

本社11月句会
7日（月）午後13時から

兼題「牛　乳」「女々しい」「茹でる」「薬」「野　暮」

第30年度　夜市川柳募集

第5回「どろどろ」　古今堂蕉子　選
ハガキに3句　10月末日締切
投句先　〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一一年（平成二十三年）十月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七
花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九－三四九〇番
振替　〇〇九八〇－四－二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十三年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇一三号　川柳塔　十月号
定価　百円（送料　八十四円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－10